

苦力の話

一 護護の經營は、土地や選種は無論根本問題であるが、苦力の管理が大苦心である。彼等はアフロスの手によつて爪哇から移入されるのであるが、労働問題に眼ざめて来た彼等は、昔のやうには行かなくなつた。寛なればするけ、嚴なれば反抗し、殊に渡り苦力の質のよくないのになると随分手古すらせる。これが各園とも苦心のいるところである。が、しかし農園經營者にはなくてはならぬものである。一通り東海岸州の取扱ひを書いてみると、

二

例へば苦力何百人が要るから周旋して呉れと言へば、これは電話でも書面でもよろしいが、アフロスで世話して呉れる。その規定によれば、手数料は、夫婦共契約ならば二百盾、夫だけの契約者ならば百四十盾、獨身者ならば男女の別を問はず百十五盾を要求される。しかし、これは一定したものでなく年に依つて多少の變更がある。

三 苦力の賃金は、男四十二仙、女三十七仙、時間外は一時間につき、男八仙、女七仙の増である。契約期間を過ぎて再契約の場合は、その期間は十三ヶ月。

四 アフロスは苦力を募集して農園に引渡すまで、一切の責任を負ふことになつて居る。上陸のときは身體検査をして、病毒を有つて居るものは本國に送り還す。農園に苦力を引き渡した後は、逃亡者があつても命令違反者があつても、アフロスは關係しない。これは農園と警察の仕事になつて居る。

農園では苦力の宿舎を設けて、それに收容する。再契約者には、菜園の付いた獨立家を與へることになつて居る。

苦力が病氣の場合は、直ぐに病院に送らなければ支配人の落度となる。病氣でもないのに怠けて居れば、巡査が来て用捨なく監獄に打ち込む。逃亡者は勿論警察で處罰する。

苦力が仕事を怠けたり、反抗したりする場合は、口頭で叱責するのは差支ないが、これを歐打

することは出来ない。ところが、苦力でも渡り人足みたやうなすれつからいになると、若い主任などテンから馬鹿にしてかゝるので、ツイむら／＼として殴り付ける。と、これが問題になつて時々大事件を起す。

五

農園では米等の食糧品から、鹽肴、南蠻、鮭罐、砂糖、煙草、その他に、石油、手帖、ハンカチなどの品物を賣店で賣つて居る。

米は時價の高低に關せず、一キログラム十二仙半の相場で賣つて居る。他の品物は、標準になる近い處の街の時價を探つて月々相場を決め、店頭見易き處に貼り出して置く。

この物價表には、支配人が責任をもつて署名するが、衣類や家具はいくらで賣るとも差支へない事になつて居る。

六

契約期間三ヶ年間に、貸金二十六盾以上になることを許さぬ。これは豫め貸金をして、その意に反して再契約を強要する恐れあるがためである。

貸金は、入場の時の十盾、家具什器購入の時と出産の時の五盾、と云ふやうにその場合で定められて居る。

七

苦力の待遇としては以上述べた外に、幼児のために雨天遊戯場の一棟が要る。産婦には休養日を與へ、子供の生れた時には子守料として、一ヶ月二盾の増給をしてやる。

苦力の娯樂用としては、爪哇の樂器一組を備へて置かなければならぬ。樂器は木琴、鉦、胡弓に似たもの、木魚のやうなもので、一組二千圓からする。爪哇人の唯一の樂は夜遅くまでも、樂器を鳴らし、歌を唄ひ、踊るに在る。

八

苦力は、男は男、女は女、と云ふ風に必ず別々に働かせて置く。苦力の本場西部爪哇では、女に貞操觀念が乏しいので、自分の夫が働きがなくて、腕輪一ツも買つて呉れることが出来ないとなると、他の男に交渉してそれを買つてもらひ、そして自分の夫に吹聴して、誰々は働きものだから、と公然見せびらかす。

爪哇人だつて氣持が良くはないから、男同志の喧嘩となる。宗教上、女房を殴つたり、罵倒したりすることは出来ないで、男同志の喧嘩となるのである。

女房は陰で舌を出して笑つて居る。

だから、農園ではこれ等の紛擾の機會を少なくするやうに努めて、男は男同志、女は女同志、とチャンと區域を定め、紛糾を起さないやうにして居る。

九

獨身者で勤勉なものには、再契約させる爲めにも本國から若い女房を貰つてやる。

十數人の獨身の女が爪哇から來ると、一室の内に入れて置いて、豫め目星をつけて置いた獨身者の年齢を考へて、一人宛呼び出しては、これがお前の女房だと云つて渡してやる。二人は大喜びである。次から次へと、五分間に十組の結婚式が終つてしまふ。

十

労働は十時間である。夜が明けると、第一の合圖で起き、第二の合圖で列を作つて出懸ける。朝最も護謨液のよく出るときに、護謨の樹をタツピングして廻る。次にバケツを提げて、茶碗に

溜つた液を集め、これを工場に運ぶのである。

タツピング(切り方)には骨意があるので訓練を要する。勿論護謨液は最も多量に出るやうに切らねばならぬ。が、さりとて深過ぎて木質を傷けると、その痕が癪になつて二回目からのタツピングがきかない。そこで新米の苦力には先づ、小刀の持ち方、力を入れ加減、腰のひねり具合などの稽古を練習木についてやらせる。そして、熟練して間違ひのないものから、愈々本仕事にかゝらせる。

A・V・R・O・S

A・V・R・O・Sと云ふのは、スマトラ東海岸護謨栽培協會の略號である。これはスマトラの東海岸州、アチエ州、タパノリ州(アチエ州、タパノリ州にある煙草會社を除く)各種栽培會社を會員とする協會で、會費によりて經費を支出して居る。各部門に分つた研究所を持つて居る。又手數料をとつて移民の世話もして居る。定期刊行物を出して研究事項を發表し、會員の求めに応じて技師を派遣し、農園の調査、土壤の成分試験をもやつて居る。技術員の養成もする。又、母

樹苗圃を備へ常に優良な大量の種苗を供給するなど大に力めて居る。

シンガポール邊で聞くと、アフロスは責任上、二月か三月目には試験の成績を必ず發表しなければならぬので、粗漏杜選な研究を發表するから餘り當にならぬ、と悪口を言ふものもある。が眞面目な研究をつゞけて居り、その成績は確實なもので、護謨の如きはまさに栽培上の一大革命を起して居る。

アフロスの試験所はメダンより約三キロのカンボンバルと云ふところにある。試験所長はドクトル・ヨングと云ふ人である、約束の時間に訪問すれば、温顔を以て迎へられた氏は、今度歐州に歸る準備に忙殺されて居るので、遺憾ながら案内が出来ないが、化學部の主任が御案内するか宜しくと云ふ。

アフロスの護謨園は、こゝから十七キロを離れるタンジョンモラウと云ふところにある。試作物は護謨を主とし、オイルパーム(油椰子)、野生ゴム、コカ等であるが、主として力を注ぐのは護謨である。

護謨の試験園を観る。段々改良した優良種を益々改良してゆくと、その枝振りから樹の形迄が

二三種に歸してしまふと云ふことである。始めアマゾンから持つて来た種は、液の出るのも出ないのも一クチャにして持つて来たのであるが、段々精選して見た處二三種の優良種になつた。その結果最も多量に産出するものは、乾燥して百五十グラムのものが得らるゝやうになつた。併しこれは特有のもので、平均して二十五グラム乃至二十八グラムである。

この試験所の結果によれば、芽接や實生によつて優良種を得るその成績は、五年六年木が確實に、最低一英反千ポンド以上の生産を得、これが而も單に一本や二本の特殊のものでなく、七十英反全部が、この試験を完了した譯である。

アフロスはこの外、他の農園に依託して大規模の試験を爲せて居るが、略同一の結果を得るやうになつたと。

苦力が毎日毎日集めて来る液を、一本一本毎に標をつけて、醋酸で凝結させて鈎してある。これを見ると、舊式のもの是一本から採れたものが團子の位の大きさであるが、新式のものになると大椀の位の大きさがある。

樂郷ブラスタギ

ブラスタギは避暑地である。この地方唯一の慰安所である。メダン市を中心とした人々の休養所であるばかりでなく、馬來半島からも、新嘉坡からもやつて来る。年中熱い國では、清涼な氣に親しむほど結構なことはないからである。

今日は岩田氏の自動車でブラスタギに行くことにした。一行は岩田氏を先頭に武井氏とN氏と僕である。

支那人の別荘地アルヘミヤと云ふ町を通り、四十キロを過ぎる頃から道は段々勾配が急となり茶園のあるバンドルパンのところから急峻となる。これから九十九折の道を迂餘曲折して深山の中にいる。

羊腸たる急坂を登りつめれば、やがてブラスタギの高原は眼前に展開する。東北にはシバヤの活火山聳え、それから東にはやゝ圓みを帯びた峻嶺が連なつて居る。その反對の西の方には、遙かに富士に似たシナブン山が靈容を現はし、南方は廣漠たる平野で、遙に低い山の連なりて居

るのを見る。トバ湖はこの連山の先になる。ブラスタギの避暑地は、後にシバヤを宗主とした群山小丘を控へた傾斜地である。

日は西に傾いた。寒暖計をとり出して見れば七十一度である。日本で七十一度は暖かなものであるが、毎日八十度九十度の處をあるいて居つて急に七十度の處に來たので、非常に冷風を感じた。

グランドホテルに宿る。

夜になると、段々冷氣が強くなり、部屋の中でもレインコート位は着て居なくなる。食堂の客を観ると、多くは馬來半島、新嘉坡邊の英人らしい。蘭人は別荘を有つて居り、勤人は土曜でもないと一寸來られぬ。客は少ない。

九時となれば、万籟寂として實に靜かなものである。戸外に出てみると、山は只黒く、空は深紺碧に澄み渡り、星がキラ／＼輝いて居るのみであつた。

翌朝、夜が明けたと思へば既に日輪東天に輝いて居る。シナブン山は旭光を受けて赤く輝き、シバヤの活火山は頭邊間近く聳えて居る。露滋き前の青き芝生の山は奈良を聯想すべく、又輕

井澤を想はせる。庭前には可愛らしい木曾馬のやうなものが十數頭ある。皆で庭前を散歩しつゝ可愛らしい馬の頭を撫でたり、背を叩いたりしてみる。

少年は、往復二盾で山の上の展望の最も良い處へ御案内しませうと云ふ。何のくらぬ時間がかゝるかと問へば、三時間だと、遊思勃然として動く。

「どうです、登つて見ませうか。」

登らうで議忽ち一決、寫眞器を少年に持たせて、仔馬に跨る。

道は密林の間を縫ひ、細徑を爪先土りに登りて行く。この邊は熱帯の趣きがなく樹容草形母國の山路に髣髴して居る。水湧きて泥濘なところは馬が便利であるが、急な坂路となつて丸太を階段とした處は危くて仕方がないので馬から下りる。一時間近くもかゝつて小高い處に登る。

こゝは直ぐ谿一ツを距て、シバヤの噴火を望み得らるゝところである。シバヤは八千尺近い山として、白雲去來し、晴れたかと思へば復た雲霧に被はれ、僅に晴れ間より黄白の煙雲に交りて濛々として立ち上るを觀るのみ。シバヤ山は圓錐形の富士山型ではなく屏風型である。

この邊で活動寫眞を撮つたりして、シバヤの煙を觀たことだけを記念に馬首を廻らす。

ブラスタギの町は戸數七八十戸もあらうか。こゝに朝日寫眞館と云ふのがある。メダンの朝日寫眞館の弟の經營である。寫眞業の傍ら、ニパウ許りの農園をもつて居て養蠶をやつて居る。このブラスタギの町の近くにバタ族の部落がある。

バ タ 族

バタ族は遠からぬ前まで食人々種であつたと言ふことである。トバ湖を廻つた山地、即ちタバノリ州と、東海岸の一部に居る。彼等の住む部落と云ふものは一種の集團したる要塞である。二十戸集まれる部落の周圍は、竹林、土堤、柵などで用心堅固に圍まれてゐる。

その部落に這入つてみると、家はガツシリした材木で大きく造られて居る。大きい管で、中には八家族またはそれ以上の家族が同居して居る。

家屋の作りは、高い柱を三メートル位の高さに立て、その上が床となつて居る。家に入りまするには梯子である。屋根は高く急勾配にし、イジュニと稱する樹葉で葺く。一寸日本の茅葺きの御寺と云ふ恰好に見える。

衣服の色はきまつて藍とか紺である。頭には大きな大黒帽を被る。少女のうちには胸迄布で被つて居るが、老婦は糸瓜のやうな乳を露に出して居る。女は齒を黒く染めて、大原女のやうに何でも頭にのせて歩く。

バタ人の常食は、米を主食とし、玉蜀黍及び芋類、牛肉、山羊肉などである。椰子から取る酒を特に愛用する。

宗教は大體マホメツト教のやうであるが、マホメツトならば唯一至上のアラー神の外ない筈であるのに、この神様には、天の神、地の神、地下の神と三通りある。今は基督教の宣教師が布教に力めて居る。

酋長と云ふ人の家を訪ねて、室内を觀せて貰ひ度いと言ふと、家長は留守であつたが、女達は快よく承知して呉れた。梯子を上つて、腰を屈めて家の中に這入る。中は眞暗である。窓と云ふものがない。戸口に近い爐邊に座を與へて呉れた。暗い處でも段々眼が馴れて、様子が判つて來た。梁の上に棚のやうなものがあつて、そこに穀物が積んである。柱には獸の皮がつるしてある。床の上には、家具、農具類、トウモロコシ、野菜等雜然とおいてある。御勝手も倉庫も物置きも一

バタ族の娘



ツ處で、薄く暗くて異臭鼻を撲つたのだから、迎も長く居るに堪えぬ。室内には區劃がなくて敷物で家族を區別する。少許の錢を遣つて辭し去る。皆笑顔で、「タベ・トウアン」と挨拶をした。

廣庭の中には部落共同の米搗場があつて三四人の女が、八尺程の棒を手に持つて米を搗いて居る。庭から寫眞を撮らうとする時、米搗場の女達は撮つてはいけないと怒鳴るらしい。猶グツ／＼して居ると、眼をいからし、牙をむき出して、米搗棒を逆手に持ち直しさうであるから、ピツクリ敗亡早速寫眞機を收めたら、どうやら天候恢復。

庭前には同じ様式の小さな家がある。これは獨身者の合宿所ださうである。獨身者は夜警旁々風紀の點から、かやうに別な合宿所に宿るものと見える。

愈々そこを出ようとすると、子供が自動車の前に立ちはだかつて、寫眞を撮れと云ふ。幾分の

錢が欲しいのである。今度ほうるさいから寫眞を撮つてやらぬ。子供はワイ／＼言つて居たが、ブーブーと自動車が行り出すと、後から石や泥を投げつけた。この地方の産物としては蜂蠟、籐、樹脂、西海岸に近い方は樟腦や安息香が出来る。一定の日に市が立つて、物々交換で取引が行はれる。

メダンの日本人

メダンと言へば娘子軍活動の本場であつた。孔雀が全盛であつた頃は、その羽振りで生きて行くものも大分あつたと云ふが、こゝ十年この方全く面目を改めた。大商店としては三井物産を始め、十數軒の邦商が活動して居る。附近にはスマトラ興業、スマトラ護謨、ボルネオ護謨などの農園が出来、昭和三年度から帝國領事館も設置された。

日本人會は山崎君と云ふ人が熱心にその發達を圖つて居る。

日本人小學校は本願寺の布教所を用つて居る。兒童は二學級百人程である。日本人の教師が四名程居る他、篤志な和蘭婦人が來て蘭語を教へて居る。何せ、經費がないので困つて居る。今ブラジルでは山の奥の奥までも領事館が心配して建築費の補助をしたり、教育會を設けて統一を圖つたりして居るのに、文明の設備悉く備はれるメダンの市中に於ては、僅に佛徒の篤志にすぎり、佛壇の傍で不完全な教育で間に合して居るのは氣の毒のこと、言はねばならぬ。領事館も置かれた今日、これ等の改善は急務であらう。

凶勇なるアチエ民族

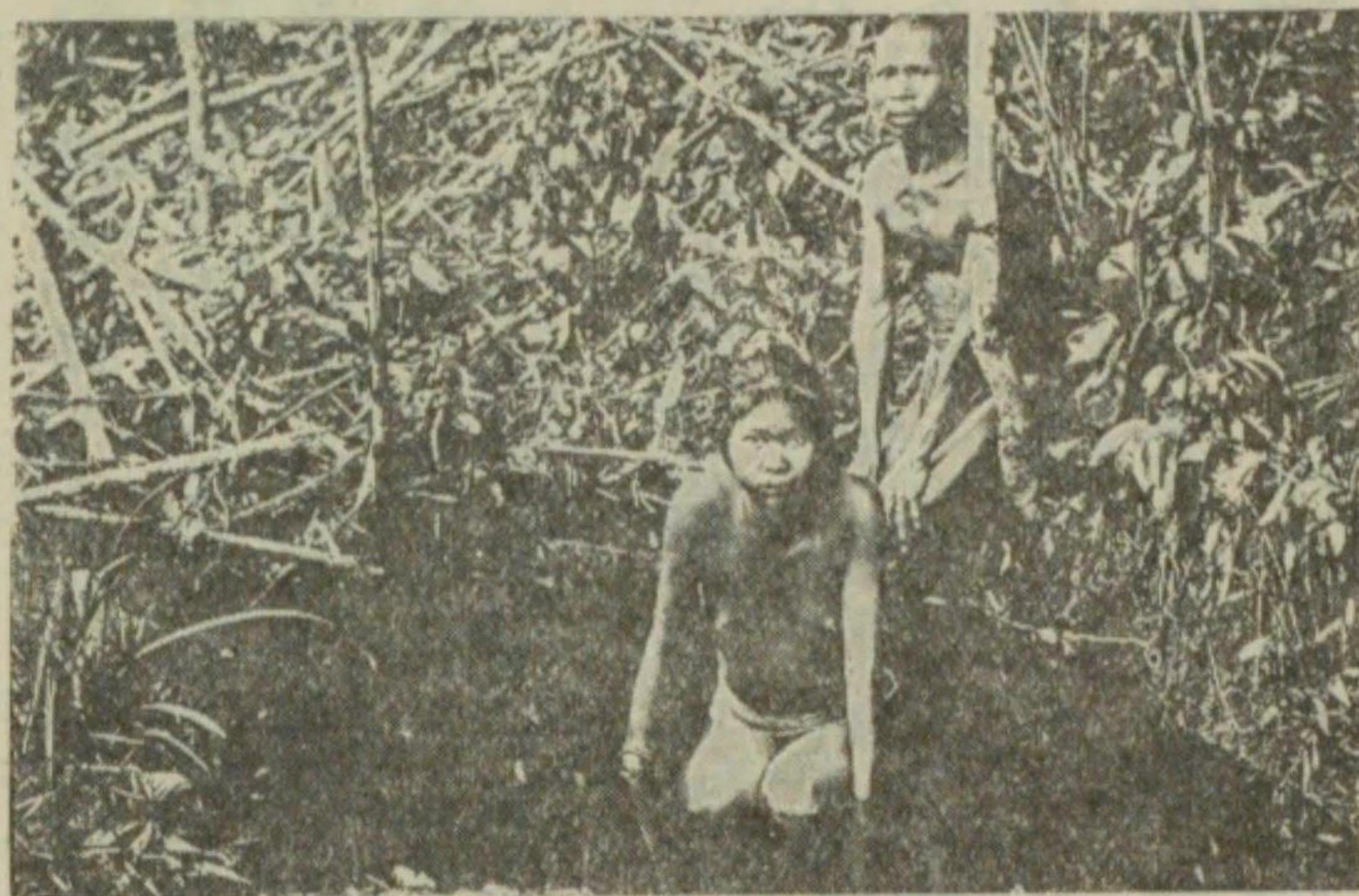
スマトラ最北部の龐大な一州がアチエである。アチエは二十年前迄和蘭と戦つて來た民族である。近頃漸くアチエにもほつ／＼農園を觀るやうになつた。

アチエの土地に詳しいメダンの池田君を東道として、武井、岩田の兩氏と都合四人でメダンを出發する。

アチエはスマトラ島の北部を占有して居つた強勇なる民族である。特に山間に住むものは、一層凶暴であるといふ。何せ、鋭利なる匕首を腰にぶっこみ、念入れなのは鎗まで持つてある。山間に居るものは、猪小屋位のものを作つてそこで雨露をしのぎ、事ある時はどこへでも押し

かけて行つて強盜猛掠をやる。この慄悍なる民族を率ゐて居る王様は、最北端の街コタラジャに

山間に住むアチエ人



五億万盾、財源は空乏し、内閣は幾度か交迭し一時征討を中止する迄に至つた。併し、アチエ

王城を築き、嘗てはマラツカ海峽の制権を握つて居つた程の大勢力を有つて居た。が、時一八七二年(明治六年)サルタンが、新嘉坡駐在米國領事と密約し、和蘭に反抗しようとの計劃を立てた。これを知つた蘭領東印度總督ゼームス・ラウドンは、翌年三月宣戰を布告し一八七五年一月遂に王城を占領してコタラジャと改稱した。慄悍で凶勇なアチエ人は容易に屈伏はしなかつた。自然の天險を利用し、古來の海賊的蠻勇を揮つて、到る處に反亂を起した。一亂平げば一亂起る。追へば散じ退けば集まる。殆ど干戈を斂むるの遑なく、奔命に疲れた。かくして三十年間の抵抗は續いた。和蘭政府の費したる軍費は

の凶勇も鋭利なる匕首も、結局文明の利器には抵抗出来ず、主將の死亡によつて俄然勢力は失墜し、全く起つ勇氣なく、つひに軍門に降伏して和蘭の嚴重なる軍政の下に、統制さるゝことゝなつた。

去り乍ら、戰爭中蘭人の殘虐と父祖の悲惨なる最後を目撃したる子孫は、憤恨骨髓に徹し、蘭人と見れば、仇敵として鋭き匕首を以て報復をはかつたので、蘭人で農園に入るものには、「農園に入るは差支なきも生命財産は保證の限りにあらず」と云ふ條件の下に許可證を與へたと聞いて居たが、時遷り星換り、進んでやまざる時勢の潮流には抗し難く、隣州デリーの如く早く開放したるところでは、土地は開拓され、産業は發達し、その利權で土王は自動車を乗りまわし、豪壯な邸宅に安居して居るのに、此方は窮乏の生活に力んで居て見ても、文明に後れる許りで一向仕方がないとなつて、今ではやゝ資本家を歓迎するやうになつた。また、昔ほどの敵愾心もなく、従つて従前程の危険もなくなつたので、近頃は蘭人經營の護謨園、珈琲園をも觀るやうになつた。

メダンからタケゴンへ

今日の豫定は、メダンから三百二十二キロあるロースマウエまで行くのである。汽車はメダンから北端のコタラジャまで行くが、途中時々途寄りをする必要のあるものには汽車では非常に不便である。

自動車道路は海岸に近く、坦々たるもので氣持よく走る。

タンジョンフラには王の宮殿がある。王は石油の産地を所有して居らるゝから、それより得る利権で、可成り裕福であると。

パンカラン・フランダンといふ町がその次にある。戸數二千。石油精製所がある爲め相當繁昌して居る處である。この町を出て二十キロを走るとアチエの國境となる。

ボルネオ護謨株式會社はランサ町の手前二十キロの處にある。社長は横山章氏で、資本金五

万圓、拂込金二百万圓の會社である。支配人長野藏造氏に面會して護謨園を見せてもらう。この邊の護謨園は土地を廣くとり、手入れを簡略にし、粗放的の經營法で算盤の採れるやうにするやり方であるらしい。

ランサに着いたのが午後二時。ランサはメダンから百六十キロ、港までは十五キロ。港は五千噸級の船が横付に出来る程のものである。戸數約千戸。

ランサ出れば一望漠々たる平野である。稻田、椰子園が續き、邊際を見ざる程である。稻田は既に刈入れを終つて、後に青い稲草が可成り延びて居る。水牛は横はり、印度牛は田の中の稲草を食ひ食ひ、白鷺飛ぶ。

ロースマウエに着いたのが午後七時で夕陽は既に没した。西天一帶はくれないに美しい夕やけとなる。やがて紫雲の色次第に深くなり、世界は暗黒の幕に閉される。點々たる燈火は寂しく町に輝いて居る。

ロースマウエは海濱にある小さな町である。アチエの首府コタラジャからの汽車もメダンからのもの、こゝが終點で、夜行と云ふものがないので旅客は皆此處に泊る。

旅館はナス・ホテルである。部屋は六ツであるが敷地は広い。寢室の前はベランダ風の長い廊下でこゝに卓を置き、コーヒー等啜る仕掛けになつて居る。

今日の行程は三百二十キロ。

夜、ベランダで聴けば、綜々颯々驟雨の來るが如き音がする。庭に出て觀れば月影淡く星斗爛々、海風がアメリカ松にあたり、綜々颯々の響きをなすのであつた。池田君を誘つて、アメリカ松に被はれた町を散歩する。

こゝにホテルを經營して居る日本人が居ると云ふ話なので訪ねて見た。神戸旅館と云つて居る。二階は間代をとつて一夜の宿に貸す。下には菓子や、サイダー、ラムネの類が並べてある。此處の主人は年齢三十五六、昔は船乗りとして、新嘉坡邊を往復して居つたとかいふ。こゝはホテルと云つても、只一夜二ギルダで間を借す丈で、お客にはコーヒーの一杯も出せばそれだけののである。

「御客は土地の人ですから、何も世話はありません。」と主人が話す、

「支那人には商賣上のことではとても叶ひません、四代から五代を経て居ますから。銀行も商店

もあり働かさへあれば、無資本でもやつて行けませうが、日本人は私の處一軒ですから、どうにも法がつきません。」

庭先には日本婦人の年頃四五六の人がベンチに腰掛けて居る。聞けば二十何年前に南洋に來て、今は和蘭の鐵道監督官の妻となつてゐる者だと。子供は男が一人、中學校に通つて居るのがあると云ふ。

「妾も日本に居た時よりも此方に長く暮した譯であります、國は矢張戀しくて、金は總て長崎の銀行に預け、老後は長崎で暮すつもりです。只子供は日本語がよく出来ないで困つてしま

います。時々日本人が二ツ居るなど、途方もないことをいひまして、と笑ふ。

海外に於ける移住者の子供の教育と云ふものは、實に頭を痛める問題である。支那人の移住者の如く、親達の子孫永住のつもりなら問題は簡單だが、簡單でないのは少し安樂になると故郷に錦を飾りたい、扱て歸つたところで、子供は相當の年頃になつても、日本の風俗にも習慣にも理解がなく、言葉さへ充分に通じないから、社會的に立つて行けまいと考へるからである。そこで移住地の教育をして見たり、又日本の小學校の變形のやうな教育をして見たり方針に迷ふて居

る。ブラジルでも政府は各國の人を徹底的に同化させやうとして、教育方針を定めこれに準據させやうとして努力して居る。こゝに苦心がある。

この婆さんも死ぬまでの僅の年月を、日本流にこの子にかゝると云ふやうな迷蒙は捨て、飽く迄南洋に活動させるやうに激励し、この子の運命の開拓を圖るべきが道である。

既に十時過ぎともなつたので、こゝを辭し宿に歸る。舊曆六日許りの下弦の月は淡く中天にかゝつて居る。活動寫眞小屋の前を通れば、馬來の音楽が響き渡つて、中で面白さうな笑ひ聲が喧しい。街道には虫の音が咽ぶやうである。

ビールン

翌日ビールンへ着いたのが午後一時。街には牛の市が立つて居た。數十頭の牛を並べ、そこへ土民が群集し、大道に商人が店を並べて居るのは、日本の縁日のやうである。

ビールンは、ロスマウエより六十キロ、海岸迄約三キロ、戸數千戸。空地は青い芝原で、街路は縦横に整然として、街の兩側には亭々たる喬木が茂つて居る。家があつてもなくても、市街

計劃だけはキチンと出来て居るのには感心する。

タケゴンに行くには、これから左に折れて山に這入るのであるが、今日はこれより北方の國道筋を觀て置かうと、サマダン近く迄車を走らす。

中央山脈は左方に起伏し蜿蜒々として續く。中に最も高いシンガマタ山は、海拔千二百六十二メートル、遙か雲表に聳えて居る。

國道筋は、土地瘠せ、荒草離々として原野が續く。牧場にでもするより外はあるまいと思はれるやうな處である。處々に水田もある。土人は永い間の經驗から、肥えた處に住居を定める。で、土人部落のあるところだけ、水もあり、樹も茂り、水田もある。

車を廻らして夕刻ホテルに歸る、ホテルはパッサムグラムである。

日暮れてから驟雨がザツと來た。一天墨の如し、庭前には虫聲滋々として涼風室に滿ち晝の暑さを忘れる。午後八時に啾啾たるラツパの聲をきく。附近に駐屯兵舎があるのである。アチエは今も戒嚴令下にあり、アンボン人、ジャワ人兵士が嚴めしい風をし、鐵砲をかついで固めてゐるのであるが、しかし緑の廣場で遊ぶ青年がシャツに赤いサルマタ風の半ツポンを穿き、フットボ

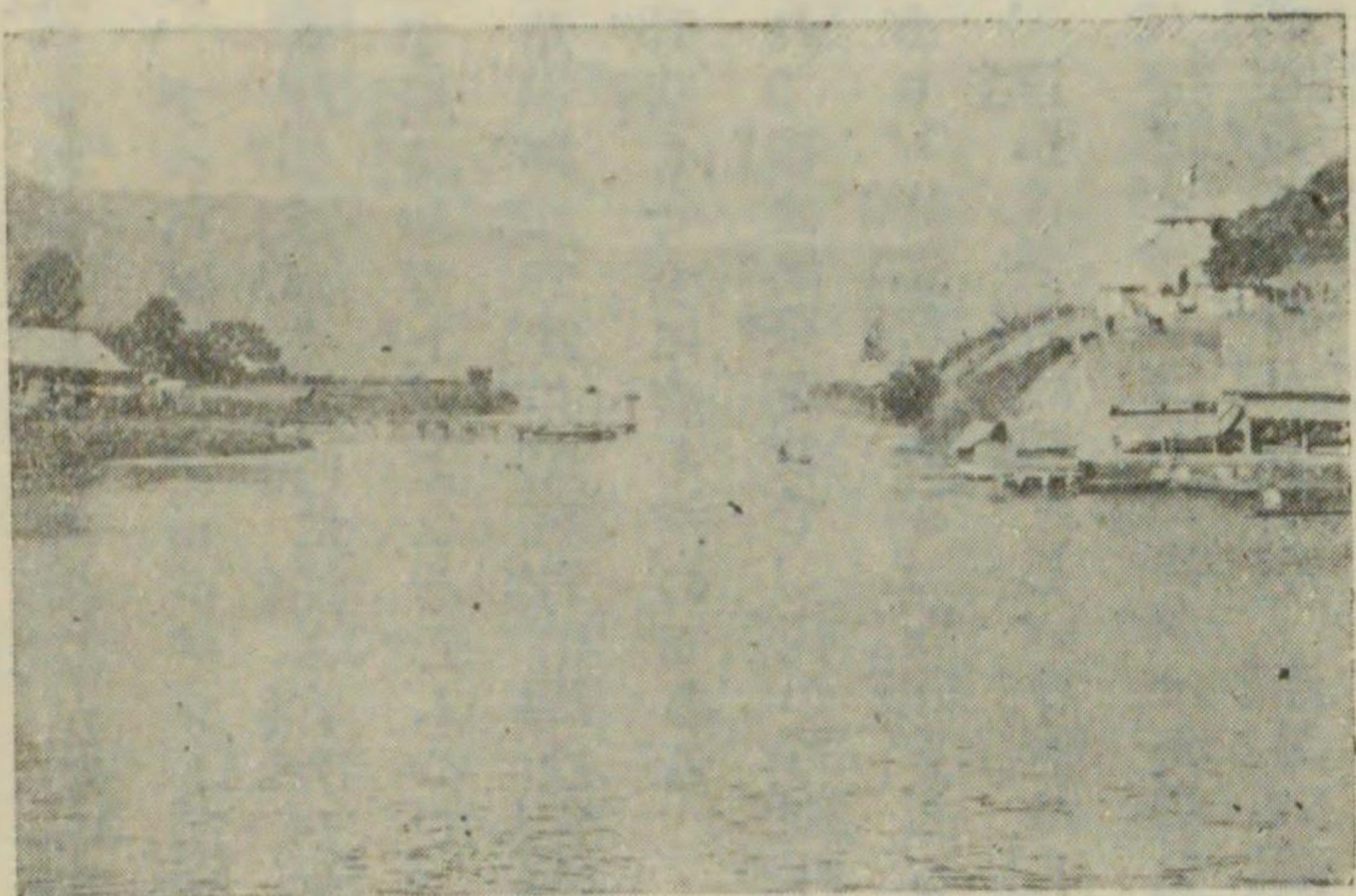
ールに熱狂して居るを觀ると、前に和蘭人と見れば隠し持った匕首でその胸を刺したといふ土人の子孫とは思はれぬ程、ハイカラになつて居るのである。偉なるは時の力である、とつくづく感ぜざるを得ない。

ビールンより高地を上り行くこと九十キロ、タケゴンから手前三三キロの所が、峠の絶頂である。この峠の地點は海拔千二百六十一メートル。車を下りて展望するに、これまでの山中の眺めとは違つて、こゝは盆地乍ら眼界闊け、連山波濤の如く四圍を廻つてゐる。前面には、活火山ニテロン山がそびえ、その裾野には何の植林か整然と見える。ニテロン山の東方には茶園がある。蔭になつてよくは見えぬが、一万ヘクタールで、蘭人經營カルチュア・セルダン會社のものとかいふことである。

この峠から見ると、盆地各所盛んに開墾が始められて、大木は伐り倒され、所々に山焼きの煙があがつてゐる。

この坂を下れば間もなくタケゴンの湖水となる。

タケゴン湖



タケゴン湖

タケゴン湖は、山中に湛えられた湖水で諏訪湖の三分の一位のものである、湖畔にはタケゴンの町があり、こゝに支那人の店や別荘がある。僅かの平地があつて、土人の民家も見え稲田もある、田には鳴子がひき渡され、雀の飛び交ふのを觀る。湖水は風の爲めに小波が立つて居るが、静かな時は深い底まで見透し得られるかと思はるゝ程、澄んだ綺麗な水である。

この湖水からペサン川が流れ下る。湖邊には藪が茂つて居り、河口に近い處には川中に魚を捕る、小さな家が立ち並んで居る、これは簀を川の中に立つて、魚の下るを待ち、小家の中にウケのやうなものを備へて、これに這入つて來る魚を捕へる仕掛である。

ホテルはない、パッサムグラハムが一軒あるのみである。こゝで晝食を依頼し、扱今晚の宿の相談をすると、豫め御相談がない故、何とも御取計らひ申し兼ねると云ふ。同席の蘭人が言ふには、アシスタント・レシデント(副理事官)の下にジャクサと云ふ部長が居る、この人に相談したならば知事の来る時に泊る官舎があるから、この方の都合をつけてくれるかも知れぬ、一所に行つて相談して上げようと云ふので、池田君も同行して懇談の結果、兎に角一室は都合をつけてくれた。御蔭で武井氏と岩田氏は官舎の方に自分と池田氏とはパッサムグラハムに陣取つて、これ野宿もせずに済んだのである。

これで宿は出来たので、街から湖畔を廻つて観る。此處には副理事官の官舎もあり、軍隊駐屯所があり、療養所がある。別荘もあるが假のものらしく、木造トタン葺である。目下新市街計画中で、遠からず町は新しい計画の下に建設され、小高い所の牧場に官舎は移されると云ふ。町端れにあるペサンガン川に架けた橋を渡る。山が直に迫つて居る崖道である。山の方からは三々五々薪を負ふた婦人が来る。赤黒い顔に眼光鋭く、頭髮蓬々とした年とつた老女の顔は畫で見ると安達ヶ原の鬼婆を思ひ出させる程、物凄いものであつた。

しかし、年の少ないものは眼鼻立ち整つて居、見なれぬ外人にあつたので、やゝ嬌羞を含んで下向きに道を避けて通る。こゝでも矢張り鬼も十八の言葉は眞理として通るらしい。

五十尺程のマンゴーの大木の下に子供が集つてガヤ／＼騒いで居る。交る／＼一尺程の棒を投げ上げて、果實を探らうとして居るのだ。棒は勢ひよく眞直に高く飛ぶが、うまく果實にあたらない。マンゴーは高い木の上で嘲笑して居るやうに見える。

湖水には獨木船に棹さして、荷物をのせて漕ぎ行くのがある。又、遊散的に權を操る蘭人の群も見える。

秋の陽に似たやうな淡い光線は、薄雲を透して湖面を照らして居る。静かな光景である。夕方の風はやゝ寒い。

六時半に夕食となる。外人の泊り客の夕食は、通例八時であるが、吾々はその前にとつたのである。スープもチキンもサ、大豆もジャガタラ芋も中々味が良い。味が本來良いのか、氣候が涼しいので胃の働きが良いのか、皆數杯を平げたので、ボーイが眼を圓くした。

夜、池田君と町に出て支那商店等を冷やかす。夜は暗い。電燈もない。官衙別荘地の事とて、

寂々寥々。商店の主人に、近頃益々町が發展して結構ですネ、と云ふと主人はさうでありませんと打消して、次のやうな話をした。

この支那人は二十年前にこの地に来て、土人相手に商をして居たのであるが、その頃の峻道險坂は御話にならない位であつた。

そこを苦勞して品物を持つて來るのであるから、山の中の土人は珍重して値の高低等は問はずに賣れたものであつた。ところが交通がよくなり、乗合自動車が出来るとなつてからは、町は日にまし繁昌になつて行くが、避暑客は必要の品を持つて來る、土人は見物旁々用をこしらへてはビールンに出かけて行つて買物をして來る。その上、同業者は殖えるので近頃では一向儲からない。今度は又山の山の中へでも這入らうかと思つて居ると。

開拓の精神鬱勃としたものには、嶮難の地程收獲もあり興味も多いのである。支那人が南洋の隅々迄根底を張つて居るのはこの精神があるからである。本國に居ては食へないから外國に向つて出ると云ふのなら、東京や大阪に在る貧民窟のドン底生活に居るものが、眞先に何處か食へる所に行きさうなものだ。が、事實はこれと正反對で、テコでも動くものではない。又、金がないから

行けぬのでなく、旅費と必要な資金を貸しても動くものではない。叩く氣のないものに、門を開いてやつても駄目である。

夜は氣温六十六度、山中の冷氣肌に迫る。寢臺には毛布がなく、只、細長い枕(ダツチワイフ)があるだけであるがこの冷氣に毛布なしではやりきれぬ。ボーイに聞けば皆出してしまつてないと云ふ。仕方なしに又ビールを買つて來て二人で飲む。少し酔心地になつてレインコートを引つ掛けて寝たが、ビールは酔ふに至らず便所に起きた。下手に眠ると風邪を引くに決まつてゐる。半睡半覺、三四度小便に起きる間に夜が明ける。折角の清涼地もこれでは臺なしだ。

アチエに日本村でも作つたら

アチエに日本村が出来たら、蘭政府はどんな顔をするだらう。

アチエが和蘭に對抗して居るとき、常に心頼みにして居たのは、かうやつて居るうちに、何處かの強國が來て援助して呉れるだろうと云ふことであつた。その時アチエは新興國日本の勢力にすがらうとして、その頃新嘉坡に居た遠藤某と云ふ豪傑の處に來て、軍器彈藥を供給して呉れさ

すれば日本に領土を譲渡しても良い、和蘭にとられるのは残念だが、日本に献上するのは惜しくない、と言ふて来たとか云ふ話があつた。兎に角蘭領全體、日本が強國ロシアを打ち負かしてからは、彼れ等が非常の驚きと尊敬とを以て日本人を観ることゝなつたのは事實である。それかあらぬか、従前は日本人の少し位置ある人の視察と云へば、窃に探偵をつけたものであつた。又、少し變な風な人だと妙に官憲の眼が光つた。アチエに日本村をつくる。大變なことになると思ふに違ひないが。實は大した事にもなる譯がないのだ。日本人はさやうな危険な國民ではない。

南スマトラ

南スマトラを観たいと思つたのは、

パレンバンから汽車が、爪哇への連絡港オースト・ハーベンに通ずるやうになり。昨今ラン

ボン州の發展眼見しきものあること。

東海岸メダン地方は、煙草に護謨に農園が占有してしまつて居るが、南スマトラには緯々たる餘地あること。

中央山脈中にラナウと云ふ清涼な湖水があつて、恰も北部タケゴンに匹敵すべき健康地帯がある

と云ふ話、これを観たいと思ふこと。

蘭政府が過剩稠密の爪哇の人口を調節する爲め、ランボン州に爪哇人の植民地を作つて居り、

又歐亞雜種兒の下級官吏の退職したものに便宜を與へて村落をつくらせて居るが、その成績

のよきこと。

南部に於ける邦人活動の状況を観たいと思ふこと等、等。出懸けたのは七月の半ばであつた。(二〇八頁の地圖参照)

バトラジャ

朝六時にパレンバンを出た汽車は、十一時にバトラジャにつく。バトラジャはムシ河の支流オーガン川の畔にある町で、汽車が全通してから以後、急激に發展しつゝある。

こゝからムアラニンへ出るには、汽車によれば大迂曲であるが、オーガン川に沿つて自動車走らせ、分水嶺を登り切つた處でイニン川について谿谷を下れば、六十七キロ、二時間で行ける。こゝは二度程通つたが、道も急峻でなく、緑樹の中を静流に沿ふて行くので気持ちが良い。

バトラジャの邦人としては、唯一人本田君が居る。本田君は南洋に来て十幾年、嘗ては活動寫真など持ち廻つて大分苦勞したさうだが、今は雜貨店主、トコ本田としておさまつて居る。今は二人の子供の父となり、身代は伸びて行き、支那人の間にも受けがよく、今度の非買同盟にも何等の影響を受けてゐない。

本田君を訪ねてラナウ湖畔に行くことの話をした。ところが君は、

「湖畔には官營宿舍もあり、風景もよく、氣候も涼しい。が、道が恐ろしく峻峻である上、百一三十キロもあるから、着く迄には日が暮れるだらうと思ふ。で、間違ひがあつてはいけんから明日にしてはどうか。」

と、切りにこの町にとまる方をすゝめる。

けれど、危岩岬々たる嶮山、静かな山中の湖水、清涼なる氣候などを考へると、遊思勃々と動く。デツとしては居られない。「暗くなる頃にはどうにかつけるでせう」と、途中の用意に茶を瓶につめて貰ひ、パンなども携帶して直に出發した。

道は西方の分水嶺の高地に向つて進む。この邊には護謨園、珈琲園の外、胡椒の園も見える。幽閑なるシラブンの河畔に出た。この河はラナウ湖に源を發して、パレンバンでムシ河にそゞのである。河は緑樹の間から流れ出て、緑樹の間に隠れ去る。今は乾季の事とて水嵩も多くはないが、波もたてずゆるやかに流れ下る。物産を積んだ竹の筏に、のどかな顔をして土人が棹さして居る。緑竹鬱々として茂り、人家も見えず、只喬々たる大木や、美しい林などのつゞい

て居る河畔に沿ふて上り行く。七十五キロでモアラドアと云ふ町につく。

モアラドアは戸數二三百、山間の小驛であるが、街幅も廣く氣のきいた町のやうである。

驚いた事には、大通りも横町も、支那人の商店が軒を並べて居ることである。殆ど九分は支那人である。濱邊の大都會から、かう云ふ山中の小驛迄、苟くも食つて行ける處であるならば、蟻が砂糖の匂ひを嗅ぎつけて集まるやうに、どこからともなく集まつて来る。全く南洋は支那人の南洋である。

モアラドアから段々急になる。湖水に近づくに随つては益々急峻となる。岩石を割つて道路を通じ、岩壁を蛇の如く巻き廻して頂上に上る。谿底を観れば幾千仞か、翠綠鬱乎として、這入るべき細徑もなければ、たどりゆくべき足がかりもない。

和蘭の道路については、いつも乍ら感心するが、かやうな山岳上の道路にしても、單に岩を鑿つて道路を通じたと云ふのでなく、石を砕いて深く埋め上をしつかり堅め、岩壁の水の漏れる處には溝を掘つて別に流し、斷崖に近い方には土堤又は岩石の垣をつくつてある。非常な努力だ。これならば雨季如何なる豪雨でも壞れる憂ひはない。

この山の頂上に近くスマトラ・ラン・シンジカートの珈琲園がある。このシンジカートの私設道路は本道から農園迄七キロあるがこの道路修費七十万盾、一キロ十萬盾かゝつたと云ふ。それで、如何に官民共道路に力をそゝいで居るか判かる。峻坂を登りつめるとシンパンと云ふ二十戸の村がある。シンパンは馬來語で「岐路」又は「辻」と云ふ意味である。こゝで西海岸に出る本道とわかれて湖畔に行く。

湖畔の一夜

ラナウ湖畔には、遊覽客のために官營宿舎もあると聞いて、そこに宿る積りでゆく。緑の芝生の中にホテル風の瀟洒たる建物がある。玄關に車を寄せ、中に這入つて居ると、豈圖らんや、これはスマトラ・ラン・シンジカートの別荘であると云ふのだ。道理で餘りに小奇麗すぎると思つた。その家の人が、近くにある官營宿舎に案内して呉れた。

官營宿舎は小高い形勝の地にあつて、湖水は一望のうちにある。湖水の眞正面には、セミヌン山と云ふ標高八千九百メートルの圓錐形の山がある。湖水は凹字形といふよりは、鎗矢形である

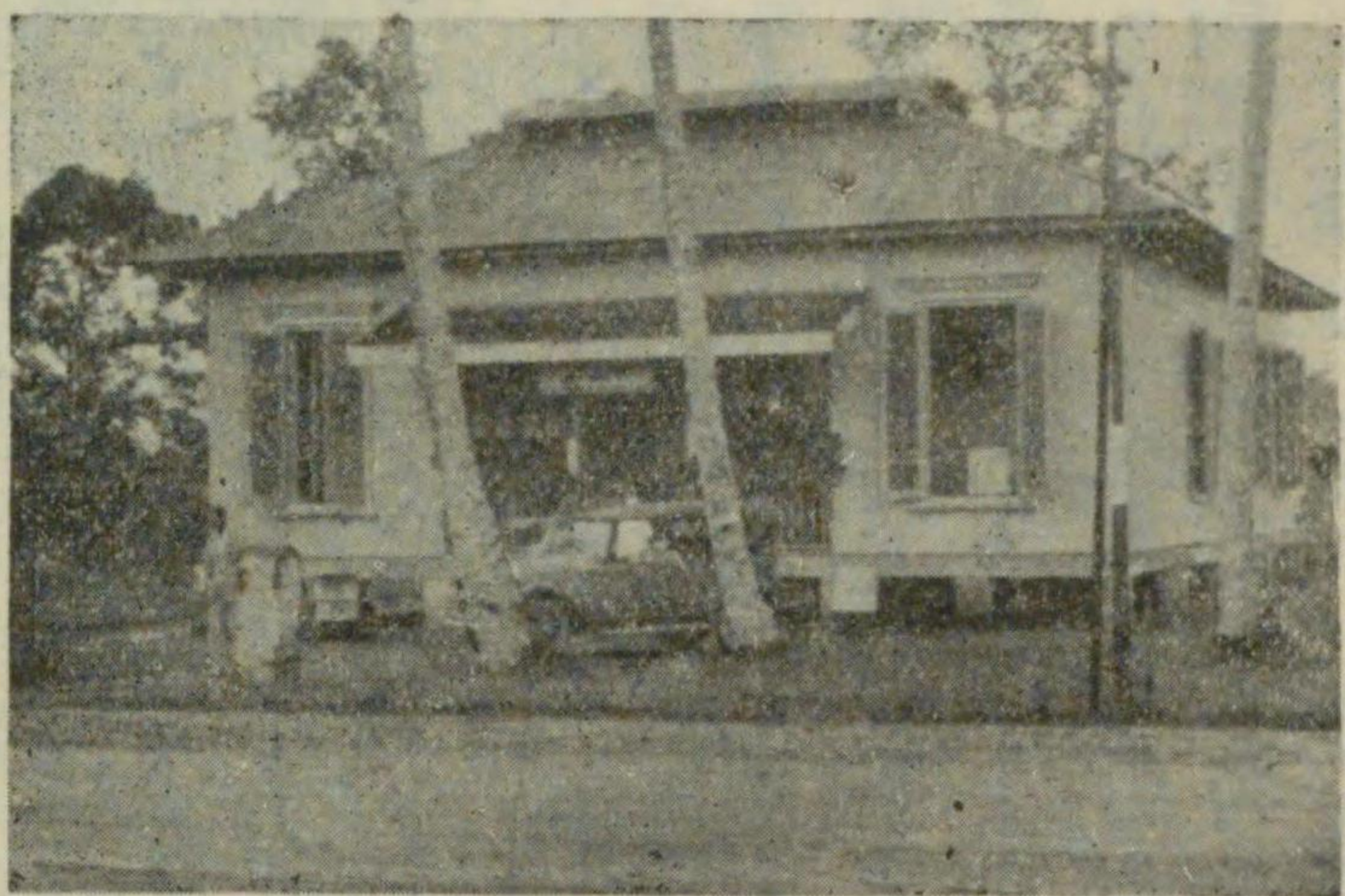
セミヌン山は湖水の中央に張り出して、この地の鎮めと云ふやうに巍然と聳えて居る。群山湖水をめぐつて僅の平地しかない。

日は既に西に傾いたが、雲間をもるゝ餘光は猶湖面を照らして居る。夕に家路を急ぐ歸帆もなく、號笛すさまじい汽船もなければ、波をつんざいて行くランチもない只、静寂そのものである。

宿舎の前には少し許りの稲田がある。湖邊には椰子の樹が行儀よく並んで居て、何と云ふ木か紅い花の咲いてるのが交つて居る。

湖畔にスラバヤと云ふ二三十戸の町らしいものがあつて、土人の日用品とか魚類などを賣つて居る。宿舎の直ぐ側に學校がある。

パッサムグラハム



かういふ僻地の官營宿舎は、客がいつもある譯でないから、山羊とかコンビーフの罐詰にビー

ル、シトロンのやうなものを備へてあるだけだ。飯だけは註文すれば炊いて呉れる。

暗くなるまで湖畔を見まわつて、空腹をかゝへて宿舎にかへると、ボーイが来て「飯をお上りなら、これから町へ行つて米を買ふて来ますが、」と云ふ。がっかりせざるを得ない譯だが、仕方がない。急いでやつて貰らうことにした。近所に副郡長が居ると云ふので、その人をよんで、とりあへずコンビーフの罐をきりビールを飲みながらこの土地の話をきく。

ラナウ湖は海拔五百六十メートルで、湖面の長さは曲つたなりに量つて九キロある。湖水の圍りに十幾つの村があるが、これは一人の村長が管理して居る。

湖水の畔も山が迫つて居て平地が僅かしかない。土地の人は珈琲を作つて、他所から米を買つて生活して居る。地所はこの宿舎の附近で一バウ五百ギルダ位のものだらうか、別荘地としての相場で、それだけ生産がある譯ではない。この附近の山は全部スマトラ・ラン・シンジカーの地所であるから、こんな山中であり乍ら殆ど土人の生活を支へるだけの地所しか残つて居らぬので問題が起きる。

スマトラ・ラン・シンヂカートの會社の租借出願許可區域は、十二万バウであると云ふ。坪數にして約二億五千二百万坪、ラノウ湖を一周して居る山地に四千バウの珈琲園が仕立て、ある。土地は八年前に租借したものと云ふので、今では土人の方が承知しなくなつて來た。土人は、將來住居すべき所も生産物を作る土地も、吾々は持つてゐないのだから、八年後でなければ利用しないやうな土地などは返還して貰ひたいといふ運動を初めた。大分騒いだ。爪哇からは社會運動の驍將ハヂヤ・ド・サリブがやつて來て、民衆大會をコタバルに開いて大騒ぎをやつたことがある。シンジカートとしては、尨大な地所を持ち珈琲の成績もよいので、支配人の功績を認めて月俸も五千ギルダに増し、年末の賞與も五万ギルダを與へて居る。將來は八ヶ間敷の問題も起きるかも知れない。

副郡長は、夕食は家内と一所にたべることになつて居るからとて、九時頃歸つた。夜は涼しい。チュルツ位のものか、それよりは幾分暖かであらう。夜中に地震があつた。

湖畔の村

朝湖畔の部落を見る。

山は直ちに湖水に迫つて居るので、附近には平地が極めて少ない。漁業も相當行はれて居て、三尺以上の大きな魚が捕れるさうである。

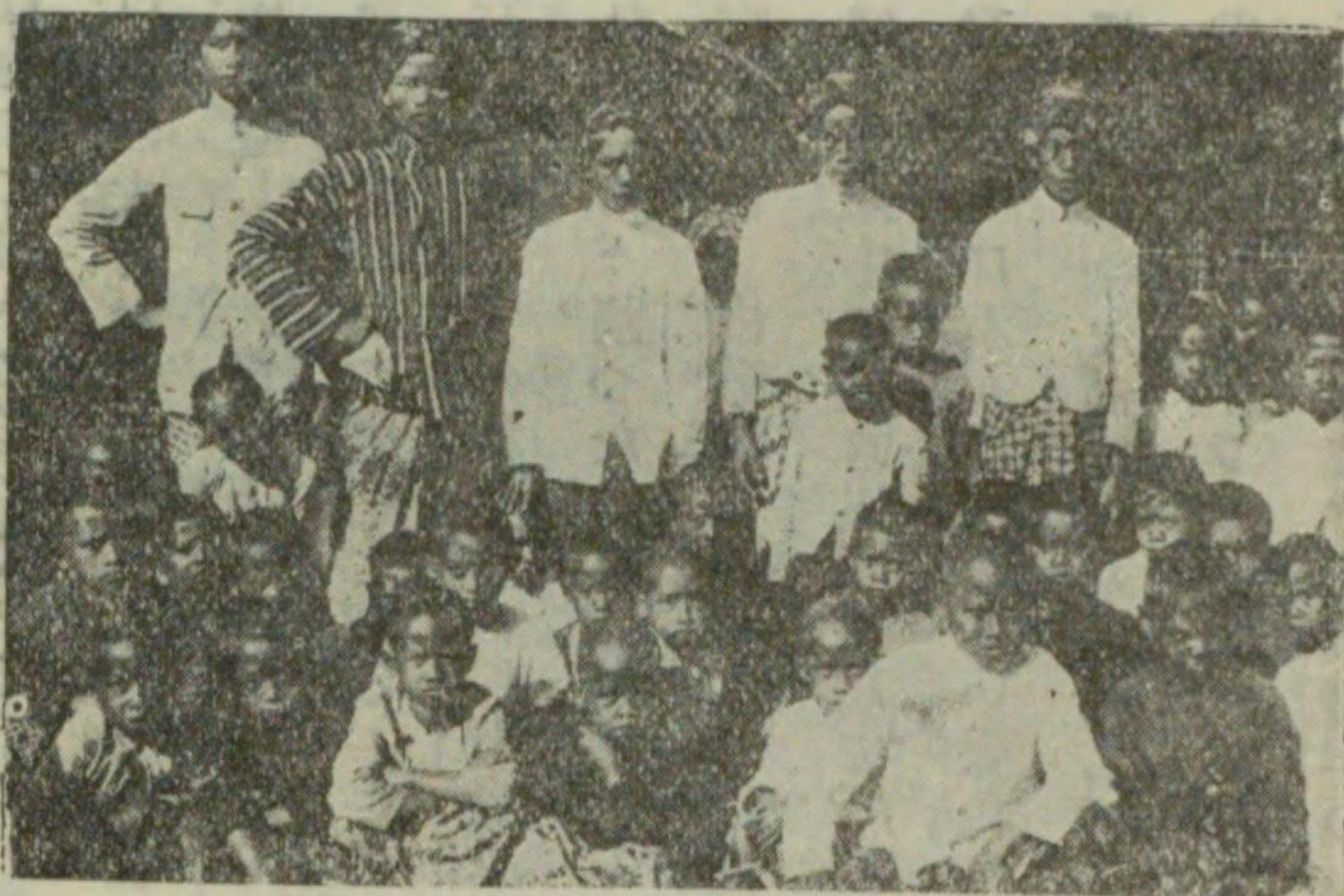
家屋は概して大きい方である。間口五六間は普通で、中には八間以上のも見當る。地上に建てられた太い柱の上に居室を造る、この型は何處も同じであるが、こゝで珍しいと思つたのは竹の屋根であつた。竹の柱や竹の板壁は普通に觀るが、竹の屋根は珍らしい。それは、竹を一尺位に切りこれを割る。割つた竹は皮を内にし、肉の方を外にして柿葺にするので實に小奇麗なものだ。

湖岸に出る。白砂遠く續いて、遠淺になつて居る。水は奇麗、小石も數へらるゝ程である。右手には危岩水中に突き出して居て、風趣ある樹木がその上に生ひ茂つて居る。鎌倉邊に見掛ける風景である。日本人には珍しい景色でもないが、南洋スマトラの風景の故山のそれに髣髴たるところに、言ひ知れぬ興趣を覺える。

この部落にはコーランを教へて居る私塾のやうなものがある。中をのぞいて見ると、子供は床の上にあぐらをかいて、馬來文字のコーランを讀んで居た。これは極めて不規則な寺小屋式のも

のであつた。

小學校の教師と兒童



もあるが、それ以上になると駄目らしい。

宿舍の近くに學校がある。これは兒童の服装も一定して居、きまりよく一時間毎に庭前に整列して教場に這入つて行く。四學級で二百人あつた。

教師は皆土地の人で師範學校の卒業生らしいが、教授しながら煙草を喫んで居る。教師の話によると、經費は政府から支出されるが、父兄からも授業料をとつて居ると云ふ。授業料は均一でなくて三等級に別けられてゐる。最高月一盾である。

學科は簡単な算術、圖畫、博物、地理、蘭語などで修身はコーランであつた。

兒童も小學校ぐらいの處は、相當理解力もあり伶俐で

西海岸の漁港コロイ

こゝから西海岸のコロイに行くには、本道に引きかへして、セミヌン山の山腹を超えて海岸に下るのである。この山道も可成り急であるが、上り切れば珈琲園もあり、相當廣い地積もある。こゝにリワと云ふ一寸した町がかつたところもある。リワから三十二キロ、坂を下ればコロイに出られるのである。

コロイに居る唯一人の邦人に梅森君と云ふ人がゐる。

梅森君の家を探してこゝに飛び込む。君は寫眞屋をやつて居る。妻君は支那人の娘であるが、お産の爲め親許爪哇の方にやつてあるといふ。男世帯で下男を使つて、コーヒーを出したり色々心配して呉れる。中々容易じやない。

コロイは一つの漁港に過ぎない。戸數は一千くらい。椰子の並木などのある町である。こゝは地積が狭くて餘り産物も饒ではない。

土人は金を相當蓄へて居るが、無駄な金は一錢もつかはぬと云ふ。だから、梅森君の寫眞など

もお得意がなくて困つて居る譯だが、珈琲園の御用を勤めて居るので立つて行けると云ふ。南洋に於て蓄財の念が強いと云ふので、如何にこの土地が天恵の少ないかと云ふことも想像出来る。午後は引ききりなしの豪雨である、官営宿舎は一つあるが今普請中で客室がないと云ふ。他にホテルもない。梅森君の家に休んで居る間に、官営宿舎に晝食を依頼したが四時頃には出来ると云ふ。雨はまだ止まない。官営宿舎に行き漸く晝食にありついた。否、晩食にありついたのである。持参のビール瓶につめた茶をのんで食事をすませた。ホテルもないので雨を衝いて、リワに引き返へして宿る。その翌日バトラジャに歸つた。

これを要するに、ラナウは氣候は清涼であるが土地がない。白雲さ迷ふ峻嶺も大会社の租借地で手のつけやうがない。政府の測量技師は永年に亘つて各地如何なる山奥までも調査をし、苟くも有望のところと観れば、大会社に話し込む。そこで會社は廣大なる面積を租借して、事業を始める。事業に着手する頃に政府の方に運動して國道を開かせる。忽ち恐ろしい地價の高騰を來すと云ふ譯で、國道が開けてからに有利なところなど残つて居るわけがない。

コロイに至つては國道が通じて幾分發展の曙光が認められて來たと云ふだけで、地積の狭い、

印度洋の激浪打ちよせる濱邊で、港灣の設備もなく、土地にさしたる産物もないから、まあ見込らうと云ふものであらう。

只バトラジャからモアラドアに行く間、この邊、胡椒園や護謨園が出来て居つたが、調べて見たら餘地があるかも知れない。

八十キロを飛び廻るフロックコート

バトラジャにはホテルとしては、支那人經營のもの、外官営宿舎がある許りだ。支那人の旅館は、南京虫の襲來位は覺悟せねばならぬが、水浴場やお勝手に小便をされるので閉口である。官営宿舎の方が無難故、こゝにとまることゝした。

この夜本田君と語る。

一ツのフロックコート否古く、コートの方であるが、これが八十キロを忙はしく飛び廻ると云ふ話があつた。

本田君が活動寫眞をやつた頃に一着のフロックを持つて居た。もう十年からになる代物である

が、パトラジャの支那人がそれを知つて御祝儀の時に借りに来る。大分御用を勤めて居る間に今度はモアラドアの支那人が、それを知つて借りに来る。それで、今ではこの附近一帯飛び廻つて居ると云ふ、「支那人はそんなに貧弱なものばかりですか。」と聞くと、「イヤどうして、金は持つて居ますが、偶にしか要らぬやうなものには彼等は決して金をつかひません。」と。

宿舍の社交室では、蘭人が三四人盛んに話して居た。後で本田君にきくと、彼等は蘭人商店の店員であるが、今度の日貨排斥について互に論議して居ると云ふ話。それ等の連中は、この機会に日本品を安く買つて、歐羅巴の函につめて賣る方が有利だと論ずるものと、否徹底的に歐洲品の販路擴張を圖るべきだと説くものとで、中々高聲に熱心に論じて居つたのである。一小店員等の議論ではあるが、大體外商の意のあるところはわかる。需要者は土地の人であり、支那人は仲介者である。仲介者が罷業すれば、日本商人の活躍か外人の活躍か何れかを促進する機会をつくるに外ならぬ。

支那人ボイコットの失敗

支那人の商店が嘗てインターナショナルと云ふ會社に對し不買同盟を行つたことがあつた。支那人は今に會社が閉口して妥協を申込んで来るだらう、と高をくゝつて居た。ところが大違ひ。會社は支那人側が度々横暴なことをやるので、今度はウンと腹をきめてかゝり、早速自家の店員を地方に出して、

今度からは支那人の手を経ずに、直接取引し直段も精々勉強しますから、何分御願ひ申ますと見本を持つて廻らせた。

地方の小賣商人も、支那人の驅引の多いのと、品物の不確實なのとに困つて居るところへ、大會社から値段を安く卸すと云ふのだからこれは歓迎された。

また、會社でも小賣商と直取引を始めてから、幾つかの有利な點を發見した。

第一は危険率が少いことであつた。それは支那人と云ふのは天性欺瞞術に長じた人種で、自分の借金が巨額の高に上ると、故意に詐偽的破産をやる。そして破産する頃には既に新しい商店が出来て居る、名義こそ違へ同一人の資産である。それで債権者との交渉になると、三割拂ふとか、二割で勘辨して呉れとか、普通の取引のやうに平氣でやつて居る。そこで憤慨して裁判所に訴へて見る

が、和蘭の裁判では大抵の場合無罪になる。その上、一軒破産されたとなると、少くも二万や三万はやられる。然るに小賣商ならば精々二千か三千、二千や三千では小賣商は決して卸店に迷惑をかけて信用を失墜するやうなことはしたくないので、危険は殆どない。

第二は店員から支配人まで直接見廻るので、始めて實情がわかつて来た。店の情態もわかれば地方の景氣の實際も見えて来た。販賣上の適切な方針も立つ。これまで支那人に任せてある時は、これは慥に賣れさうだと見込みをつけて取寄せた品も、支那人の手に渡れば庫に仕舞ひ込んだ切り出さない。土人が買ひに来れば、品拂底で會社の方に催促して居ると云ふ。會社の方から未だ賣れないか、ときくと彼等はどうも賣れ口が悪いと云ふ。

そこで會社も見切りをつけて、愈々原價で投げ賣りの外ないとなつた時に、支那人は値をうんと踏んで安くさせ、土人の小賣店の方には、「扱愈々荷がついた、しかし減法高い、高いが品は良い早く買つたり！ 今買はぬと品は直ぐなくなる。」と景氣をつけて高値で賣り拂ふ。かう云ふ手でいつも會社はやられた。

會社では不買同盟に刺戟されて、これ迄晝は會社の卓の上でペンを走らせて居、夜はウキス

キーを飲みダンスをやつて居れば良かった境涯から脱却して、荷物をかついで田舎廻りを始めたので、始めて商賣の眞諦がわかつて来た。もう支那人を頼る必要がなくなつて来た。

支那人の方は、今に會社が閉口して来るだらうと待つて居たが、一向そんな風はない。よくよく聞いて見るとどうも直接取引を始めたらしい。さあ大變！ かうなつたらぐず／＼して居れないと、會社にこちらから妥協を申込んだ。だが會社では、「折角だが、こちらも漸く御得意をつけた許りですから、今少しやらせて戴きませう、そのうちに機會を見てお願いひませす。」と體よくはねられた。

今さらもがいても仕方がない。會社の拾ひ残しの危かしい小賣商を相手にするより外途がなくなつた。その爲めほんとうに破産するものも出来た。

それで今では小賣商人は居ながら、大商店から見本を持つて来て註文をとつて行くので、すきな品が買へるやうになつた。蘭人の大商店は中々大勉強で活動して居る。

翌朝午前十時に、本田君が自動車を持つて来て呉れた。荷物を積み込む。發車は十一時十五分であつた。

一等室は皮張りの椅子で、部屋もすきくして居たが、金網をもれて煤煙や、塵埃が遠慮なく飛び込む。

汽車は雑林や草原や油椰子園や、護謨園の中を走つて、日暮れて七時頃にランボン州の新興の町タンジョンカラんに着いた。

前に電報をうつて置いたので、ホテル・タンジョンカランの川崎君の店のものが、驛に迎へに出て居て呉れた。

新興の市街タンジョンカラ

タンジョンカランは今の處までランボン州の首府ではない。首府ではないが、理事官廳は遠からず、現在のトロバトンから移轉されることになつて居る。

戸数は現在は七八百位のものであるが、大市街建設の計畫の下に古き道路は改修築を急ぎ、縦横に新しい道が出来、陸軍の飛行機着陸場があり、病院があり、諸官吏の住宅が集まつて居る。店としては支那商店も土人商店もあるが、日本商店として川崎洋行がある。川崎洋行はこの町

では一流の雜貨店である。

日に日に家屋は新築され、鉦の響、槌の音がにぎやかである。夜明け前から夜十二時過ぎまで、自動車の警笛の響がずっと。

何故タンジョンカランは盛んになつたか

何故タンジョンカランは盛んになつたかは現在の州廳の所在地トロバトンが、何故に衰微するか……でわかる。トロバトンは昔の漁港であつて、いかに浚渫しても直ぐに埋まつて良港にならない。已むを得ずその先き八キロのところに東港と云ふ新港をつくつた。これは一萬噸級の船を繫泊するに足る良港である。亦トロバトンは海岸のマラリヤ地帯で不健康地である。それで次に四キロ離れたこのタンジョンカランの高燥の地に住宅地を構へたのである。

貨物は東港に陸揚げされるが、トロバトンに送るも、タンジョンカラんに送るも、僅か四キロの差である。而も住宅地が後者である以上、需要者は後者にある譯である。

今ではトロバトンは何等意義を持たない町となつてしまつたので、理事官廳もタンジョンカラ

ンに移されることゝなつたのである。新廳は出來て居るが只、現在の理事官がトロバトンの急激の衰微と人氣の悪化を慮かつて、移轉の時期を見て居ると云ふに過ぎない。

以上はトロバトンを凌駕する理由であるが、タンジョンカラに更に有利なことは、北パレンバン方面に行く國道と、山を越えて西の方コアゴンに行く國道との分岐點であり、そしてこの附近一帯が、油椰子とか、護謨とか、珈琲などの大農園を控えて居るので、非常に物資が豊富である點である。

爪哇スマトラ連鎖の第一關門

パレンバンを朝六時に出發すれば、夜七時にタンジョンカラに着く。こゝから東港まで自動車で二十五分である。東港から爪哇には毎日聯絡船がある、夜の九時にこゝを出帆すれば、翌朝六時には爪哇の西海岸メラツクの港につく。又晝間の船は午前六時にバタビヤを出發した客をのせて午後の五時には東港につく。汽車には夜行はないのであるからタンジョンカラに宿らねばならぬと云ふことになる。聯絡船はどの船もどの船も爪哇からの労働者や、商人で

充たされて居る。これらは一たびタンジョンカラに集まつて、ランボン州からパレンバンの各地にばら撒かれることゝなる。

この町の日本商店

川崎君は今から十五六年前に南洋にやつて來た。始めは日蘭の賣藥か何かやつて居つたやうに聞いて居る。今、雜貨店としての支那商店も可なりあるが、川崎洋行などは一流どころである。否、タンジョンカラに於て一流どころのみでなく、スマトラ全島邦商中、その内容が充實し、最も堅實に營業をやつて行けるものを數へ挙げたら、先づ指を折られる方であらうと思ふ。

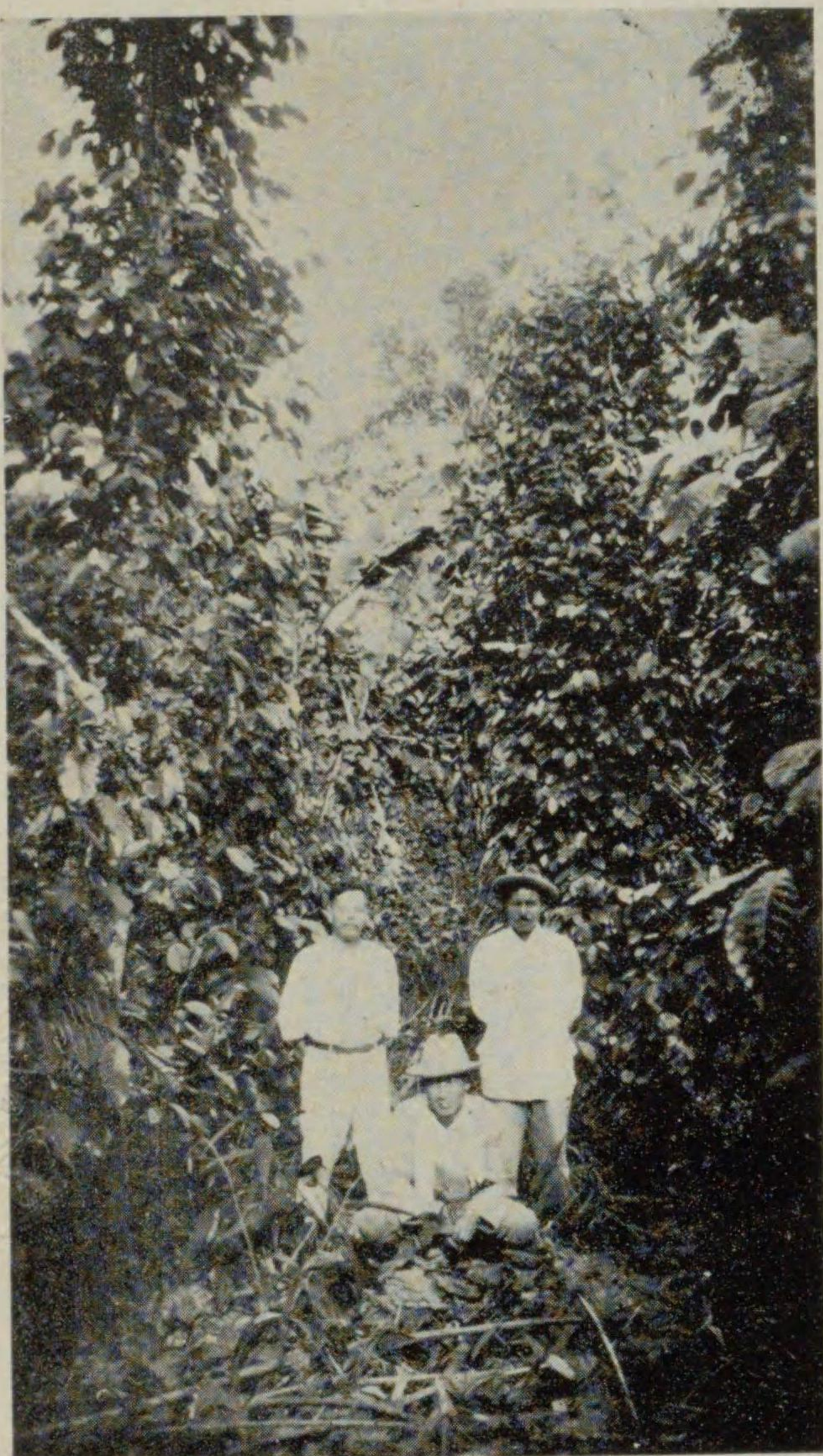
川崎洋行主人の兄さんの經營するホテルはホテル・タンジョンカラと言ふが、三十幾つかある部屋は毎夜滿員の繁昌である。客には土人もあれば蘭人もある。ホテルと云つても、朝コーヒーとパンを出せば良いのである。この親父さん店先きに出て椅子に腰かけて居るが、御世辭一つ言ふのでもない。帳面は土人の店員がつけ萬事は驚く程安い給料で働く土人の下男がやつて呉れる。その上部屋代が毎日五六十盾になるのだ。しかも、お斷りをする程繁昌して居る。

ホテルの隣りに最近開業したばかりの本村君と云ふが、寫真と齒醫者の看板をかけて、營業して居る。タンジョンカランの日本人としては川崎君兄弟とこの本村君他一軒だけである。

和蘭退職官吏の新開村

和蘭人と土人の女との間に出來た混生兒は可成り多いが、混生兒は蘭人の間には輕んじられて居、社會上良い位置を得られない。偶に優良なものがあつたにしても、生粹の蘭人よりはズツと待遇が落ちる。これが、彼等一般の不平である。で、土人よりもむしろ混生兒の方が、餘程思想が悪化しつゝあると言はれて居る。この事は和蘭當局の政策と苦心とを要するところである。

それで彼等永年官職に在つたものには、低利資金を貸與し、新しい村をつくらせ、その生活の安定を圖らうと云ふ計畫で、先づ第一の試みとして出發したのが、このI.E.Vの村である。村の位置は、タンジョンカランから西方の高地に向つて進んだところ、九十五キロの地點にある。行く道々には大會社の農園があり、護謨もあれば椰子もあり、護謨林の中に珈琲を植えてあるのも見える。



成木せ胡椒 胡椒朝顔の蔓莖植物で
 高き五十メートル位まではびる樹齡は十二年
 内外面は實果は小さい圓形の粒で始めは緑
 色赤々なく黒にひましくなく

六十キロ位ゆくと、海拔も高くなる、気温もずつと低り、雨さへ降つて来たので、白の夏服では、肌寒く感ずる。レインコートでも持つて来れば良かったと思つた。この邊は水田など見える。愈々目的的地なるI.E.V。農園に着いた。

I.E.V 農園

細雨霏々として降る。川崎君の紹介して呉れた人の家を訪ねる。子供が自動車の横につかまつて案内して呉れた。

行つて見るとクラブのやうな所である。そこへ四十五六の肥えた頑丈な骨格の人が来た。ウキスキーでも差上げませうかと云ひ、いろいろ私に話をして呉れた。

現今は二十三家族がある。一家族二十五バウ宛で、租借總面積は五千バウ、始めに馬鈴薯を作つた處が、市場に遠く餘分に作つてもハケ口に困つたので、今ではコーヒーを作る事にした。コーヒーはロブスタ種で一バウに約八百本宛植えて居る。三年目の収入は、二千斤位はあることが確實になつて、今は安心して居ると云ふ。



道木並る至へヤビタバラか港クオリブンヨジンタ へ市ヤビタバ
。いならゝかはと分十で車動自哩十でまヤビタバいし美に實は



の達人土てみてじ通に横縦が割堀はに中市のヤビタバ -デンマ
たけ着をンロサるみてつなにうやる來出の濯洗や(浴水)-デンマ
(見所中市ヤビタバ)むしそいに濯洗び浴を水てしと々嬉が達女

それまでに借地経費や、家屋建築、爪哇苦力を入れて耕作を助けて居るので、十萬圓の資金を投じたといふ事であるが、學校もあり、道路も作り、住宅事務所、種子を初め、食糧等で一戸當り、四千何百ギルグーでは安いものであると思つた。

空腹を感じる頃になつたので、持參の辨當を此處で食べる事にした。ポイイはコンビーフ等を暖めて呉れる。食後近所の家を見る。雨が降つて來たので、貸して呉れた支那の雨傘をさして見ている。開墾地焼跡に伐り倒してある木が馬鹿に大きいのは驚く。直徑一メートル位の樹が、縦横に倒れて居るのだ。後でこれを建物材にもすれば、薪にもすると言つて居た。コーヒーも澤山に植はつて居る。植えてから二年位にはならうか、覆木を植えて日覆ひをこしらへてある。苗の畑もある。

この邊は地味は肥えたものであるから、芭蕉の如きもよく茂り、各種の野菜類が實によく出來て居る。鶏舎もあつて數十羽の鳥が居り、米も粃のまゝ貯藏してある。

窪い處には川も流れて居ると案内して呉れた。

水量も豊富で上には少し淀ませて水浴場など造つてある。

こゝには病氣と云ふものは更にないと云ふ話であつた。家は初めに建てたものは、竹壁の粗末なものであつたが、今ではコンクリートの柱など立たつて居るから家屋を新造する計劃らしい。この人は、自分はボルネオや、彼方此方を見て歩いたが、こゝ程に良い土地はなかつたのでこゝに決めたと云つて居る。

如何にもこゝならば、標高五百五十五メートル。四季清涼で、土地は肥沃で、原始林が鬱蒼として居る。水もあり、道路も開通されて居て、便利である。この新開地の前途は有望である。次の經營に對しに新に出資者があるらしい。

表の道路を五六キロを西に進むとこゝに峻峻な坂があつた。二キロ半ばかりの間は自働車は進まないが、今傾斜を緩やかにして自働車道路を作りつゝある。この道路が開通すれば、西海岸にあるコタアゴン港に二十何キロで達することが出来るのである。併しこのコタアゴン港は風波が荒らなくて、良港ではないと云ふ事だ。

この急坂の下まで行つて觀て、この地方と形勢等考へて見る。この時、雨は止み、白雲のきれ目より青天を仰ぐ、東タンヂョカランの方を望めば、天開け、周り幾抱の喬木鬱々として茂つて

居る。

爪哇人の移住地

歸途ジャワ人の移住地を觀る。此處はタンジョンカラランよりは二十一キロの地點より分岐したる道路を數キロ行つた所にある。

今より二十三年前に政府が米作を目的として、ジャワ人を移住せしめて開墾させたものである。現在は人口二万許りに増加して居る。土地高地よりは幾分瘠薄である、しかし道路は日本の田圃の間の道路の様なものではなく、自働車で乗り廻すことが出来るものである。

部落の状態を見るに、椰子と芭蕉に包まれたる家は相當に裕福になつて居るらしい。雜貨店もある、政府は特に、此處に銀行を設けてある。米の貯藏倉庫もある。

町の村長格の人を訪ねて、一所に自働車で廻つて觀る。猶近頃新に開墾を始めた所もある。

和蘭政府は人口稠密生活難のジャワからスマトラに移住せしむる事には随分骨を折つてゐるのである。

和蘭政府が、如何にして稠密な爪哇の人口の幾分かを、外領に遷し、調節分配宜しきを得しめんかとは永い苦心であつた。この計畫を樹て、極力獎勵を試みたのが千九百五年で、今から二十年以上も前の話である。けれども、現在この爪哇植民にしてからが、戸數は僅かに五六千、人口で二万ソコ／＼のものである。

元來爪哇人は、食糧饒で風光明眉な郷土に永く安住の習慣を作つた。暴風もなく洪水もなく地震や噴火はあつたが、高地に行けば氣候は清涼である郷土を極樂と觀じ、執着して來た。年々契約移民として三万の人は外領に出るが、金の五六十ギルダも貯まれば、故郷の地爪哇に直ぐ舞ひ戻つて仕舞ふ。それも西部爪哇の一部しか出稼には出ない。ソロ王領地では、子供が泣くと移民に出すと言へば泣き止むと言ふ位、恐ろしいものと思はれて居る。で、爪哇人を外領に移すのは随分困難な問題と見られて居る。苦力として外領に出稼ぎをするところは、西部爪哇であり、又、苦力の本場から最も近いのがランボン州である。随つてランボン州を爪哇人のために保留して置くこと云ふ必要もあるので、政府は租借の許可をしぶる點もある。

肉荳蔻の産地であるので、和蘭と葡萄牙との衝突の爲め、パンタ諸島の土着民が根絶してしまつた事もある。和蘭人がいやが上にも香料の價格を維持せんが爲めに、他島の肉荳蔻を伐採してしまつたり、又、本國アムステルダムでは、商品を焼きすてたりしたことがある。元和九年にはモロッカス群島中で蘭英の衝突の爲め、日本人迄が英人と共に悉く蘭人の爲めに殺されたことも

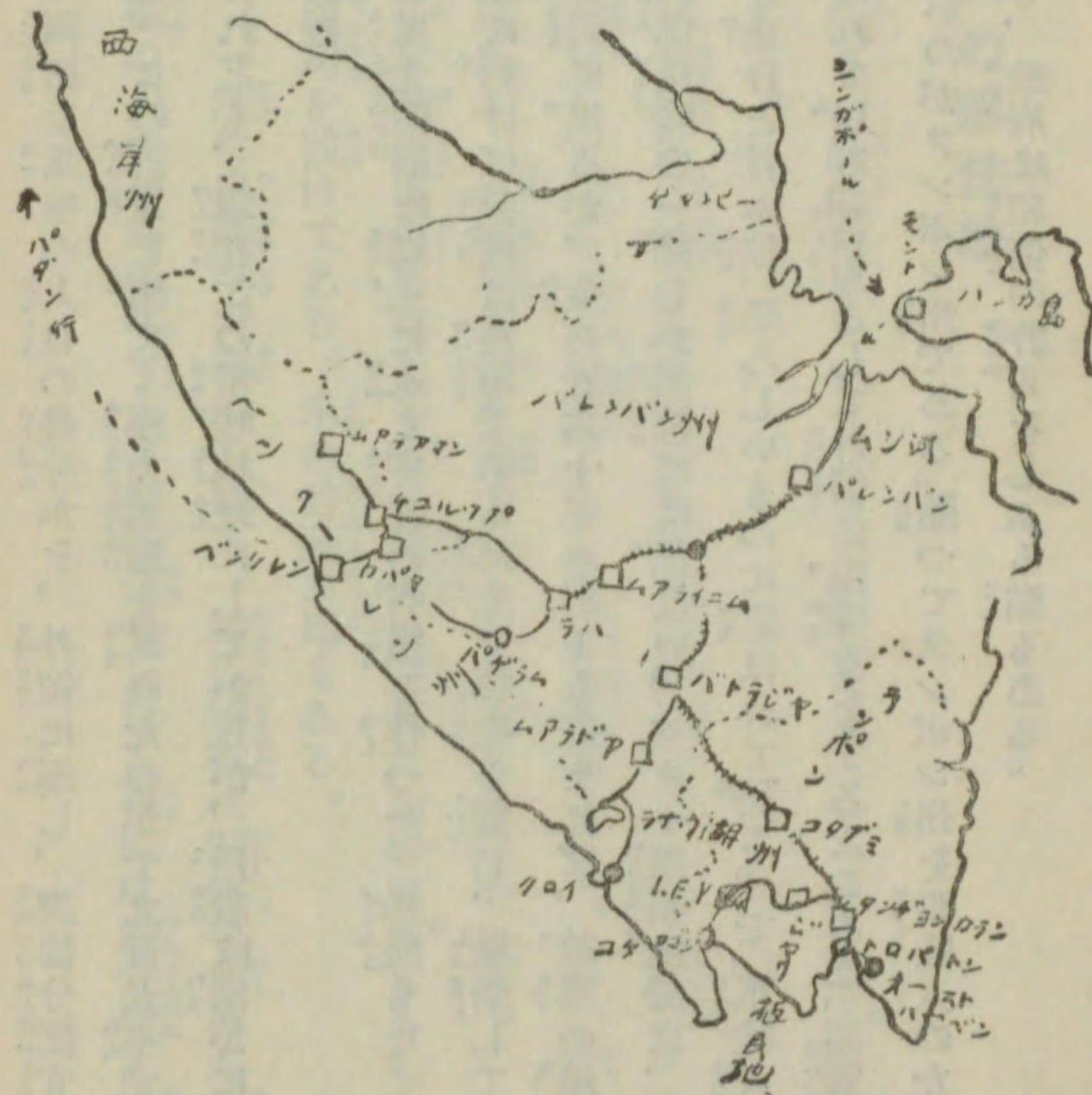
爪哇、スマトラで、スマトラではこのラムボン州が盛んである。昔、歐羅巴では東洋の胡椒が非常に珍重され、黄金に次いで尊ばれた時代もあつた。そして、これが抑々マゼランが世界一週の動機となつた程であつた。で、初期の土人の貿易と云へば、この香料即ち胡椒、丁香、肉荳蔻などである。

土地の物産

大規模農園に椰子園、護謨園、オイルパーム(油椰子)園があり、土人一般の作物に胡椒がある。

胡椒の主産地は蘭領東印度、シヤム、馬來半島、印度のマラバール海岸等である。東印度と云ふが

(南スマトラ)



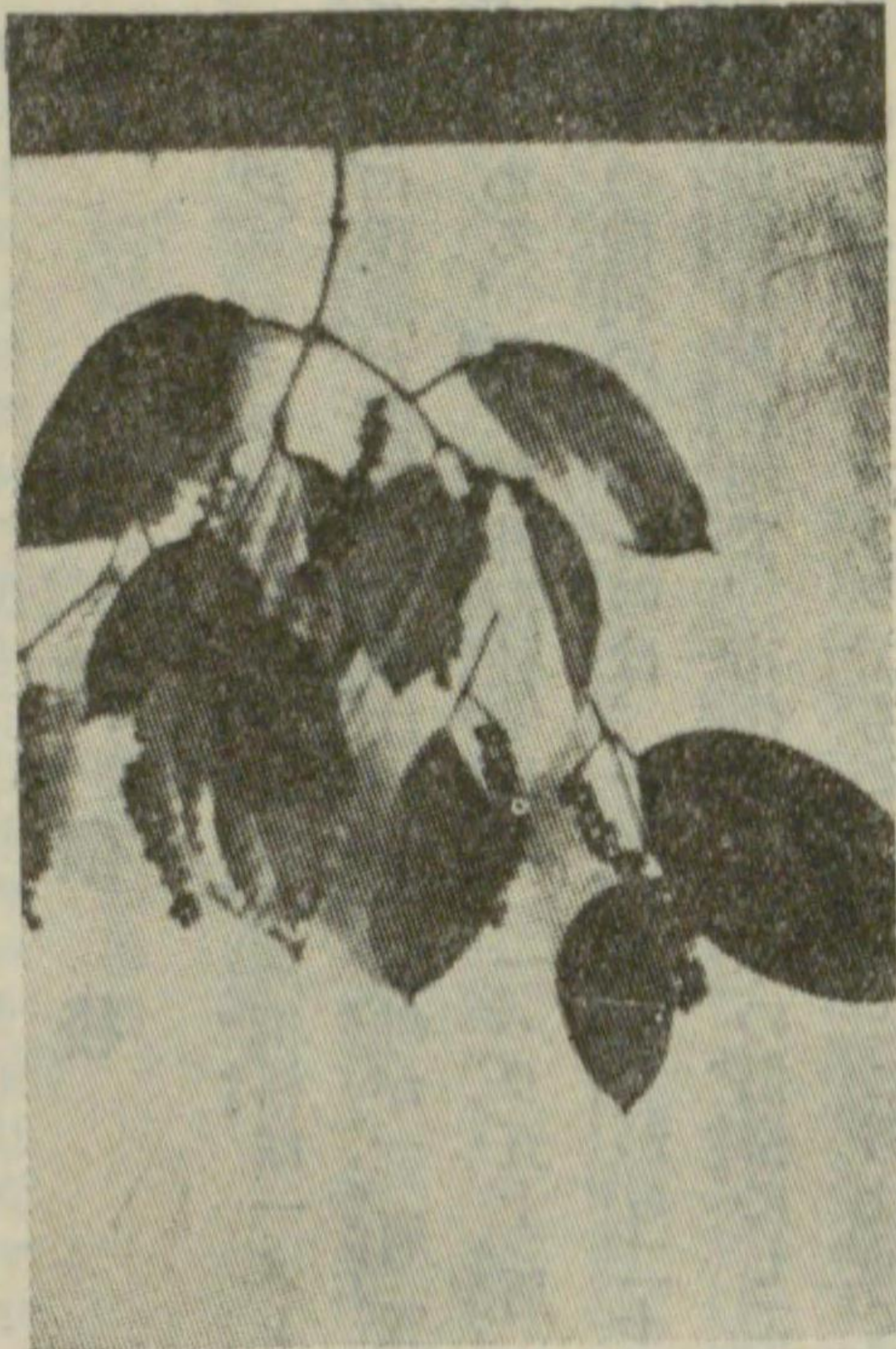
あつた。兎に角、南洋が寶庫と目されたのはこの香料がある爲めであつた。その爲めに死に物狂ひの争ひまでやつた。

扱胡椒であるが、胡椒には白胡椒と黒胡椒の二種類がある。これは植物に二種あるのでなく、製法によりて二種類となるのである。

胡椒は朝顔のやうに蔓莖植物で、高さ十五メートル位まではのびる。又樹齡は二十年内外である。果實は小さい圓形の粒である、初めは緑色で、段々赤くなり、しまひに黒くなる。黒胡椒は熟し切らぬうち、一部赤くなつた頃に之を採集すれば良い。白胡椒は充分熟したものをとつて果皮と種子の外側の皮肉とをとり去り、果肉だけで製するのである。この方は手數もかゝり、分量も少なくなるので高價である。胡椒はタンジョンカン地方ではラダと呼んで居る。西洋料理に用ゐるペッパー (pepper) のことである。

本年(昭和三年)の胡椒相場は一ピクル(百斤)七十五ギルダであつた。良く成熟した木からは一本から五斤を得るものも少なくない。一バウ千五百本植付とすれば、七千五百斤を得ることゝなり、その價格は五千六百二十五ギルダである。市場の平均相場は白胡椒一ピクルにつき五六

胡椒



十ギルダ、黒胡椒が三四十ギルダ位と見れば間違ひない。

土人のやり放しの農法でも、一バウから千ギルダから千五百ギルダを得て居るのである。

收穫は乾雨兩季に一度づゝ、年二回ある。收穫時には忙しいが、平生の管理には手がかゝらぬ。ゴムの如く毎日均一の勞働がある。と云ふわけに行かぬので、大農園式には不向きであるが、家庭的の農園には適して居る。土人のやり方も支那人のやり方も、古來傳統的な栽培法を墨守して何等改善を加へないが、もし、これを日本人の手でや

るとすれば、園藝的に細密の注意を拂ふので、必ず成績があがるに相違ない。

虫害もあり、病菌もあり、鳥害もあるが、これには夫々驅除法もあり、手當法もある。就中病虫害にはトベの根を砕いて水に擦つて、乳白の毒液をとり、これに唐辛子、煙草、木炭、タテ草

などをまじへて薬液をつくり、これを噴霧器でかける、これが一番よく利くさうである。
土人は胡椒を食物の調理に用ゐるが、婦人の産前産後その外の薬として用ゐる。甘酒、濁酒をつくる素にもつかふ。兎に角、胡椒は今でも有望な栽培物である。

土地價格

タンジョンカラんで、市街地の地所價格は一メートル平方一盾位、これを買ひとつて永代權を得るに税金が要る。税金は一等道路地が一盾五十仙、二等道路地が七十仙、三等道路地が四十仙である。又、郊外の住宅地は、一バウ五十盾見當ならば手に入る。幾十キロも離れた處でも土人の權利のあるものは、一バウ十盾から二十盾を要する。
今、州廳の所在地で、市街地が日本の價格にして坪七圓五十錢以下で買へるとすれば非常に安いものである。スマトラでもこの位なところは他に類例がない。しかし、これ迄年々倍額に騰つて來たのであるから、今二三年もたてば非常に高くなることと思ふ。

嚴格なる土人の風儀

タンジョンカラン地方の男女の風紀は嚴重な方で、若し亭主の留守の所に男の人が行けば、子供が出て、今は父親が留守だからといつて、女房は決して應對をしないと云ふ。

土人の男女の風儀は良いが、蘭人の方は行儀が悪い。彼等は部下の女房でも、美貌のものであればふんだくる。女も鶏のやうに威勢のよい方にくつついて行き、綺麗に飾つて得意になつて腕をくんで歩いて居る。意久地のない奴は、何處かへそのまゝ行つてしまふものもある。が、時々ピストル騒ぎなどを演出するさうである。

また、結婚について面白い習慣がある。

タンジョンカランの町から百十キロを離れたマンガリと云ふ處では、男子が結婚をしたいと云ふ場合は、女子に贈り物をする。女子は内房に居て窓だけ開けて居る。そこへ、男子は交るゝ色々の品物を贈る。女子は遠慮なしに皆受け取る。そこで氣に入つたのがあると結婚を承諾する。承諾すれば承諾した人の品物だけを受けて、その他の品は皆夫々不合格の男の家に送り返へす。

以上は男女の問題であるが、この人間は多少殺伐の風があると云ふ。ある時子供が数人表で風船玉を弄んで居た。それが一軒の店の中に飛び込んだ。店員は冗談半分にそれを隠して渡さなかつた處、子供は短刀を抜いて店員の横腹に刺し通した。五錢位の品物のことではあつたが、これは子供の例であるが、タンジョンカランではツマラヌ事で殺人の騒ぎがまゝあると。

さびれ行くトロバトン

トロバトンの町は、千戸近くもあらうか、尤も椰子の葉蔭の土人の家は一寸見當がつかないが、この海は遠浅になつて居て、いかに浚渫しても直ぐ埋まつて駄目である云ふ。少し小高い處に、理事廳があり、色々の役所がある。海岸にある商店は全部支那人のものと云つても良い。土人の家は椰子の樹の間に點々として居る。一州の理事官の居るところとしては貧弱である。町の横の方に入江があつて、ここには大分漁船が這入つて居る。この町には陶磁器を並べて居る日本商店が一軒ある。

海岸を巡りて觀る、昔突堤をつくつてその先きに棧橋も作つたらしく、今は壊敗して、只その

残骸が残つて居るのみである。前方一キロ許り距たれる處に小島が見える。この島と陸との間の海水の上に白墨のやうなものが五ツ六ツ動いて居る。海中ではあるが、よくよく見ると人のやうである。川崎君は、「あれは人ですよ。」と言ふ。蒼々たる海波を踏んで歩いて來るからには、人？ 仙？ 餘程の神通力を備へて居らねばならぬと思ふた。が、何のこた、海が淺くて海床を被ふて居るだけである。退き潮になれば全く露出すると云ふ。成程これでは良港にはなれない筈である。

港がオーストハーベンに移され、官廳と住宅がタンジョンカランにとられた場合は、トロツバントに何が残るか。只、漁船と飲食店と土人の部落とのみ、昔に還元さるゝ運命にある。

東港から爪哇へ

午後七時半に出發した。船の出るのは、オーストハーベン（東港）と云ふ。夜の幕は下ろされて、只電燈のみ煌々とした中を自動車を走らせた。

船はメーカーエルと云ふ三千噸級の下關釜山連絡船位のものである。甲板の一方布を垂れたその

先を覗いて見れば、甲板の上に敷物一枚を敷いて、その上には、右往左往、所謂デツキパツセン
ヂャーの土人の群が算を亂してゴロ／＼してゐる。

八時半には船が動き出す。港を巡る燈火は美しく輝いて居る。舊暦何日頃かの下弦の月は
え、南方には南十字星が光つて居る。この星は赤道近くならぬと見えないので、南洋に来ると妙
になつかしく感ずる。

十一時頃、内海のひろき處に出たと見え、船は稍々動揺を初める。ボーイに覺束ない馬來語で、
「アス何時に船が着くか」と問へば、六時と言ふ。「五時には起せ」と言へば、「承知しました」と
言ふ。

兎に角、早く着く事は大丈夫だが、着いた後が不案内の土地故、税關やら荷物やら多少心配に
もなるが、それはその時の事として、船室に入る。窓から盛に海風が吹き込んで涼し過ぎる程で
ある。毛布に顔を埋めて眠りに入る。

爪哇遊記

世界一人口稠密の爪哇

爪哇島は東徑百五度一分より、同百十四度三十三分、南緯五十二分より同八度四十六分の間に横はる、東西千六十五キロ、南北平均百三十キロの狭長い島である。その面積マヅラ島を合して大約五方哩、わが本州に比ぶれば約六割、臺灣の約三倍、和蘭本國の五倍弱の大きさを持つて居る。

只西部海岸に平野がある丈で、全島は山嶽の累積であり、雑居である。既に休眠火山になつて居るものもあり、又現に白烟を吐いて居るものもある。が、兎に角標高一千メートル以上のものを算へても四十座に近い。この山嶽も焼け殻の火山岩や火山灰ではなくて、頂までも樹木を育ふに足る肥沃の壤土である。そしてこれ等の高山の間には、平坦にして清涼なる高地を抱いて居る。この峻岳高嶺より流れ下る幾十幾百の長流細河は、この高地を潤し平野を潤して居るので

豊富なる物産を産する。

かういふ土地であるが故に、甘蔗に規那に廣大の地所を占有されても、猶且つ三千八百万の人口を包容する能力を持つて居る。一方哩七百六十人、驚くべく稠密なものである。わが國は山岳高峻な處は全然耕作出来ないが、爪哇では七千尺の高地にも住んで居られるからだ。

爪哇を便宜上、東部、中部、西部の三部に大別して居る。都會としては、西部の平地にバタビヤがあり、高地にバンドンがある。中部にはスマランの港があり、ソロ、デヨクジャの二王都がある。東部にはスラバヤの大商港がある。

不都合なる税關吏

船は爪哇の西海岸メラの港についた。メラは港とは言へ、ろくに人家もない、否、人家を建てる丈の地積がないところで、只、鐵軌と停車場と倉庫とがあるのみである。小山と濱邊の間の椰子の林は遠く遠く迄つゞいて居る。

五時にボーイが起しに來た。發車は六時三十分と云ふ。パンと珈琲の朝食をすませる。荷物も整

頓が出来た。これから税關だ。蘭領から蘭領に渡るのに税關の調も要るまいと思ふが、和蘭は近年の革命騒ぎにおびえて居ることゝて、彈藥武器を特に嚴重にするとか。それは尤もとして、今検査を受けようとする自分の革囊には煙草の空罐幾つかに土塊を詰めてたものがある。(これは土壤の分析をバイテンゾルの試験所でやつて貰はうと云ふのである。)これは何だと聞く、土だと言ふ。持つて見れば重い。が、何で土を大切に罐に入れて持つて行くか判らないのだらう、見せると曰ふ。仕方なしに開く。矢張り真正正味の土だ、税關吏は始めて合點が行つたらしい。

今度は寫眞帖をひねくり風景畫を観る、發車の時間は刻々に迫る。小型の手帖を見つけて、「已れに呉れ。」と云ふから、大聲に否と怒鳴る。どうにか時間迄には悉くの革囊を開かせて調べ、白墨で通關の印を置いて呉れた。後で聞いた話だが、通關料五十仙を先きに奮發すれば、何んでもなく大抵の品は皆通ると言ふから、益々不都合だ。しかも、乗船港で調べ、數時間の航海で上陸港で同じ手数をやるなど随分無駄な事だ。

良い按梅に室には客が少なくゆつくり出來た。

東印度會社の發祥地

夜は全く明け離れる、と同時に旭日が麗しく輝き出す。スンダ海峽の青波は白砂の上に打ち寄せる。濱邊には威勢よく葉を擴げて居る椰子の樹林が見える。汽車は進む。雜林が現はれる。原野がある。牛が群て居る。小さな段々になつた田が現はれる。小さな驛につく、驛では賣子が魚のほしたのやバナ、の葉に包んだ飯とか、青いアヒルの鹽卵（これは支那流で鹽と泥とにあひるの卵を埋めたものだとか）などを賣りに來る。

田野に出て居る農夫、川中に屈んで用便をたして居る幾人かの男、水田に寝ころんで居る水牛、鞭を持つて牛を逐ふ童子童女などが、又、椰子の樹、竹林、芭蕉の叢、アタツプの叢などが見えたり隠れたりする。

汽車はケンヂ山の麓を廻つてバムタム灣に出る。こゝは和蘭東印度會社の發祥地として、幾多の歴史をのこした處で、今から三百年前のバムタム灣は海水深く、船舶の繫泊にも良かったのであるが、今は一面の淺洲となつて居て港灣の用を爲さず、只、バンタムの小驛に名残を止めて居

るのみである。

此處から汽車は南に向つてカラン山の東麓を進む。

この州は山岳が崢嶸として居て沃地少なく、亦、氣候も良くないらしい。一八七九年（明治十二年）に家畜病と熱病が流行つて、家畜は全滅し、死者五方に達したこともあつた。南方に高く聳ゆる連山はケンダンの山である。ケンダン山は隣のプリアンゲル州が開拓されて來たので、その野獸が逃げ込んだと云ふ深山幽谷、人跡未踏の境である。此處にはまた、バドウィと云ふ爪哇古代の遺族で、回々教を忌つて此處に隠れて居、衣服も器物も餘程變つて居る、村からは一足も出ない民族が住まつて居ると云ふ。

車窓から日光が照りつけるので鐵戸をおろす、朝の汽車は涼しくて良い。また、この汽車は煙や石炭殻が飛び込まぬので非常に良い。

十時にバダビヤのタナーパンの停車場につく。

大バタバヤ市

バタバヤ市は舊バタバヤとウエルテフレーデンの二部より成つて居て、郊外メステル・コルネリスとを容れると、人口三十万で三方は歐洲人である。これにタンジョン・プリオークを加へて大バタバヤとなる。バタバヤ市は言ふまでもなく、和蘭本國に六十二倍の蘭領東印度全部を支配して居るところの政治の中心地である。そして、西部爪哇に於ける商業の中心をなして居る。

一六〇九年、日本で言へば徳川秀忠の治世、時の總督ヤン・ピーテルゾーン・クンが、ジャカトラを征服し、そのサルタンの王城を滅亡せしめた跡に新市街を建設した。最初はこの市街をホルンと命名したが、後バタバヤと改稱した。バタバヤと云ふのはホーランドと云ふ羅馬名であるとか。

元來バタバヤの土地は濕潤で、瘴癘悪疫が常に絶えなかつた。殊に、一七三一年から二十年間と云ふものは、最も猖獗を極めたので、土人及び支那人の斃れるものが百万を超え、蘭人も亦枕を並べて斃れるものが多かつた。一時は蘭人の墓場とまで恐れられた處であつた。が、一八〇八年

時の總督ダンデルスは不健康地のバタバヤを改革して、多くの溝を埋め、市街を包圍して居た城壁を破壊し、新鮮なる空氣の流通を計り、又バタバヤの南八キロの高燥地に、新市街を建設して諸官衙を移した。これがウエルテフレーデンであつた。

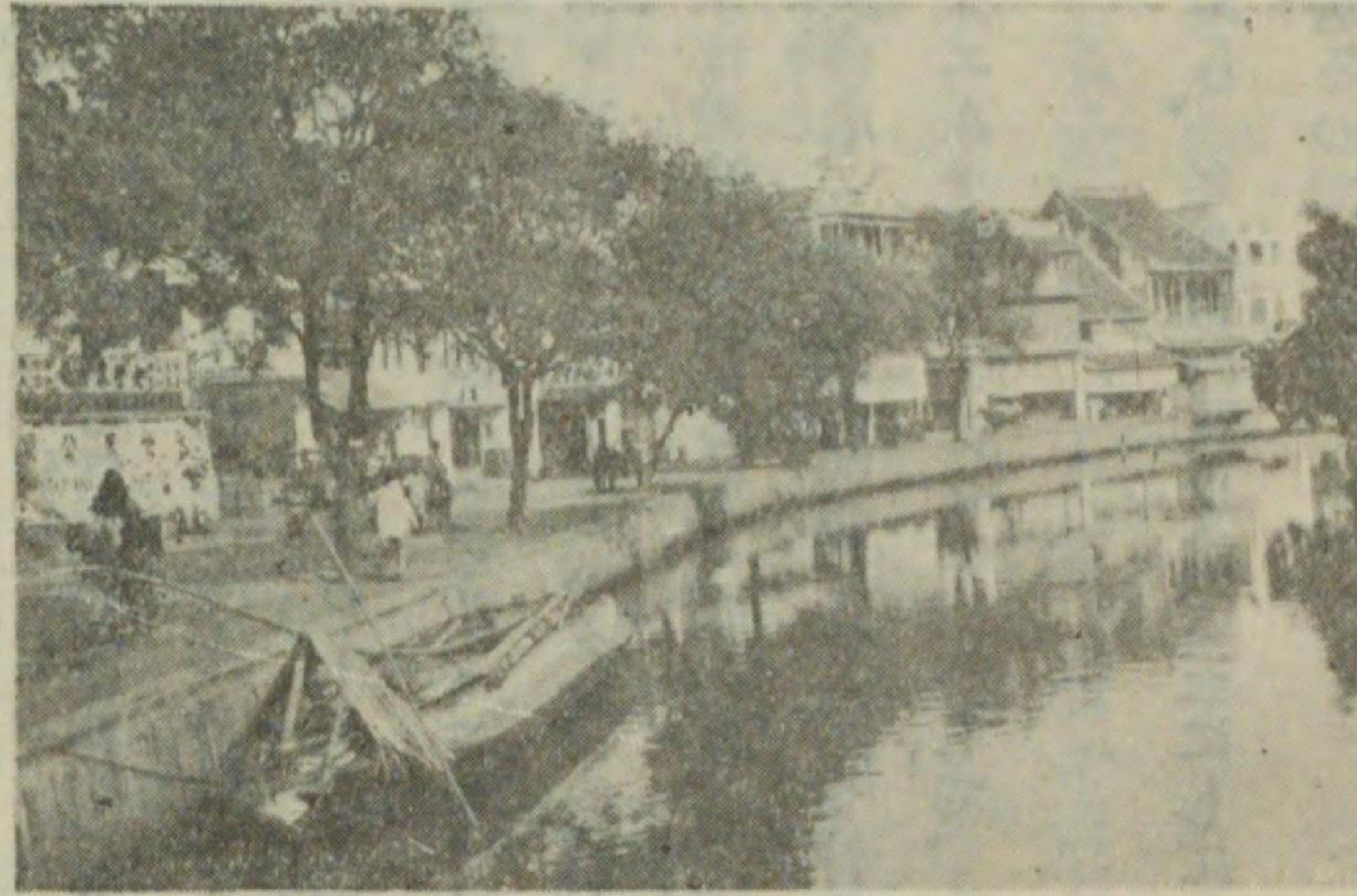
爾來百餘年、ウエルテフレーデンは遂にバタバヤを凌駕する大都市となり、それから更に南方に延びて、そこにメステル・コルリスと云ふ街を作つた。今では、ウエルテフレーデンと、タンジョン・プリオークとバタバヤ市と、この三つを總稱して大バタバヤと呼んで居る。

三つは元來別々なる町であるが、貿易上の繁盛な取引はバタバヤがその中心となつて居て、こゝに大商店、大銀行等が櫛比し、皆汗を流して奮闘して居る。これらの人の活力を恢復する安息所がウエルテフレーデンで、そして、これらの荷物の出入する處がタンジョン・プリオーク港である。

だから、これらの三つは、三にして一、一にして三、三つ合はさつて完全なる一つの都會をなして居るのである。

舊バタビヤは港としては意味がなくなつたが、猶バタビヤ商業の中心である。最も繁華な街は

バタビヤの市街



コタと云ふ一區劃である。コタと云ふのは城塞の意である。昔こゝに城塞があつたと云ふのであるが、今はそれらしいものもない。只海岸近くで寫眞を撮ることだけは禁物だと言ふから、多少要塞の意味があるのだらう。コタの商業街は、餘り廣くもない運河を挟んだ兩側岸の街である。こゝに支那人の豪商もあれば、銀行商社の大きいものも立ち並んで居る。日本人側としては、三井物産臺灣銀行、正金銀行などがある。

新市の中心地はリウオン川を挟んだノールエーク、レースエークの二ヶ所である。舊バタビヤから南に八キロ——八キロとは言へ今は殆ど街が續いて居る——行つた所が、森の新都ウエルテフレエデンである。

ピヤには支那商店多く、新市には歐人の商店が多い。

森の新都ウエルテフレエデンは、鬱蒼たる樹林、青き芝生、奇麗な草花、廣きアスファルトの道路、がつしりした風通しのよさうな家、等で成り立つて居る悠揚とした市街である。

又、こゝには總督府を始め農工部以外の各官衙がある。兵營、裁判所、市廳、郵便電信局、博物館、各學校、病院、商業會議所、銀行、公園、俱樂部、ホテル、高官紳士の住宅等、皆こゝに集まつて居る。日本領事館もこゝにある。ウエルテフレエデンは森の町であり、諸官衙學校の町であり、住宅の町である。

タンジョンプリオーク港

バタビヤが胴體なら、タンジョン・プリオークは嘴で、それも鶴のやうに長い。バタビヤから十キロの處にある。新嘉坡からは海路五百三十二哩

一六九九年、日本で言へば義士で名高い元祿十四年の二年前、バタビヤの南方に聳ゆる標高二千三百餘メートルのグノン・サラと云ふ山が噴火して、その灰はバタビヤ港を代無しにしてしま

つた。しかし、爪哇は日に増し物産も豊富になり、通商も盛大に赴きつゝあつたので、築港の必要に迫られ、一八七七年(明治十年)、二千万盾の巨財を投じて、バタビヤの西方十キロの處に新港を築いたのであつた。これがタンジョン・プリオーク港である。

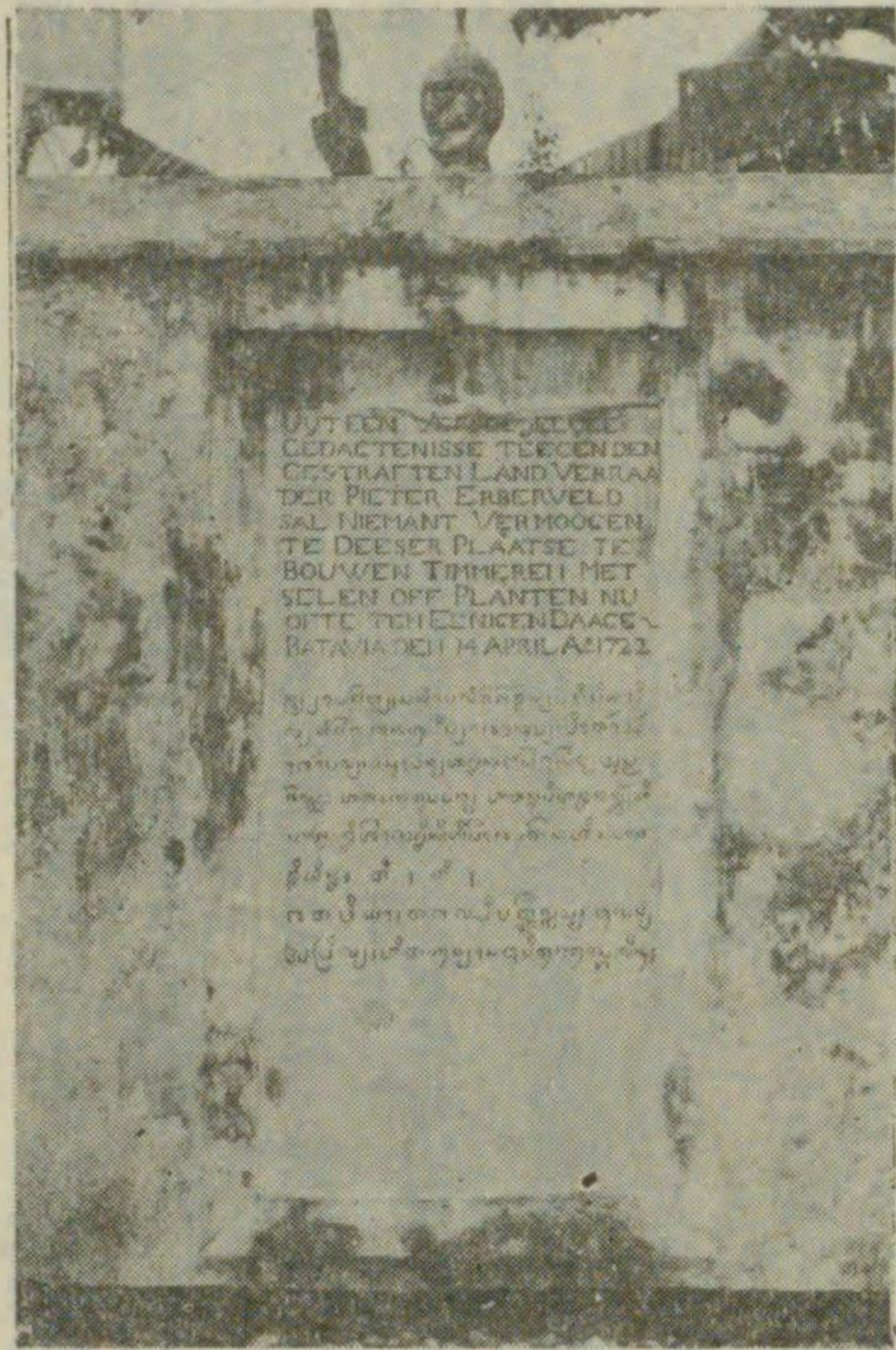
外港は長さ千五百メートルの突堤で、外海の荒浪を防ぐ。水深は十一メートルである。内港は長さ一千メートル、幅百六十メートル、近代の港灣として完備せる設備をもつて居る。その後更に爪哇の發達に適應するために、第二内港を増設した。更に第三の内港も出來た。蘭領第一の要港として立派なものである。

一寸船から見たところ、海岸には倉庫立並び、多少街がかつた處も見えるやうであるが、大體大バタビヤの船着場に過ぎないのである。

バタビヤで觀るもの

バタビヤで名高いものとして何人も案内されるのは、梟首臺とか、神聖砲とか、博物館とか云ふものである。

梟首臺と斷罪文



梟首臺はバタビヤ市の郊外にある。今から約二百年の昔、當時勢力のあつた混血兒ピーテル・エルベルフェルトと云ふ者が、徒黨を糾合して叛をはかつた。叛徒は悉く斬られ、蘭人の憎みを買つた首領エルベルフェルトは獄門に梟首された。彼の首は槍に突き通され、その上にセメントか何か塗つて洒されて居る。

下には和蘭語とスダ語で斷罪文が書かれてある。昔は多少土人を脅威する效能があつたとしても、今、何故かゝる非人道的な晒物を公開して置くのだらうか。

ペンナの門を潜つて行くと、神聖砲と云ふのがある。神聖砲か淫猥砲か、大砲の臺尻の處に人間の手足をしたものがあつて、その指が妙な恰好をして居るのである。これは土人の女子からは非常に信仰されて居る。子の出來ない者は、そこへお詣りをすれば效驗があると云ふので花や蠟

燭があげられてある。大砲には次のやうなラテン語の銘が刻んである。

Ex me ipsa renata sum (私は私の身の内から亦生れた)

博物館は東印度の昔の文化を集めたやうな考古資料や、貴重品を以て満たされて居る。爪哇に於てはボロブドールの大佛蹟、バイテンゾルグの熱帯植物園と共に、必ず観るべきものとされて居る。館の中には、石斧、石簇、土器、金環などから、家屋、船までが集められてある。

で、南洋の文化を研究するものに取つては、無上の好参考であり、多大の興味をもたらすものであると思ふが、只一片行路の客は、王冠に付いて居る徑一寸位のダイヤモンドに驚き、石造の長さ數尺の變な恰好をしたものなどに、驚異の眼を見張る位のものであつた。

ジャカトラ懐古

バタビヤの舊港に来て見れば、昔噴火のために港が淺くなつたと云ふことで、漁船が這入る位の高がバタビヤの町の運河に續いて居る。港口には水簇館や魚市場などがあり、運河の兩側には石垣が設けられて古い建物がある。こゝが昔のジャカトラである。

南蠻人追放、それは寛永十三年五月のことであつた。南蠻人とは西班牙、葡萄牙兩國の人を指すのである。

和蘭人は幕府に對しては、數々の厚意を盡して居つたので、まさか自分達迄には、と考へて居たが、空頼みであつた。島原の亂が存外手強かつたので、幕府は益々嚴重に邪教徒の取締と鎖國勵行の必要を感じ、亂の平いだ翌十六年、蘭英人とその妻子遺族の調査を始めた。今迄何事もなかつた平和な家庭に一道の旋風が捲き起つて、不安な日がつゞいた。和蘭商館員だけは在留を許され、年一回の貿易船の入港も出来ることにはなつたが、子孫を留め置くことは嚴重に禁止された。同年の歳も暮れんとする時に蘭英人はその妻子合せて十一人、愈々迎へねばならぬ悲しき運命に到達した。それはジャカトラへ追放と云ふことであつた。

その日、天も曇り勝ちに、商船旗も悲しく風にひるがへつて居る。平戸の町の人と云ふ人は、皆濱邊に集まつて居る。可愛い孫たちを失へる老婆や、母を慕ふ子供はいつまでもすがりついて泣いて居る。奉行所の役人にせき立てられて、船は錨を上げ、二本マストに帆を孕んで、やがて

海のあなたに消えてゆく。濱邊にはボンヤリと佇立するもの、孫よ娘よ、といつまでも呼びつづけて居るものなどある。

幾日幾夜か波にゆられて着いた處は、このジャカトラの濱邊であつた。

白波打ち寄る濱邊には、椰子の葉が風に揺られて居る。椰子の葉蔭にはアタツアの草葺の家がある。今船がついたので、濱邊の人達や人夫が集まつて來、そして船から出る人達の見なれぬ服装を物珍らしげに見まもつて、何かガヤ／＼話して居る。

疲れ切つた體を男の人達に介抱せられて、船から上がった女達は、遠い南蠻邊土の話として、物珍らしく笑ひさよめいて聞いて居た話が、今眼の前に事實として現はれたのは、どう考へても夢としか考へられぬ。しかし、それは夢ではなくて現實の事であると思つた時、イヤこれからはかう云ふ人達と一所に暮すのだと考へた時には、もはや悲しみも嘆きもなく、只茫然として居るのみであつた。

和蘭商館の人達は、温顔を以て介抱して何かと飛び廻つて居る。こゝに居る日本人は慰めもし、激勵もしていたはつた。この頃日本人の商店もあり日本人の在留して居るものもあつた。村上房

右衛門、濱田助右衛門、六兵衛などと云ふ人があつた。この外にも幾人かの日本人が居た。

船がつけば故國の新らしい情報が開けると、心待ちに待つて居たところ、今度のうは晴天の霹靂であつた。本國の鎖國令のため、自分たちも歸ることが出来ないとなると、非常に失望をしたのである。が女達が同國の人に會つて嬉しくもまた新らしい悲みに嘆く憂きにやつれた姿を見ては、心から慰め勵ますの外はなかつた。とりあへず蘭人や日本人の家に落ちついて、毎日毎日集まつては、その後の故郷のやうすなど語り會ひ、又新しい生活の準備などをして、憂きが中にもいつしか馴れて月日は過ぎたのであつた。

○
翌十七年には、又残りの四十餘人のものが、退去を命ぜられてジャカトラに來たので、新しき悲しみを抱いた人を迎へた。

きのふけふと思ひながら、はや三とせの春をすぎ、けふは卯月の朔日、まだ東雲に、あすは出船と人の聞えつるに、せめて筆の跡にてもと存じ、涙ながらに硯にむかひたり。

三年の月日がたつた時、十七歳の乙女はる女が、思慕戀々の情に堪えず、故郷の人によせた文

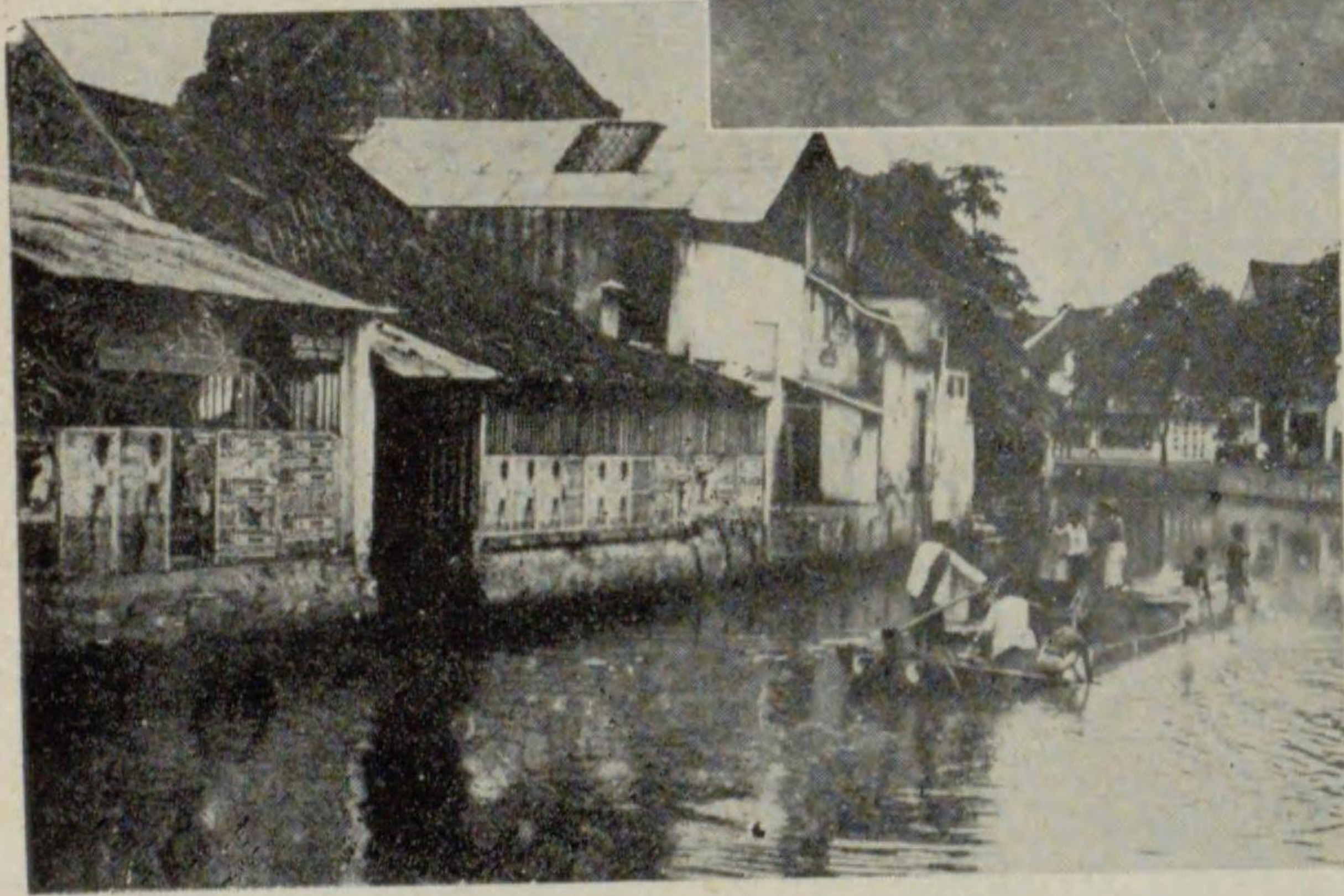
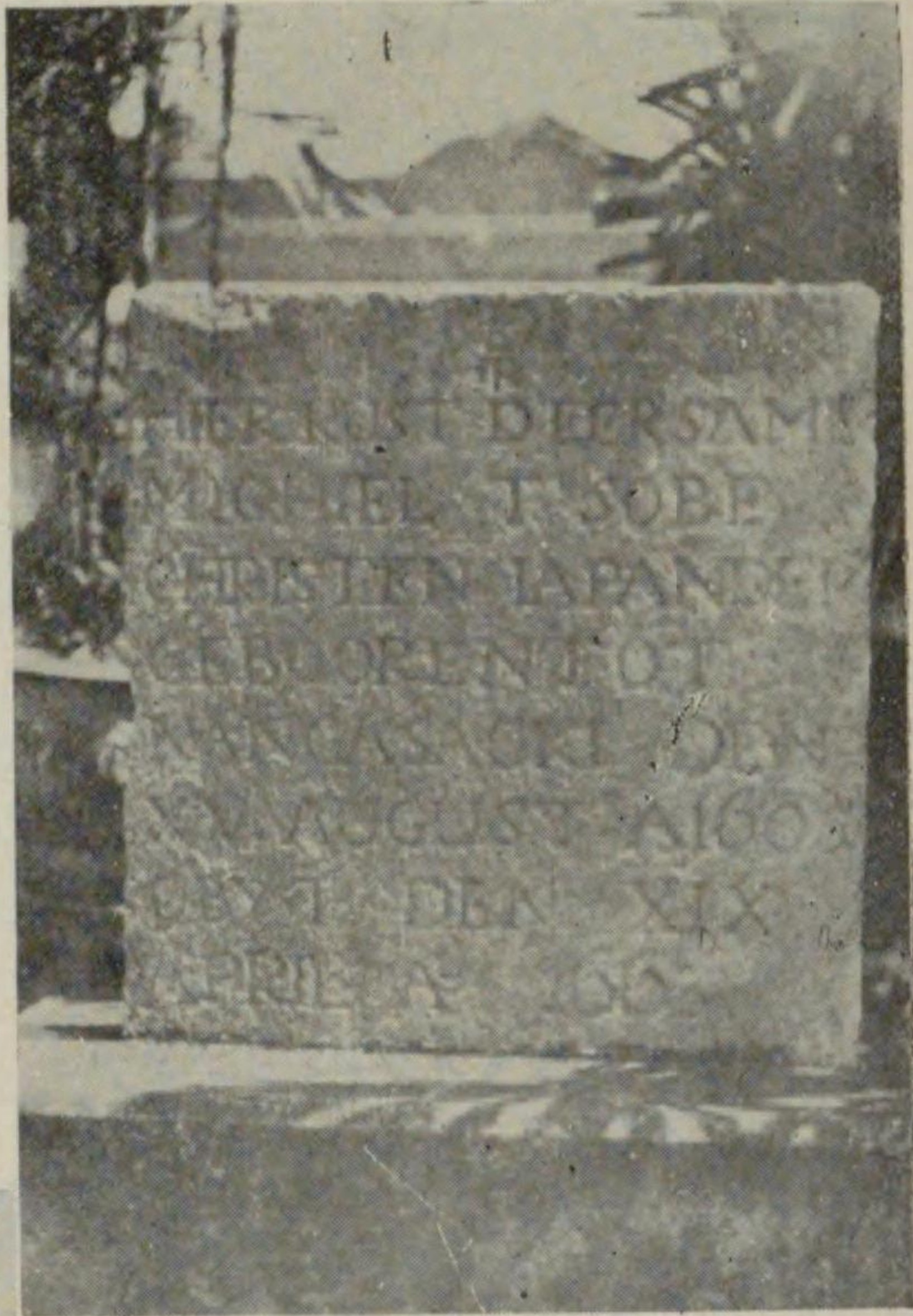
の所謂ジャカトラ文の首めの一節である。はるとはエゲレス女房年三十七歳、娘まん年十九歳、同はる年十五歳、孫萬吉年三歳と記されてある、そのはるであらう。

文中、故郷にて見たると同じものとは、月日の光ばかりだから、夜は月の出る方を眺め、晝は日の出る方を眺めるとか。神佛の御あはれみで日本へ歸ることもあらば、三日で命がなくなつてもくるしくないとか、切々の情は人の腸を断たしめる。そして故郷の友の文の簡なるをうらみ花壇の菊の愛護をたのみ、松かさ、この手かしのたね、杉のたね、はうき草のたねを送つてもらひたいと頼んである。

文章は古雅流麗、異國流瀟の乙女の心情を披瀝してあるが、後段と前半と文勢語脈の劃然と異つて居る處から、少女の心境に同情した文學の士の潤飾添加が多いと見られて居るが、兎に角一般ジャカトラに居る人々の心情をあらはしたもので、哀れは後々まで語りつたへられた。

和蘭商館の商人頭であつたピーテル・クノルの妻に、コルネリヤ(日本名久)と云ふがある。父は十年間平戸に和蘭商館長をして居たコルネリス・ファン・ナイエンローデであつて、母スリシヤは後平戸の貿易商判田五右衛門に嫁して居る。ピーテル・クノルは二六六三年(寛文三年)に首席

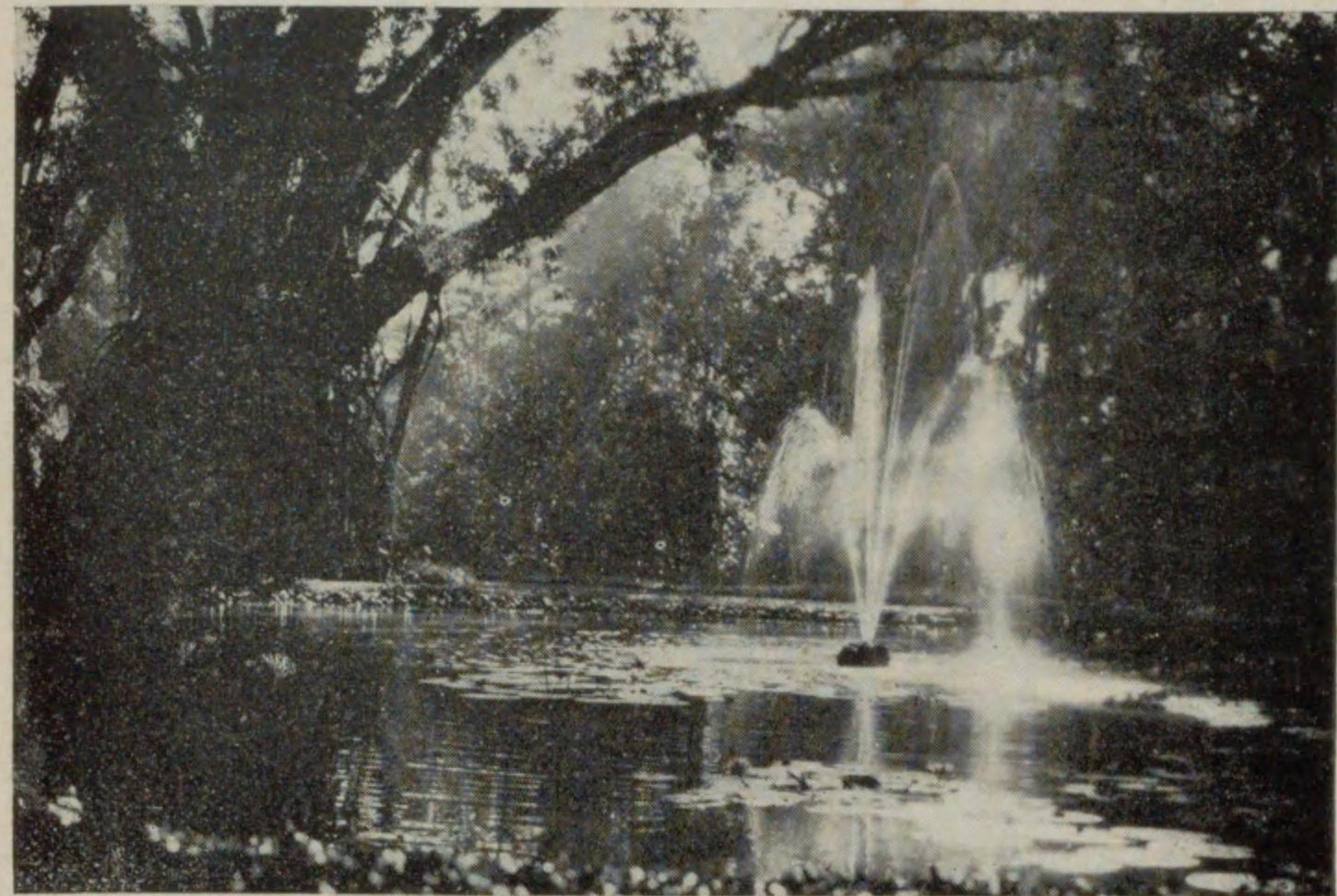
は碑の衛兵惣 碑の衛兵惣
庭の館事領總ヤビタバが我
と碑愛留に表の碑石リあに
が句文の左に面裏れか書と
「こ」。るあてれら彫で文蘭
徒教督基本日きべす敬尊に
眠永一ベ一ソ・テ・ルエチミ
長慶)年五〇六一元紀。す
一元紀、れ生に崎長(年十
十月四(年三文寛)年三六六
「去逝日九



港舊のヤビタバ
低望顧とるす想追を蹟事の子男快や人佳たし霈を袖に
。く湧が緒情いなき盡と々綿徊

また、日本の植民者には女子を伴はなかつたとよく批難されるが、濱田助右衛門などや六兵衛などは追放された人でなくて、前から来て居た人であるが濱田助右衛門とその妻の消息は度々出て居るし、六兵衛の後家ふくと云ふものが、前の主家五郎作三藏宛に數々音物を送つて居る。矢張りこのジャカトラに來た女の人は、夫と共に万里の波濤を凌いで憂苦歡樂を共にして居たので

に昇進し、四人の子供は成人し幸福な生活であつた。人々はこのクノルの一家を中心として、寂しいうちにも商賣や家事の方におはれて手紙を送ることも稀になつた。
こゝ許より音づれ申あげず候ゆへ、御心もとなくおぼしめされ候だんもつともに候……。
これらの文について幽かしく感ぜらるゝは、今平戸や長崎に残つて居る手紙が、厚手の西洋紙や小袷紗の裏にはぎ合せた小切などに認めてあるのでも、何れも達筆で、整つた文章であることである。平戸も一時西の京と謂はれた位で、諸國の商人が入り込み、長崎も繁榮他に比類なき文化の關門であつたので、文學ある人も盛んに入り込み、一般の人も他に先んじて教養ある境遇に置かれたことが窺はれる。



いしら珍のく多はに内園物植のゲルゾンティバ 園物植の一界世
巨等木燭巖 樹詰陽 ンヤンバ 巢の蟻 樹の人旅 るあが木草
。くづつが道木並の明薄たしと蒼鬱木



るゐてふ掩を水が蓮鬼なき大なうやたけ浮を盤銅青 邸官府督總
督總のムードの亞白るすと景前を森の園物植 にふ向か遙の池大
。るゐてえ聳と々堂が邸官

あつた。

又寛永中に丹波の國の關某と云ふものが爪哇に行つた。時に呂宋の西班牙人が和蘭を犯し、和蘭は二邑を奪はれた。そこで某は和蘭の爲めに兵を率ゐ敵を破り、進んで呂宋迄攻略して戦功を建てたので、高官に任ぜられ、總督もその女を嫁し大いに優遇した(窓のすさみ)と云ふ傳説などは、放浪の一武弁の單身で出来る仕事でない。少くもこの地に日本甲螺が集團をなして居、某はその勢力を利用したものであらう。

今、領事館の庭にある惣兵衛の留愛碑の如き、惣兵衛とはこの種の人ではなかつたらうか。

鎖國後三十餘年後の延寶年間に於ける海外在留日本人數調——支那船に託し調査したるもの——によれば、ヂヤカトラには左の八名だけであつた。

尤もこちらで出来た子供はのせてない。

村上武右衛門

濱田助右衛門後家

はる(長崎夜話艸に曰、子などありて日本に度々文おこせたり、元祿九年の頃迄ながらへ、七十五六歳にて死せしよし)

こるねりや(商館首席の妻) きく みや

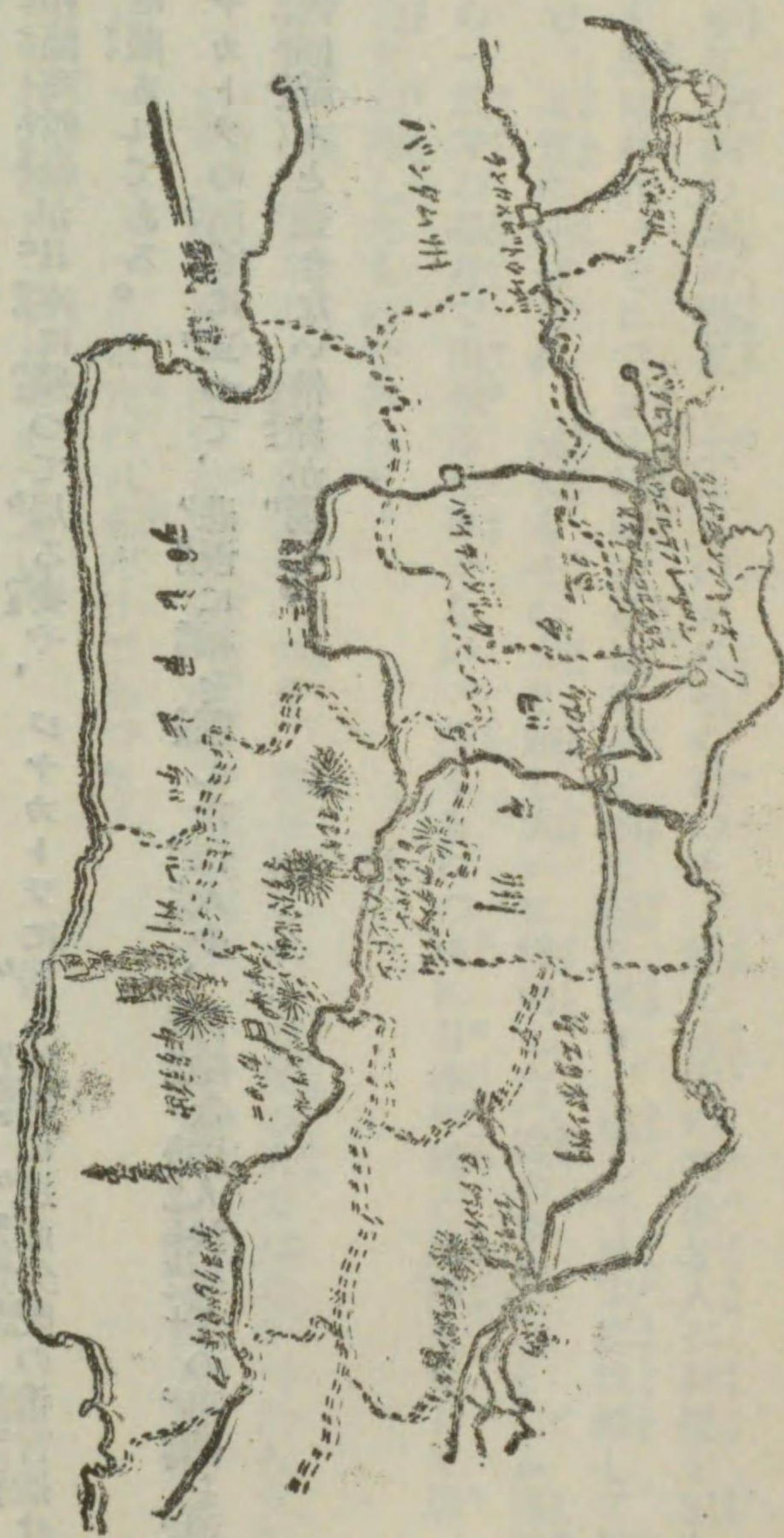
ふく(六兵衛の妻、平戸谷村三藏譜代の女中)

ゑすてる(こるねりやの異母姉、即ちコルネリス、ファン、ナイエンローデの娘)

平戸の和蘭商館長が日本に残つて居る妻や、ヂヤカトラに居る娘等に遺産分配の遺言状はへー

グ文書館に藏されてある。

古きヂヤカトラの濱邊に立つて、悲涙に袖を濡した佳人や、冒險な商人快男子の事績を追想すれば願望低回綿々と盡きない情緒が湧く。



(マムバサ行)

蘭人の生活

或人は言つた「英人ならば汽車にのつても切符は帽子に挟んだまゝ、帽子を席の傍に懸けて置くが、蘭人だと大事に財布にしまふ」と兎に角蘭人はしまり屋である。其生活は質素である。彼等は一等ホテルの食堂へも詰襟で出る——近頃は背廣も着る様になつたが——事務服も詰襟である。ホテルに宿つてもチップなど奮発しない。南洋はそれでよいが、日本へ來てもその筆法だから一向持てぬさうだが、蘭人は中々ぼんやりして居るやうで商賣には抜け目がないらしい。ウエルテフエレーデンの朝は實に氣持ちが良い。庭の樹木も、芝生も草花も朝露に露つて、清涼な空氣は頭の蕊までも清々させる。蘭人は朝早くから活動を開始する。午前中にあらかた仕事を片づけて、午後一時に晝餐をとる。日光はこの頃から強く照りつける。

蘭人が頸帯に來て活動をつとけるべく、保健上發明したことは、イヤ土人から教はつたかも知れんが——午睡と水浴であつた。それで午餐後は鐙戸を下して華胥の國に遊ぶ。四時迄に眼をさ

まして水浴をし、コーヒーを飲み夕刻迄仕事をする。夕刻は五時から六時半までである。さうかと思へば三時まで仕事をして居る銀行もある、正確に言へば一定して居ない。

夕食は八時から十時頃まで、活動寫真なども夕食前のもので、夕食後のものとある。

各人の住宅にはベランダに、大型の蜜柑を二つに切つて下げたやうな橙紅色の電氣覆がある。日が没したと思へば直ぐ暗くなり、夜が明ければ直ぐ太陽が上る、東明や黄昏の氣分を味はへないこの地では、橙黄色の電燈は言ひ知れぬ妙味がある。彼等はこの電燈の下で、芝生を眺め、晩涼の風を楽しみつゝ、家族團欒して食事をとる。

夜は遊ぶものとなつて居る。活動かダンスか、夜十二時頃迄打ち興じて一日の幕となる。

ホテル

日本の旅行者の御馴染のホテルに、デ・ヂャンデスと云ふのがある。公務でも帯びて來られる人はよくこゝにとまる。普通の視察者とか、商業の用向きなどの人は、日本旅館の箱根ホテルか松葉ホテルにとまる。

ホテル・デ・ヂャンデスはリウオン運河に面した宏壯な建物である。門を這入ると爪哇島一のワリーングンの老樹が倨然として一樹森の如くなつて居る。これがホテルの看板である。部屋は二百もあらう。客室や食堂やダンスホールやで凹字形をなして中庭をとりまいて居る。客室のゆつくりして居ることは、メダンのデ・ボアの方が勝つて居るやうな氣がした。

日本人客の御馴染のホテルだが、一時日本人客を御断りしたと云ふ。それは、どこかの實業視察團の人が餘り無作法で同宿の人の感情を害し、迷惑したからだと云ふのである。それも特にわる悪戯をしたと云ふのでなく、風俗習慣になれないのと、戦時好況時代に鼻いきがゑら過ぎたと云ふ爲めである。歐米に行けば一から十まで細心の注意を拂ひ、小心翼翼々所謂紳士的體面を保つために苦心するやうであるが、南洋は一般の環境が既に徒跣にサロンの土人の生活であるので、「なに高が南洋じゃないか。」と見縊つてかゝる點もある。

一體こゝのホテル——こゝばかりでもないが——は各客室は廊下つゞきになつて居り、廊下とヴェランダとは低い腰板で一才仕切つた位である。一時の午餐にビール的一本も傾けて、日本流

の浴衣にきかへ安樂椅子にでも横になつて居ると、二時からは一層暑熱が加はる。ウト／＼と午睡の夢に入る。こゝで問題は起きる。浴衣は涼しくて良いが行儀が悪い。太股が出る。いやそれ以上にも出る。廊下は往復の通路だから、レデーは顔を背け、ゼントルマンは本氣に怒り出す。又、ある役所の旅行者がゴルフ服のまゝ食堂に這入つて問題を起した、と云ふ話もきいた。一時船では、日本客の食卓を端の方の離れたところに設けたとか。これは戦時成金の諸君が大杯を傾けて、メートルを擧げて何とも喧しくて仕方がなかつたからだと云ふ。

スラバヤの奥の方の都會に、日本客に慣れて居るホテルがある。こゝへは關西の商人達が大勢来る。夜おそくに「××はん一寸來なはれや、話があるさかに……」と二階から怒鳴る。泊り客は何事かと叱驚するが、いつも慣れて尸るので問題にはならぬさうだ。が、かう云ふことは日本人だからと問題にされなくても餘り名譽でもない。

こんなことで在留同胞に深い皺をよせさせるのも考へものだ。

このホテルにはライス・ターヘルと云ふ爪哇特有の食事がある。これは分量の豊富なのと給仕

人の多いのに驚いてしまう。食卓をとりまいて一人の給仕が一品づゝ捧げて居る。始めに飯をとり、次の皿に給仕の持つて來る品を順々にとつて一方の皿の上に積み上げ、それを各人の胃の腑と趣味により、思ひ思ひに配合してたべるのである。何せ、十二三人が並んで次から次と持つて來るので、正直に一品づゝとつて居ると、皿の上は山のやうになつてしまふ。

もしこれが綾羅を纏ふた曲眉豊頬細腰玉姿の宮女かなんかで楚々たる風情で玉盤を捧げるのであつたなら、まさに一時的でも支那の昔の王様にでもなつた豪奢の氣分があるが、白の上衣とズボン、腰の處に一寸爪哇更紗をのぞかせ——これが馬鹿に意氣だと云ふ——頭に爪哇更紗をまきつけ、足は徒跣の鞞の給仕では、そんな大それた興趣も湧かない。

ある夜、領事館や南洋協會の人達とこのホテルで晚餐を共にしたことがあつた。この人達は皆若い夫人と同伴であつた。婦人方は皆一やうに日本服で來た。食後ダンスホールの側の休憩室でコーヒーを飲んで話して居たところ、ダンスをやつて居るビール樽のやうに太つた男も梅ヶ谷のやうに肥て居る婦人も、ダンスは上の空でその眼は絶えずこちらに向いて居た。裾の長い袂のあ

るキモノ、後の方で高く結んだ美しき帯、キチンと重ねた襟は如何に彼等の興味をそゝつたか。吾々は、キモノは活動的ではないが、落つた奥ゆかしい、如何にも日本趣味にあつた優美なものであると思つた。梅ヶ谷連中もダンスをやめて、休憩室の方に來てしみじみと見とれて居た。一人の蘭婦人などはキモノの連中が自働車の中に没する迄、眼を放さずに居た。兎に角、デ・デヤンデスの一異彩であつた。



日本ホテルに、箱根ホテルがあり松葉ホテルがある。外に蘭人の下宿だけやる家もあるとか。箱根は日本の旅客が中々多い。實業家も學者も多く宿まる。日本の旅館は旅行者のクラブであり、案内所である。箱根の主人は曰ふ、「近頃日本からの旅行者も多いから、株式の日本ホテルを作り度いと思ふ。室内には娯樂機關も備へ、用務を辨する爲め、立派な通譯者や案内者も置くやうにし、ホテルにさへ來れば一切合切用事が辨じ、家庭的にゆつくり出来る設備にしたい。今のところ成るべく御便利にと考へて居るが、部屋は少なく人手は足らず、思ふ許りで仕方がありません。バタビヤに完全な日本ホテル位は是非必要です。」と、この點吾等も同感。

バタビヤの日本人

バタビヤにある日本商店と商社の重なるものは、

横濱正金銀行支店、臺灣銀行支店、三井物産會社出張所、南洋倉庫會社支店(倉庫業)、南洋商會支店(雜貨)、日本綿花出張所(綿絲、綿布輸入)、有馬洋行支店(綿絲、綿布輸入)、達磨商會(美術雜貨)、三笠商會(雜貨)、赤木商店(綿絲、綿布、雜貨)、布施商店(雜貨)、大和洋行(雜貨及一般仲買)、スター商會(電氣器具、雜貨)

日本人小學校も出來、専任の教師も置くやうになつた。學校は日本人俱樂部の一室で、児童數は今のところ一學級定數ほどない。スラバヤに比べてバタビヤの日本人の勢力は遙に少ない。南洋協會バタビヤ支部には、前主任小谷君が副領事に轉じて以來、佐和山君が調査に研究に、交渉に報告に、通譯に翻譯に、大に奮闘して居る。吾々も度々君を煩した。

新聞としては爪哇日報があり、新聞の外に蘭印叢書を出して、必要なる資料を供給して居る。

蘭領政治の組織

和蘭女皇の代理として、蘭領東印度の統治の大權を握つて居るものは、言ふまでもなく總督である。

總督府官房

これに書記官長と政府書記官がある。書記官長は總督の顧問で、施政上重要な位置を占めて居る。

印度評議會

總督に對する最高の諮問機關で、構成分子は、總督の議長同時に議員、副議長一名、議長四名。資格は蘭人にして滿三十歳以上なることを要する。

國民參議會

人民代表機關で、最近の改正された法令によれば六十一名である。

議長同時に議員(女皇任命) 一名

在來和蘭臣民(土人)

二十五名(内二十名選舉、五名任命)

和蘭臣民(歐人)

最少三十名(内十五名選舉、殘餘任命)

外來和蘭臣民

最大五名、最少三名(内三名選舉)

會期は年二回通常會を開く、改正法は二個の代議院を制定した、一は通常の議會で、他は同議會から選舉した議員より成る議會代議會である。

會計検査院

各行政機關

A、九部より成り立つて居る。

司法、財務、内務、宗教、教育、農工商務土木、官業、陸軍、海軍。

陸軍、官業の二部はバンドンに、農工商務部はバイテンゾルグに、他はバタ

ビヤ市にある。

B、地方行政機關

上級官廳に知事を長官とする州と理事官を長官とするものがある。

下級官廳には、爪哇に於ては州を分けてその長官に理事官を置くものと、副理

理事官を置くものがある。外領では内務監督官を置く。

この外に土人官吏がある。土人官吏は土人で官吏となつて居ると云ふだけでなく、土人のみ

に對する直接行政と警察事務を掌つて居る。

世界一の熱帯植物園

バイテンゾルグは海拔八百呎の高地閑靜の都會で、バタビヤ・ウエルテフレデーデンの南五十キロの處、汽車では一時間ばかりで到達する。

十八世紀の中頃までは、ボゴルと云ふ名もなき部落であつたが、時の總督ファン・インホーヒが濕潤瘴癘の不健康地であるバタビヤを嫌つて、この高燥清涼の地に官邸を造り、常住起居の地と定めた。これはバタビヤの新住宅地ウエルテフレデーデンの出來た六十四年前のことであつた。その後、新住宅地が出來ても、總督は引き續きこゝに居ることになつて居る。一時英領となつたとき、總督ラツフルス卿もこゝに本據を置いた。

バイテンゾルグの植物園は世界第一だと云ふことである。植物の種類が九千餘種、面積が九十エーカー、百七十人の園丁が絶えずその手入れに従事して居ると云ふ。

正門を這入ると、カナリーの巨樹が廣い一直線の道路を挟んで、晝も暗く日光を遮つて居る。

大木の隧道である。少しゆけば大きな池があり、青銅盤を浮けたやうな大きな鬼蓮が水を掩ふて居る。先方遙に、植物園の森を背景とする白堊の圓屋根の總督官邸が堂々と聳えて居る。

門に近く下に降りた處には、また小さな池がある。これを降りればそこに溪流があり、橋を渡れば熱帯有用植物の養植場がある。

兎に角、九千餘種の植物に附いてゐる名が一寸見てわかるやうな生やさしいものではない。只勝話に似たソーセイデツリーとか、蠟燭のやうな果實のキヤンドルツリーなどは直ぐ合點がいつたが、日本から持つて來たと云ふ杉や檜などにさへ八釜しい名がついて居るのである。

シンガポールで御目にかゝつた塚氏は、三年こゝに居て熱帯植物の研究をされたが、三年で幾分判つたやうな氣がすると云ふ位であるから、素人が巨樹珍木を観た處で、「コイツ風變りだなア」

「成程、竹にも色々あるものだなア」位な處に止めて置くのが嘘のない處だらう。

正面に近く大道の傍に、希臘風の堂宇がある。英國占領當時の總督ラツフルス卿が愛妻をこの地に喪ひ、哀涙綿々自ら碑文を記し、堂宇に祀つたものである。

“Oh thou whom ne'er my constant heart

One moment hath forgot,

Tho' fate severe hath bid us part

Yet still forget me not"

熱血男兒の愛妻を慕ふ眞情流露、血涙の凝結である。

卿の愛妻は、卿が爪哇に來てから娶つた十幾年上の人であつた。卿が爪哇に於ての統治期間は長くはなかつたが、その事業功績は非常なものであつた。而して、此間に於て常にこれを輔けこれを勵まし、奮闘に奮闘を重ねしめた賢妻の力は與つて大なるものであつた。植物園の開設に先立つこと三年、一八一四年十一月二十六日、愛妻をこの地に失つたのであつた。爪哇が和蘭領に返つた時も、この碑は他に移動せしめないことが條件となつて居た。

バイテンゾルグの日本人

こゝには植物園の前通に南洋商會がある。又土人を下職人に使つて理髪をやつて居る立派な店が一軒ある。又こゝに佐藤自動車部の出張所がある。が、支那人のポイコツトがこゝは一番烈し

かつたので閉店同様にして居た。こゝに岩井君と云ふ人が居た。岩井君は前に雜貨店をやつて居たが、植物園の方も詳しいので、日本の旅行者は三井か三菱、正金などの紹介によつて、必ず岩井君を煩はした。岩井君は午前一人案内して歸つて來れば午後一人待つて居ると云ふ譯で、單身であつたので外に出る時は家を閉して出た。こんな譯で商賣も充分出來ず閉店してしまつた。今は岩井君を煩すことも出來なくなつた。かう云ふ特別な處は、精通して居る人に説明してもらはないと全く無意味のものであるから、何とか方法を講じてもらひ度いと思つた。三井や三菱が岩井君の後援會をつくと云ふ様な話も聞いたが、岩井君はその後田舎に引つ込んだやうである。

蘭領となるまで

秘密の香料島

古來東洋の香料が、歐洲人の間に非常に珍重せられた事と、これについての幾多の競争紛糾を惹起したことは、略、前のラダの處で説いたのであるが、兎に角これまでアラビヤ人の富を作つたのもヴェニス商人の財力を得たのも、この香料の貿易であつた。これ等商人の獨占の手より

免れて、海路直に歐洲に輸入したいと云ふのが歐洲人の永き熱望であつたが、これは海事に練達せる葡人の手によつて、アフリカの東端を廻り、直に印度洋に來ることによつて成功した。それから冒險的商船隊や海賊組は踵を接して馬來に乗り込んで來た。葡人は更に香料の寶島を探るべく探險隊を派し、遂に秘密の寶島を發見した。場所は比律賓の南、セレベスとニューギニアの間モロツカス群島中の島であつた。葡萄牙は利權擁護の爲めにタルナテ島に要塞を築き、アンボイナを根據地として活動した。これは十六世紀の始めの頃であつた。

それから八十年の間、和蘭は東洋の物産を葡國人の手によつて得て居たのであつたが、しかし利益を觀るに敏なる和蘭人がさう何時までもこれを黙視して居る筈はなかつた。

時一五八八年、八隻の船舶より成れる遠征隊がアムステルダム會社によりて東亞に向つて派遣せられた。それを始めとして前後十五回に亘り、船舶も六十五を數へるに至つた。が、これらは激烈なる競争心かられて、互に他を害し大なる犠牲を拂つたので、その情弊を濟ふべくこれ等を合同し設立されたのが和蘭東印度會社であつた。一六〇二年の事であつた。

會社が設立されてからは貿易は非常に順調に進展した。十五割から七十五割平均四十五割の配

當を百五十年つゞけたのであつた。

會社が創立されてから間もなく、英人が競争上の強敵として現はれた。土民の蘭人に對する反感や妨害は英人の煽動によるものとわかつたので、こゝに軍事行政の材幹あるものを事業の中心に當らしめて旗鼓堂々商敵と争はんとの計畫を樹てた。この計畫の現はれとして、これまで商務總監であつたヤン・ピーターソン・クーンが總督に任命せられた。先づ第一着の事業としては、土人英人同盟の根據地たるデヤカトラの破壊であつた。蠻勇、剛氣のクーンはデヤカトラ城砦を破壊し、新政廳をバンタムよりこゝに移しバタバヤと命名した。クーンは東印度に於ける和蘭帝國の創立者であるが、バンタ諸島に自ら遠征をして、土民を剿滅し、財物を掠め、その田園を奴隸に栽培せしめたり、或は歐洲に於ける香料相場の下落を恐れて、他の香料を産する地方を悉く叩きつぶしてしまつたりなどして、永く汚點を貽したのであつた。

クーンの次ぎの總督はデ・カーペンテイルであつた。英國との葛藤は益々烈しくなる。この時代に日本人の關係して居る事件が起きた。一六二三年（元和九年）二月二十二日、日本人がのつそり、和蘭の要砦アンボイナに這入り込んで、守備の情況、兵の強弱などを探つた。守將ヘンリー

・ファン・ヌポイルは、こりや變な男だ、英人の密偵に相違ないと思つた。そこで、日本人十一名が捕へられた。又、在留英人も悉く捕へられた。その結果は英人の中七名だけ助かつて、他は皆死刑に處せられた。

この事件は英國政府から抗議があり、色々要求も持ち出されたが、和蘭では全然とりあはぬので、英人は和蘭の植民地を引き上げるの外なかつた。

爾後一世紀間、會社は或は和蘭の貿易を盛にし、又、漸次兵戰によりて攻略し、その勢力の擴張を圖つた。一つの商會社ではなくなつて統治權者の位置に立つて、土民を壓迫し自家の利益を圖ることに餘念がなかつた。

慘たり土民の境遇

會社は利益擁護の點から配當の少い種類の栽培は、これを要求しなかつた。が、利益のある作物はこれを獨專とした。のみならず土民の商買の自由を妨げ、海運も思ふまゝに出来なくした。土王は奢侈贅澤であるが内帑は常に窮乏を告げて居たので、これに土地の利權を擔保として金を貸すは支那人であつた。彼等小なる土王は只領主の空名を持つて居るに過ぎなかつた。貪婪な

支那人は思ふまゝに誅求苛斂を行つて私腹を肥やした。猶その上、土民に金を貸して高利をとり立て、返済出来ないものは、これを奴隸として酷使し、二重三重の利を得て居た。

稅政百出、土民は慘憺たる境地に置かれ、搾取さるべきものは産物も商買の利も勞力も、悉く搾取されてしまつた。根本に培はずして只誅求を事とした會社は、今は何物をも枯渴したるものから得る途はなく、一世紀半に亘つて莫大の利益を得た會社も、財源空乏破産の状態になつた。

一七九五年バタビヤ共和國が建設され、一八〇六年和蘭王國となり總督としてデンデルス將軍が任命された。將軍は島内の財源枯渴、土民の離叛、英軍の行へる封鎖が貿易を沈滯の極に陥らしめ居るを觀、内政の改革に着手せんとして居たが、本國に召還せられた。

この時にミント伯の大活動となり、若き總督ラツプルスの快手腕を揮ふことになつたのは前に新嘉坡で述べた通りであつた。

ラツプルスは來着と共に、爪哇は始めて政治らしき政治の舞臺には入つた。ラツプルスは任期は僅々五ヶ年に過ぎなかつたが、快刀亂麻を斷つ勢ひを以て痛快に處斷決行された。

土民重加の負擔を軽くせんが爲めに、封建的服役と強制勞役の大部分を撤廢した。王に格式を

つける爲めに地所を附與し、收入の道も講じてやつた。

奴隸制度にも制限を附し、家族的勤務に限り歐人のこれを使用するを許し、又所有者に課税をした。阿片輸入にも重税を課する案を立てた。

又、従来鹽田を支那人に貸し下げ、支那人は無限の権力を行使し土人を酷使し、附近の米田に課税して居つたのを政府の手に收めて、土民をその壓迫から免かれしめた。

ボロブドールの大佛蹟を探し出したのもラツフルスの偉業の一である。

ラツフルスの爪哇に於ける任期は長くはなかつたが、後爪哇が蘭領に還つてからも永久的の施政方針となつたのである。

爪哇はナポレオン失脚の後和蘭にかへつたが更に一八二四年の英蘭條約によつて、和蘭は印度大陸に於ける造營物は英國に悉く譲り渡し、英國のスマトラに於ける英國所有物は、之を和蘭に譲り渡し、マラツカの都市と要塞地は英國の所有とし、英國は和蘭のピリトン島とその屬地占有に對する抗議を撤回し、和蘭は新嘉坡については嘴を容れんと言ふことできまりがついた。

清涼の寶土フアンゲル州

爪哇に於ての清涼の寶土、しかも、天險を控えた大沃野は、フアンゲル州でなければ求められぬ。本州は東西の長さ百六十哩に亘り、南北最も廣い所八十哩、總面積七千七百九十一方哩、爪哇全土の六分の一を占めて居る。

全州、高山雄峰聳え立ち、その間に大平野を包有して居る。水は清らかに、飛瀑もあれば温泉もある。湖水もあれば火山もある。風光明媚で而も氣候は清涼。苦熱と闘ふ熱帯地の人々に對しては、地上の天國生氣を復活せしめる極樂境である。この沃野の中心にある風光の都山城の國の平安の都がバンドンである、大谷師が別莊の地事業地と定めた所はバンドンの奥、バンドンから五十四キロを距てたガロの山里である。

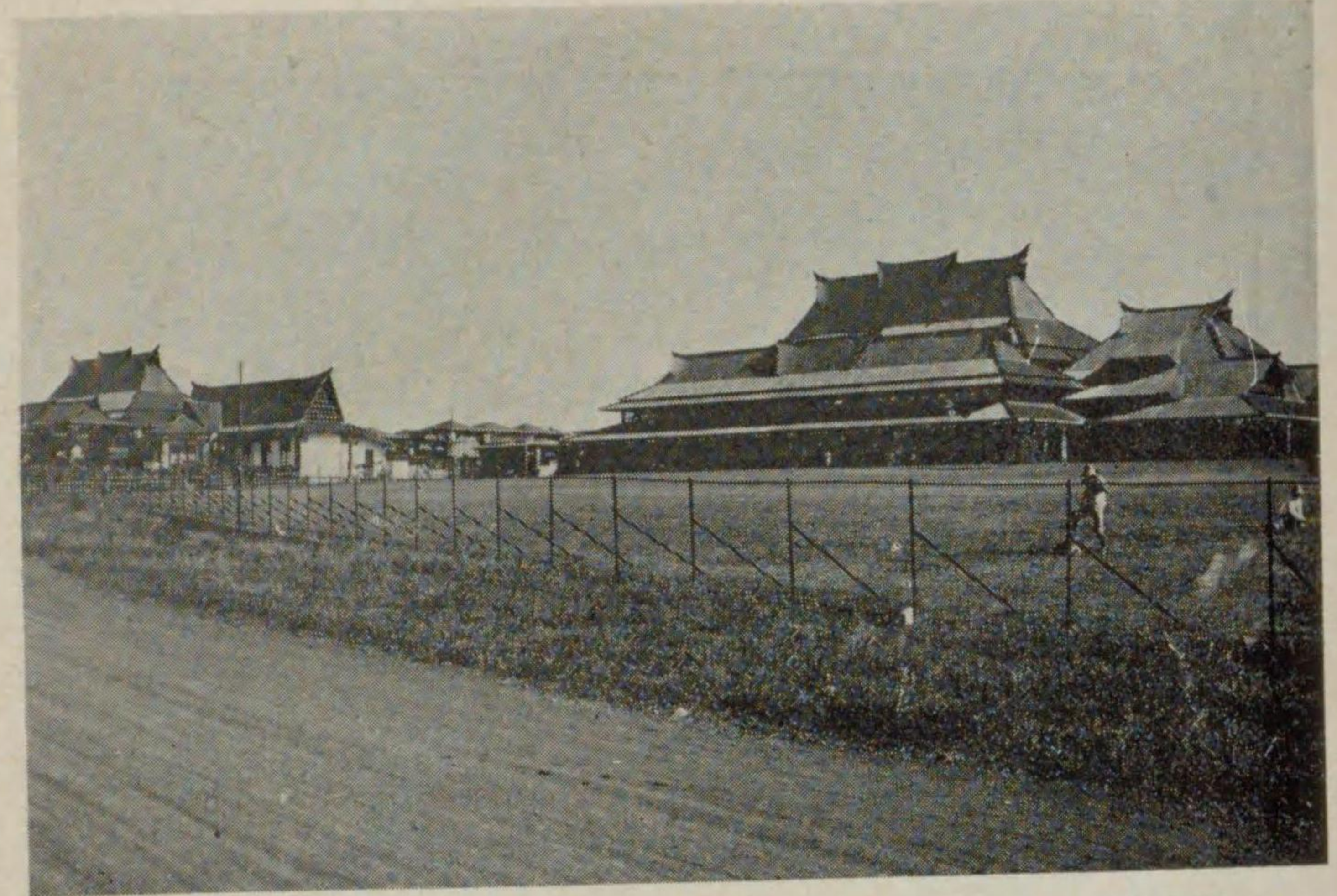
バンドン行

午前六時四十五分、バンドンを訪問すべく、ウエルテフレードン發の急行列車に乗る。メス

テル・コルネリスの住宅地を出抜けると、椰子、芭蕉、竹林等に囲まれた土人部落や稻田となる。チカンペで路は二ツに岐れる。南に向つて走るのがバンドン行である。暫らくすると山路に入る。前方に高き山を望みつゝ、谷間の路を蛇の如く登つてゆく。谷間を見れば、狭き處に上から下まで一枚並に、「田毎の月」の姨捨山のやうに水田がある。山の上を望めば、峻峻なる急勾配の頂點までも耕されて、タピオカや玉黍蜀が栽培されてある。峻峻なる處に土人は鐵道線路の工事に炎熱と戦つて居る。

生活にあへぐ爪哇人

爪哇人は必ずしも遊惰の民ではない。鐵道工事に従事するもの、道路の修繕にあたるもの、あるは農夫などの働き振りを見るに、年中熱い國であるから、日本人のやうに突撃的な仕事は出ないが、早朝より農具を肩にし山を登り、田圃に出る。炎天の道路に働くものも、休憩もせず難作業に満身の汗をしばつて居る。かくして營々勞苦の結果、只腰にまくはサロン一枚、口にすは米と魚、タピオカの類のみである。宗教上酒も飲まない。然るにこの簡単な生活を維持する



建に式一ボカンナメはのもきべる觀も最に市ンドンバ 學大科工
營經の人個はめ始めさ立創に年〇二九一うらあて學大科工たれら
。たつたと轄直の府政後がたつあて



刷印らかのもき如の務事の省道鐵省信遞の本日は部業官 部業官
のこがることゐてつ握を源財の府政、るやを等造製片阿賣專鹽
。るあてのな部業官

爲めに血と汗とを以て年中生活と戦つて居るのである。牛馬の如く自覺せざるものは幸ひである。が、若し村長以上の格式の家に生れ、不完全ながらも現代の教育を受け、文化を理解し、和蘭語を操らんか。最早田舎では職がない。バタバヤかバンドンか、スラバヤか兎に角都會に行かねばならぬ。行つた處で精々書記か、給仕か、受付位にしか使つてくれぬ。郡長位に迄なるものは千人に一人あるかなし、況んやそれ以上は望んでも得られるものではない。都會に於て得る報酬三十盾、五十盾は一人の生活も維持するに足らぬ。土人もこの位社會的地位を得ると幾多の希望を抱くのは當然であるが、現代の蘭人の社會においてはそれは容易に達せられぬ問題である。でそこに非常な不平もあり煩悶もあるのである。

教育も何もないものはまだ仕合せである。八ツか九ツになれば、他家に雇はれ、水牛の番をし山羊の世話をし、竹の棒で牛や羊を追ひまわして居れば、自然と成人した。今までの多くはこれでよかつたのであつたが、これからは段々さうは行かなくなつて来る。人口は日に月に増加し、田地は年々少なくなる。如何にして糊口の途を得べきか。如何にして生活の途を求むべきか。爪哇に醞釀しつゝある幾多の社會主義的の運動、革命的思想はこんな處から漸次嵩じて来る。



有名のだなソールタ、ルンバラム、ラーナタはに山ルンバラム、み摘茶の少女ダンス
 るた々漢々茫も左も右もて見を後もて見を前は中山、るた漢々あがと場工と園茶
 のみ摘茶だ海のは茶の園一

柴明之都バンドン

バンドンには十一時三十分に着いた。驛には、佐藤茂君が迎へて呉れた。ガロから今着いたところであると云ふ。驛の前は、自動車、馬車が群がり、肩摩殺撃とでも謂はうか、賑かなものである。市の中央部にあるグランドホテル・ホーマンに宿ることとした。バンドンのホテルにはグランドホテル、ブリアンゲルと、グランドホテル、ホーマンと云ふ二ツのホテルがある。ホテル・ホーマンには廣大な庭、宏莊な風通しの良い室、華麗な浴室などあつて氣持が良い。涼しい土地であるから、浴室なども、温浴を作り得る設備になつて居る。

バンドン沃野は、高山峻嶺を以て圍まれた天險の要地で南北二十キロ、東西五十キロの隋圓形の平野で、六十キロの長流チタルム河が貫流し、この沃野を潤して居る。北方には二千メートルのタンクパンブラウ山、つゞいてブランラン山が哨兵然として聳え、東にマンガラワンギ、グンツール、南にマラバル、西にマンギの諸山、更にこの合間合間に三千メートルの山がうしろから辱顔をのぞかせて居る。

この天險を控えたる沃野の中心に、花園と緑樹に包まれた、白堊赭壁の明るき街、人口二十万の都市バンドンが倨然として日に月に發展しつゝある。

和蘭はバンドンを爪哇に於ける要塞の地と定めた、それで先づ陸軍省を移し歩騎砲工輜重の外に航空隊を置き、兵器工廠を設けた。又無線電信機を有する四十餘個の砲臺も建てた。マラバル山には八百八十メートルの高處に、二千四百キロワットの強力な送達器と、二千メートルのアンテナを有する世界最強力の無線電信局をも設けた。

歐洲大戦の時は、一朝事ある場合を慮り、總督府を始め、樞要諸官衙をこの地に移し、持久戦を張る策戦であつたといふことである。

次には政府の財源を握つて居る官業部を移した。官業部は日本の遞信省、鐵道省の事務の外に鑛山、鹽專賣、印刷局、阿片製造などが含まれて居る。世界最大の國立種痘所も出來た。學校にはメナンカボー式に建てられた工科大學——専門學校程度——がある。この學校からは毎年歐人土人、支那人の土木技師が二三十人位づゝ卒業して居る。今、氣候の良い關係上この若き都市バンドンを諸官衙の中心、高等教育機關の集中地としようと意氣込んで居る。

兎に角、新らしくて廣くて、奇麗な大商店が軒を並べ、明るい落ちついた市街である、郊外は富豪の別荘地で、一大公園の觀がある。

發展の跡

ブレアンゲル州の首府バンドンは、急激に發展した町である。百年前には、僅かスダ農夫のアタツプ屋根の茅屋が五六あるに過ぎなかつた。それから、郵便幹線道路が出来ても、大した急激の發展を見なかつたが。州の首府がチャンジユールから移り、官吏の住宅が出来、飲食店が出来、来るやうになつたのが發展の第一歩である。

しかし、未だ繁華な都市と成り得なかつたのは、道路險惡、交通不便の爲めであつて、バタバからバンドンに行くのに、四頭立てか、又は六頭立ての郵便車に乗つて三日もかゝつた。

それが、俄然として形勢の一變したのは、一八八四年に政府の鐵道が、バイテンズルグからスカプミ、チャンジユールを経て、バンドンに開通したことである。これが爲め、貨物は一日で安全に到着するやうになり、豊沃なる土地の物産は、直にバタバに輸送されるゝことゝなつ

た。原野は耕されて稻田となり、山は開けて茶園、珈琲園、規那園となり、天地開闢以來安住の棲家と定めて居た猛獸も悉く逐はれて隣州バンタムの山奥に逃竄した。

その後鐵道は益々延長し、東南に走つてデヨクジャ、ソローを経てスラバヤに直通し、北に行くものはチカンペで海岸線に接続し、更にチェリボンに通ずる計畫となり、汽車のなきところも自動車を走らせ、嶮山四周の仙境は俄然として四通八達の要衝となつた。一九〇六年には人口四万七千となり、二十年後の今日には二十万となつた。天險の利、地味の豊沃、氣候の中和、交通の利便相俟つて、こゝに急激の發展を示すに至つたのである。

レンバンの丘

レンバンはバンドンの北方十二キロ、海拔千三百メートル、ポツシヤ天文臺のある處である。また、レンバンはバンドンの平野を一時の裡に收められる形勝の地である。峻山高嶽は四周に屏立し、この間にバンドンの市街が燦として夕陽に輝いて居る。街の周圍は稻田遠く開け、樹林の間には土人の部落が點々としてある。

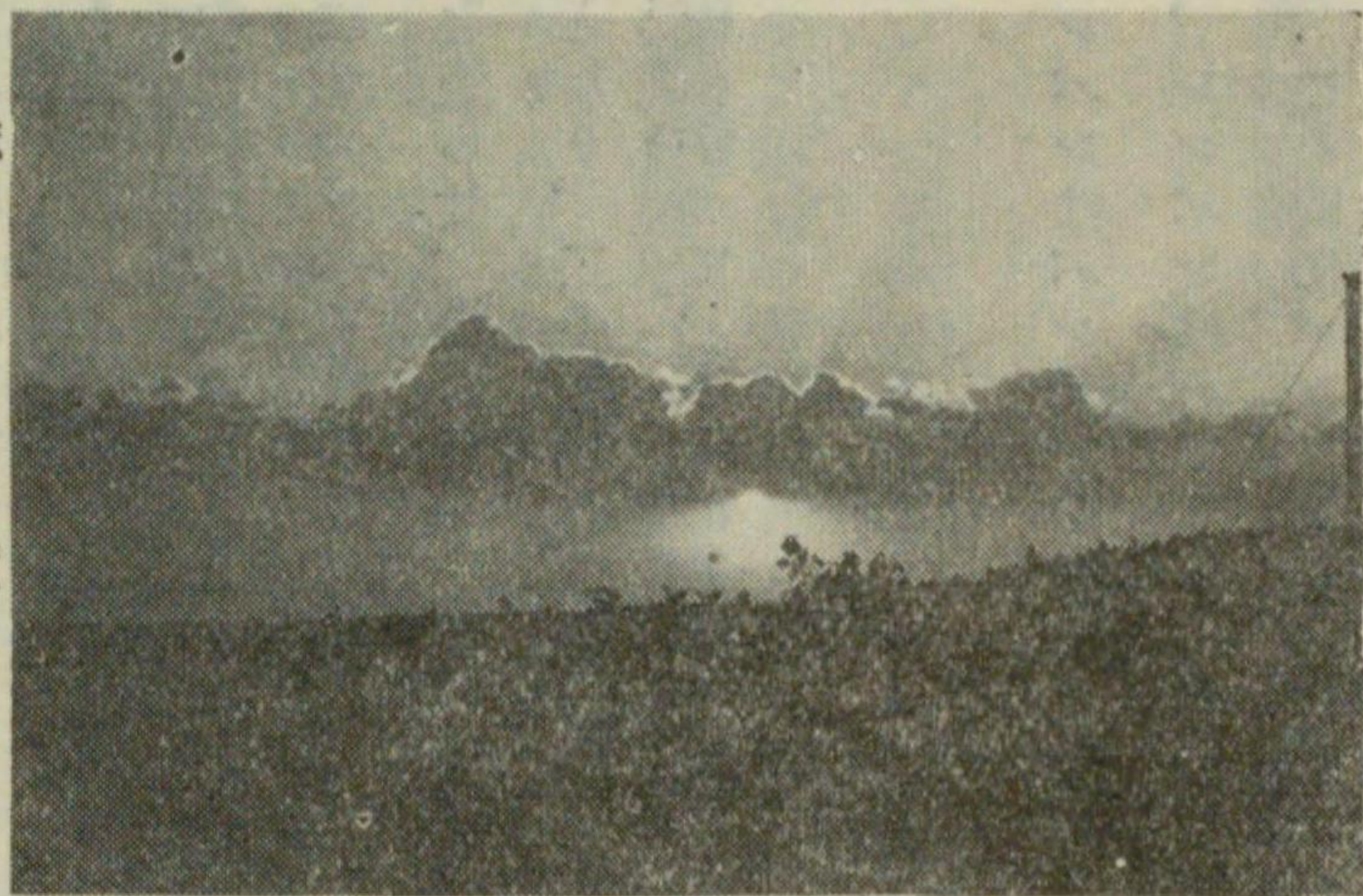
バンドンの平野はよく耕されて居るが、このレンバンの山でさへ、何處から何處までも手がは

入つて居る。急傾斜の地面には竹林が伐り拂はれ堀り起されてタビオカなど作られてある。日本ならば五月雨の頃、霖雨がつけば忽ち土崩瓦壞の運命を免れないやうな處であるが、不思議の位崩れぬ。佐藤君は、

「竹の跡などは非常によく出来るのですが土人は土壌の止めをしない。又畝をつくるにしても斜にして眞土の流れるやうにして居る。和蘭政府も芋や牛肉のことはかり心配して、土人の耕作など一向世話をやかぬので、不経済至極な事をやつてゐる。

馬糞等も、道路掃除の後始末に困つて、一所に集めて乾かして、後で焼いて了ふ、これを畑にでも、田にでも

バンドン高原の落日



入れたら大したことだと思ふが、それを一向やらない。」と話した。

このレンバンの附近一帯の地所権を得て、大身代になつた男がある。

昔、バンドンに伊太利人の音楽家ウキルソナと云ふものがあつた。彼は一年中ヴァイオリンを弾いて居たが、ヴァイオリンよりか金を儲ける方が熱心であつて、彼は土人の娘を娶つて妻とし、妻の名義でコンセッションを得、地所を得た。バンドンが發展するにつれて、その利権を高く賣り付けて大いに儲けたといふ。今でも賣つた残りが、二三百バウあるとか云ふが、この邊で二三百形勝の地を持つて居れば大したものである。政府でもプロカーには戀りて居るので、段々規則を面倒にして、何年間に何分ノ一を利用せよ、もしこれを實行しなければ土地を返還せしむる、と規定したから、利権あさはり土地ばかり租借しても結局費用倒れに終るので、土地プロカーの弊は段々少なくなつたといふ。又事實爪哇には土地もない。

六時となる、夕陽は雲に被はれ僅に餘光を放つて居る。マラバルの山も見えず、バンドンの街も見えず、天地薄衣に包まれたやうである。やがて、靄の裡に燈火二ツ三ツ見え始め、かくして暮靄の裡無数の燈火燦爛たるを見るのみであつた。

夜のバンドン

この夜は土曜日で大分賑はつた。食堂なども、男女大勢幾組かがやつて来た。一杯飲み皿に手をつけたかと思ふと、皆で食堂の真中に押し出して行つて、ダンスを始める。一曲終るとまた席に歸る。席についたかと思ふと、今度は一食卓十人程の組は腕を組み合はせて、身體を左右に揺がし、ワイ／＼男も女も笑ひ興じて居る。和蘭人は酒場でもホテルでも、靜肅なおとなしいものだ、と思つたが中々はいやぐ。

晩涼をおふて市中の散歩をする。驛の方に近く盛り場がある。白人や支那人の酒場や、オリオン活動寫眞館、スンダ美人の踊り場などがある。踊場の踊り子は十七八のスンダの娘で、色が白いと云つても、熱帯下の娘の皮膚は褐色がかつて居る。しかし目鼻立ちは整つて居る。娘は肩に長い布を掛け、これを兩腕にからませてその端を垂らし、腕を斜に張つて踊つて居る。

アーク燈の下に前屈になつた腰の姿態、手首から指先、蛇のやうに動く指は、土人の若き男の心をそゝるに充分である。美人の踊と、天女の樂のやうな歌に恍惚として、男は娘の前に馬鹿氣

た妙な恰好で踊る。男は踊賃を拂つて踊らせて貰つて居るのだ。上手だとか、何んとか言はれ、ば、宇頂天になつて、鬼の首でも取つたやうに喜ぶのは、一流の女優とダンスをする日本のモボの得意のやうなものであらう。數人の若者の打ち鳴らす太鼓や、鉦、胡弓、木琴に和して歌ふ爪哇の歌は、支那人のやうなキイ／＼耳をつんざく叫聲もなく、又朝鮮式の哀音もなく、西洋流の遠吠式の音もない。一種の、のどやかさのある歌は、羈人の耳に快よく感ずる。その銀鈴のやうな聲は慥に美音だ。

旅行者の一番情趣饒かなりとされて居るバンドンのこの時分、暗に咲く花スンダ美人の活動發展は非常なものである。一體、爪哇に於て最も衛生上苦心とするところは、今はマラリヤよりもペストよりも、猶一層猖獗を極むる花柳病の蔓延である。バンドンの盲療院も、つまりは放縱の悲惨なる收獲である。

規那園と茶園

マラバル山はバンドンから約十五キロを距てた南方に聳ゆる山で、標高二千三百三十メートル

ルあるが、千五百メートル位迄は規那園茶園を以て充たされて居る。規那は千メートル以上の寒冷な處をよしとする。

蘭領東印度は現在、世界規那産額の九割内外を産して居る。随つて世界を獨占する位置にある。蘭領東印度と云つても、主産地は爪哇で、爪哇のうちでもこのブレアンゲル州が主である。百十箇所の規那園、一万五千バウの植付面積である。他に有名なチンチローアの官營規那園が一個處ある。これは面積一千二百バウで、産額は規那皮として年額約一万噸。

規那の原産地は南米ペルーで、宣教師が持つて來たとか色々の説はあるが、十七世紀の中頃、西班牙總督夫人が熱病に罹つたとき、この木の皮によつて癒つた。これが熱帶風土病や一般熱病に特效のあることが、始めて歐洲人に識られた始めであつたと。その後二百年近くも經つて、規那の皮からキニーネを探ることは發明された。

爪哇では、それから度々ペルーから苗木や種子を盗み出させて、色々やつて見たが、思ふやうに行かなかつた。ところが、一八六五年に或る英國商人の手から四百盾で買つた種子が非常に成績が良かった。これが抑々爪哇で規那を栽培する第一歩だつたのである。

英國商人の従僕は、國禁を犯して貴重なる種子を外國人に賣り渡したる罪で刑に處せられたが、この商人には和蘭政府は年金千二百盾を給して待遇したと云ふ。今では却つて本家本元のペルーが濫伐の爲め、品切れになりさうな状況になつて居る。英國でも、印度セイロンなどに移植し、熱心に研究してみるが、どうも成績は思はしくないらしい。

樹は數十種あるが、マラバル山の沿道にあるのは、楕圓形の葉を有つて居て、四メートルから六七メートルに聳立して居るものである。

規那の適地は、土地が海拔千二百メートルから千八百メートルの高處で、生育限界は南緯十九度から北緯十度の間、土地が濕つて居て、多少冷氣を感じる位の處、攝氏の十五六度位が良いといふから、この邊が最も理想的である。

園の中では土人が木皮を乾して居る。樹の五六年經つたところで、これを伐り倒し、木槌で叩けば皮は自然に離れる。これを製造工場へ送るのである。

少し行けば茶園が始まる。恰もブラジルの珈琲園を觀る如く、平地から丘、丘から山に至つて、一望只蒼々たる茶園である。前を見ても後を見ても、左も右も、茫茫漠漠たる一面の茶の海！

谷を越え山を越え、先は幾キロあるか雲煙に消えて居て判らぬ。

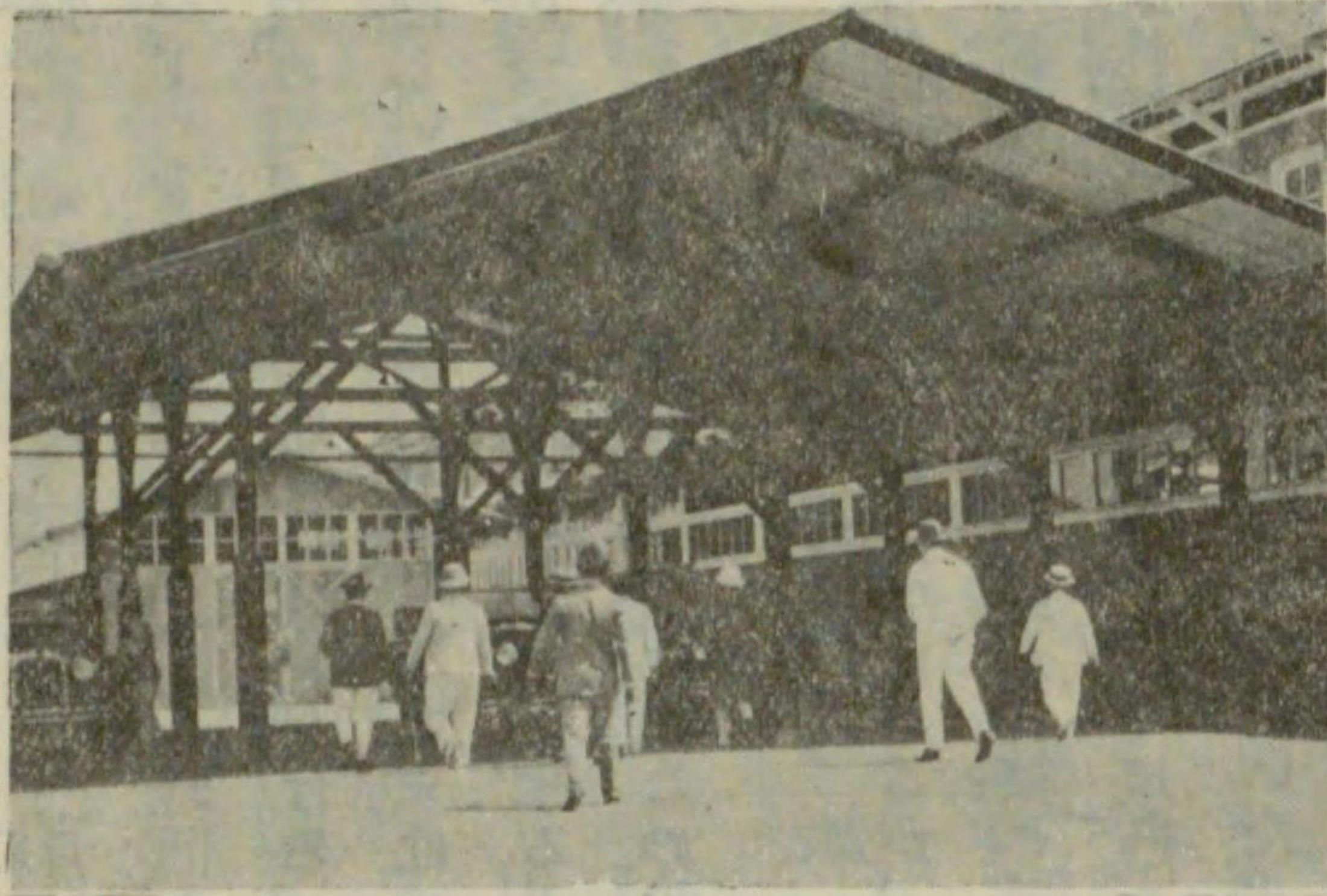
宇治の人がこの茶園をみて只、「へ……」と言つたきり、二の句がつけなかつた。何せ、四尺の高地に蛇の如く巻き廻らした道路、それも石ころの山道ではなく、アスファルトの八メートルの大道路で、如何に重い貨物車でも、苦しい呻り聲一つ出さずに上に登つて行くのである。また、廣漠たる山中は大公園か、大庭園のやうに奇麗に手入れが出来て居る。町があり、廣場があり、瀟洒な住宅があり、工場がある。

茶の葉も、新芽をふき、新芽をふけば摘める。斯様に一本の木より年二十五回摘む。勿論肥料などはせぬ。

この廣大なる地積、この肥沃なる土地、年中採收し得るこの利點とを備へて世界の市場に臨む。生産費の如きは如何に低下さすとも、充分戦つてゆける。日本は何れの點より見るも多難なるかな。

マラバル山には、タナーラ、マラバル、タルーンなどの有名な茶園と工場がある。その中のタナーラ製茶工場を観る。

タナーラ製茶工場の著者一行



工場は和蘭人の經營である。一見して、キッチンとよく整頓されて居る。工場に入ると、苦力の

摘んで来た茶を受け取る處がある。家庭で買物をしたとき用ひる筒型の衡であるが、このものは直にそれに賃金を記入してある。土人には目方で話すよりも、金額で言へばのみ込めるからである。

始めは廣間の板敷の上に敷物を敷いて、日光で半乾燥をやる。次に熱氣乾燥に移し、それをよる、すつかり乾かして、女工が屑を選び捨てる、袋に入れて、ペヤニ板の正方形の箱に入れ、包装する、といふ順序である。

ガロ

間の村落は田圃の間、路傍の家は屋根が瓦葺か草葺で、竹に囲まれて居る。家の周囲には竹垣を

バンドンからガローに行く道は、右も左も山である。山

結び、庭には枇杷、柿、李などがある。日本に見るやうな平和な山村である。中島總領事の一行と、此處を通つたのは、昨年の十二月の半であつた。

バンドンを出發して行くこと一時間ならず、雨はドシヤ降りとなつた。自働車の雨被ひを忘れて來たので、雨は横吹きに吹き付ける。果ては腰の下まで流れ込むといふ騒ぎ。天氣晦冥、雨は益々烈しい。雷は絶えず鳴る。電光はピカ／＼する。中島總領事と佐藤君と、自分との三人で話して居つたが、電光一閃ピカツと來ると、耳元でビシヤツと云ふ大爆音。思はず皆、自働車の中で首を縮める。落雷！ 兎に角この車ではなかつた。凄じいものであつた。ホツト顔を見合せた。

大谷師はあの位潤達な方ではあるが、雷は大禁物。遠方で雷が鳴り出すと、スツカリ被ひを自働車に掛けさせる。毛布を頭から被つてブル／＼慄へ、顔色蒼白全く人心地がないさうである。雷は天性嫌ひであるらしい。然るに御本人は絶えず喝雷を落して居られるのが面白い。

かれこれするうちにガローについた。

ガローの郊外を散策す。道々螢がとび、田には、蛙が啼いて居る。夕顔棚の下で、月を觀なが

ら風呂に這入つて居る故郷の初夏の早苗の頃を想はせる。

ホテルの廊下には、日本の風景を額にしたのがいく枚も懸つて居る。何となく嬉しく感ずる。夜になると、ズツト氣候が涼しくなつた。この夜、佐藤君の處で、この地方の名産にグラメと云ふ川魚があるが、そのグラメの御馳走に招かる。

アヒルの巡國

爪哇のバタビヤ附近は、田植の最中であつたが、ガローのこの邊の山地は稻の收穫に忙はしい。收穫と云つても、稻を刈るのではなくて、稻の穂をつんで、それを一握りづゝ束にするのである。アヒルが數十羽行列をつくつて、山を下つて來る。一人の男が棒をもつて指揮すると、列外に出るものもなく、行儀よく縦隊を作つてある。これは、アヒルを連れて收穫の地方地方をまわり歩き、收穫後の田は稻の落ちこぼれが澤山あるから、これを餌として育てるのである。

夜になれば簀を立て廻し、その中で休息させ、又朝になれば次の田に放つ、途中で卵を生むとそれを賣る。又アヒルのまゝでも賣る。かくして年中村から村、郡から郡をあるき廻る。一種の

遊牧の民である。

上からは牛車が下りて来る。稲の穂を擔いだ土人が来る。田は一枚は一枚より高く、段々をなして、山の上につづく。

左の方に高く聳え、白雲の搖曳して居るのが、チクライ山で、富士の形をした圓錐形の山である。標高三千メートル。信州の御嶽山位はある高山だが、七合目近く迄人家や工場が見える。

環翠山莊、香水工場、大觀莊

大谷師が爪哇のガローの清涼なる處を愛して、別莊をつくり農園を始めた。上の別莊が環翠山莊でズツと下つた處にあるのが大觀莊である。環翠山莊は直徑二尺程の太い長い基柱の上に建てられた六角形の風雅な建物である。

廣間の四方には、硝子障子がたゞつて居る。庭前には、千紫万紅を彩つた花園もある。朝夕日の輝くチクライ山は眼前に聳え、遠く波浪の如き青巒起伏して居る。こゝは千五百メートル近いところ、吹く風も冷やかで、青山緑樹の世界如何にも環翠山莊の名にそむかない。

牛肉のスキ焼き、ビールの御馳走で養蠶の話をきく。繭の標本も見せてもらう。廣瀬氏の若い奥さんは、色々御馳走に忙はしく働いて呉れる。少年の人達は斡旋に力めらるゝ。十六七から二十歳前後の青少年が事業の中心になつて居るのである。

香水工場の香草栽培地は二百五十バウある。香料はシトロネーラが主で、アカロアンシ、パチユリー、レモングラスなどがある。香草は茅草に似たやうなもので、これを刈り取つて釜に入れ、これを蒸溜して香水を採るのである。その燃料は蒸溜した後の乾草で間に合ふと云ふ。一時香水の價のよかつた時は儲かつて、師も得意になつて居られたが、今は收支償ふ程度だとは廣瀬氏の談である。

シトロネーラの香は三ツ輪石鹼の香のそれである。シトロネーラは石鹼に香をつけたり、他の高價な香水の混ぜ物などにつかふ。

またシトロネーラが薬物としての效能は、蚊がこの香を厭ふので手足に擦りつけておけば蚊は來ない。又この草を家の附近に植えて置けば、蚊は寄りつかないさうである。又、水むしにはよく利く、熱帯旅行中にはやられることがあるが、水むしと云ふのは、手の甲指の股などがかゆ

くなり、搔くとボツ／＼したものが出来ていつまでも水が出て痒くてたまらぬものである。その中に全面にひろがる、手はガサ／＼したもので人中に出せないやうなものになり、握手の禮など對外人との場合は非常に困る。自分もこれにやられた。が、佐藤君から大谷工場の製油を分てもらつてつけてみた處、不思議によくきいた。これは經驗があるから保證できる。外に痒みを持つた皮膚病などにも效能がある。

この下に今一つの別荘がある。大觀莊と云ふ。こゝはチスルパン・スカハジと云ふ、標高八百二十五メートルの處である。建物は洋風で、二階の間には洋書がドツシリ詰まつて居、如何にも學者の部屋らしい。

この部屋から見ると、青山四周のガロー盆地から、遠くブレアンゲル州を圍む高山雄峯のそゝり立つ雄大な光景が一眸の下に聚まる。形勝の地である。

爪哇と大谷師

大谷師はこゝで説明する迄もなく、傑僧である。何か一仕事せねば氣がすまぬ活動家である。

蘭領東印度に於ては、セレベス島メナド附近に珈琲を作られ、爪哇ではガローの山で養蠶をやられる。香料製造を始める。かと思ふと、土耳其に行つて香料の試験をされると云ふ。

「大乘」と云ふ雜誌を發行し、英語無用論を草し、シト・ネーソンの栽培を論じ、風景を説き、草花を品す。思想該博、行文流麗、蘊蓄の揃るべからざるものあるに加へて、嶄新の思想、獨創の見、凡俗の思ひ及ばざるところをどし／＼實行される。

思ひ立てば直に着手す。感興一度去れば、これを棄つることに何の未練も執着もないかのやうに見える。メナドの珈琲も今は、他人の手に歸して居る。養蠶も熱心に始められた。が、結局はどうして見よう、と云ふのでもないやうである。始めはガローの山奥に環翠山莊を作られ、又、少し下りて大觀莊に這入る。今度は、バンドン附近に形勝の地を下して別莊をつくるべく、法弟を率ゐて一等ホテルに陣どり各所物色して居られた。ところが、急に事業を中止して土耳其に向はれた。

爪哇の和蘭新聞が、この怪僧の正體を解剖することに、揣摩臆測をしたので、結局うるさくなつたであらう。飄然として去つた。

大谷師の事業經營上に特色がある。それは主任以下必ず、師自ら訓育陶冶した人でなければならぬことである、そしてそれは殆ど少年青年である。

佐藤農園と自動車部

この環翠山莊の奥に佐藤君の農園がある。カリキリと云ふ處で、佐藤君の弟の人が主として經營にあつて居る。住宅は丸木材を多く用つた素朴な建物である。庭には草花茂り裏には野菜畑やなんか廣々とし、奥の方には植林がある。

佐藤君がこゝに植林やり、馬鈴薯つくりを始めたのは、爪哇に来てから十年近く迄いろいろの事に苦勞を重ねた後であつた。

植林は政府から土地を借りてするのであるが、材木を處理するのは借主の權利で、その代り政府の要求する樹を植林をして返へすのである。開墾してから二年間は馬鈴薯を作つて收入を得ることが出来る。

二百ヘクタールの土地の租借を得てこゝに漸く根柢をつくることが出来た。

材木の運搬から自動車部を設けるに至つた経路は、次のやうな動機からであつた。

材木や馬鈴薯は貨物自動車を買つて、それでガロー迄送つて居たところが、或年洪水で橋が墜ちた。假橋では重いものを通さぬ。で、仕方がないから貨物自動車を乗合自動車に変更して、人に乗せることにした。これは平生、通行人がしばしば便乗を依頼したことから思ひ付いた譯である。始めには、諸費を差引いて三十盾も残らなかつたと云ふのに、遂に自動車部を設置するまでに至つたのである。

大正十一年、ガローの副理事官の勧めによつて、ガローから八十二キロある南海岸パモンボツクに峻峻なる處を自動車を通ずることにした。それで、交通の便が良くなつたばかりでなく、茶園保護園に働く人々に、牛乳、パン、肉類等を運んでやつたので大いに歓迎された。

大正十三年來は事業も順調に進んだ。その後新に自動車を通じた處は、ガロー、スカブミー間(六十三キロ)バンドン、スカブミー間(九十二キロ)スカブミー、バタビヤ間(百二十キロ)バンドン、チェリボン間(百二十八キロ)である。今度は大倉組と共同して、愈々事業を擴張してゆくことになつた。

ガロー娘、アンコロン

ホテルの温浴に旅塵を洗つて寝臺に横はれば、ガローの清涼の氣は安眠をさせるに申分ない。翌朝、廊下でコーヒーを飲みながら、朝の涼氣を味はひつゝある時、フト眼をあげると、青い芝生の夜露に霑ひ、朝日に生々と光つて居る上に、いつの間にか娘が並んで立つてゐる。五人居る。十六七位から廿歳位、肩に更沙の反物を掛け、そのうち一反を出して、兩手で反物の端をつまんで、静かに揺がし、黙つて動かして居る。皆な同じやうに更沙を動かして居る。ガロー娘の優に艶なる姿である。中の一人が活動女優の某とかに似て居る、といつて同行の一人は魔いて、更沙は買はずに、コーヒーを飲ませ煙草を興へた。

その中に、小供達がアンコロンといふ樂器を持つて來た。

打樂器アンコロンは、寫眞のやうに大小二つの竹の筒に小さい孔をあけ、竹筒を縦に並べて、その孔に細い竹枝を申し、左右の親竹に結びつけたものである。小供達がアンコロンを執つて、静かに打ち振ると、遊動して居る竹筒の先は、他の固定して居る竹筒に相觸れて、コロ、コロ、

コロ、コロ、コロ、コロと鳴る。アンコロンの合奏はいかにも微妙で、古雅なものである。やがて、子供達の合唱が始まる。

荷厄介にはなるが、標本に五ツ六ツを買ふ。

チバナスの温泉

チバナスの温泉は、ガローの西北に高く聳ゆるグンツール山の麓にある。ラヂウムを含んでゐる源泉である。湯の量は極めて多く、川をなして流れて居る。ホテルがあり、ホテルには内湯もある。公設大浴場は百坪餘りもあらうか、三分の一位を仕切つて浅くして置き、三分の二は丈の立たぬ程の深さである。太い鐵管から瀧の如く湯が出て居る。いくつかに區切られた建物は脱衣場である。

湯川の流れが瀧のやうになつて居る處もある。何せ、温泉の量が豊富であるから日本ならば如何やうにも面白い設備も出来るのである。が、温泉などには餘り趣味のない蘭人のことであるから、この位のところが開の山であらう。佐藤君はこの下に温泉を引き、ホテルを經營しようと思

つて居ると云つて居た。

この温泉の餘水を引いて、盛に鯉池を作つて居る。鯉池の傍には、並んで居る椰子の樹が澄んだ水に影をうつして居る。時々、緋鯉は水を打つて跳る。

この邊は日本の山里へ行つたやうで、閑雅清寂の趣きがある。

向ふからスندگان婦人の一群が来る。吾々の前を通る時は、しほらしく腰を屈めて通ること恰も、室内の作法の如し、相當文雅の國であつたことを想はしめる。

ブケンチ湖

幽邃の仙境と稱せらるゝブケンチ湖はグンツール火山の山の裾にある。ガローからは約十キロの處、ブケンチ湖の周圍には小山があり、畑がある。畑にはタビオカが作られて居り、平地には稻がある。四周には遠く近く高山が圍繞して居る。

もし、湖畔に森々たる樹林があるならば、これを一層幽邃なものにするであらう。が、憾むらくは只前方湖水中の小突起を除けば、平凡な山中の池のやゝ大なるものと云ふに過ぎない。

湖畔に自動車をつけると、この土地の風習と見え、大樹の下に子供がアンコロンを手にして、集まつて来る。その中に、子供を抱いた女や娘なども来る。

やがて、コロ、コロ、コロ、コロと、古雅な音を出す一種古朴、野趣に富んだ打楽器の合奏につれて、五ツ六ツから十一、二歳位の子供が一つの環になつて、手を振り、足に調子をつけ、ダンスを始める。郵船の「瓜哇の旅」には、

「……扱て、舟の用意が出来たので、紫の河骨の花咲く岸邊から、二艘の獨木舟を並べ浮べてその上に板を渡し、天幕を掛け、二脚の椅子をならべた屋根舟に乗る。獨木舟には二人の村の娘が左右に座して、團扇形の櫂を執る、舟は徐かに藻の花の上を行く。涼しい風はアンコロンの樂音を載せて、水を渡りて細々として舟を趁ふ。」

と、遅塚麗水氏が麗筆を揮ふて居る。讀み來ると詩であり、夢幻の境である。水邊の河骨の花、藻の花、湖面を渡りて、かすかに聞ゆるアンコロンの音、團扇の如き舵を持てる村の乙女、畫のやうな光景は人をして恍惚たらしめる。實は見ぬ風景にあこがれたのであつたが、來て見れば左程の詩情を湧かす程のものでなかつた。これはこちらが餘りに俗情に捉へられて居つたのかも知

れないが。

扱、吾々俗人がありのまゝに書くと、二人の乙女でなく、この時は前に三人、後に二人乗つて居た。佐藤君は娘をつかまへ、夫があるか子供があるかと聞く。年上の方は一度嫁にいつて歸つて来たが、今二番目のを探して居るといふ。舟は静かに進む。大勢の子供と、物を持った男が向ふ河岸を急いで行く。一小丘に上ると、その男がビールやサイダーを持つて来て、臺の上に並べた。

子供は又環になつて踊る。さつきの子供である。無暗に一輪の花を買へと強いるのは舟の乙女だ。そこで、銘々銅貨を出して抛げると、押し合ひへし合ひ拾ひ争ふ。

日は段々西に傾く、乙女達を促して舟を進める。早くくと聲をかけると、一三分は少し早くなるが、直に舟は動かなくなる。又促し、最後には懸賞で急がす。「林檎と鞭」は常に入用と見える。

岸につく。さつきの子供は亦踊り出す。アンコロンを鳴らす。面倒だから錢を呉れて、自動車に乗り走り出す。子供は後からガヤ／＼言ひながら足のつとく限り追つて来た。

革命の烽火

この山水明媚なる、ガローの山奥を發祥地とした革命騒ぎが勃發した。それは一九二六年十一月のことであつた。線香花火の如くで済んだが、和蘭官憲の神經を痛めたことは夥しいものであつた。その實行手段としては、和蘭政府の走狗となつて居る土人の郡長級や、巡查の輩を殺戮する。それで大半目的は達すると云ふのである。

この革命運動で官憲より大分睨まれたのが、回々教の王領地にあるサリカット・イスラムと云ふ政黨であつたが、別に何等の證據も擧がらなかつたやうである。

官吏を殺し、爆弾を用いた叛徒で、逃げて居る者も大分あつたが、又冤罪で牢獄に繋がれて居る者もあつた。牢獄に打ち込まれた者は半死半生の目に會はされた。しかし、死ぬやうな慘酷な仕打ちにあつても、決して同志の姓名を明かさなかつた。これは大分當局を手にこすらしたものである。牢獄の内と外との連絡は、殘飯を持ち出す時に、飯の中に手紙を入れて通信したのであるが、官憲もこれには氣が付かなかつた。で、最も殘酷な處置を受けた者のことは、外部に手に取

るが如く傳へられた。物論囂々として、總督府に上申する者もあり、人權問題として新聞でも盛んに論議された。

鐵道工夫に混つて隠れて居たものもあつたが、主要人物は全部捕へられた。これを叛逆罪として、絞罪に處するか禁獄にするか、大分社會から論議された。老獪なるサリカウト・イスラム黨の首領は平然として、「叛逆罪は死罪とするも、事實上違法ではないから」と云ふ意志を發表した。政府も世論を顧慮して全部ニュー・ニアへ流刑にしたと云ふ。これはお前達の理想的の社會を勝手に作れ、と云ふ意味であらう。この土地をタナ・メラ（赤土）と昔から言ひ來つたのであるが、所謂赤化した人の流刑地としては何か因縁でもありさうな氣がする。

この革命騒ぎより、十年前の話である。

一九一八年、世界大戦争の結果食糧缺乏し、暹羅もラングーンも、食糧輸出を止めてしまったので、爪哇では米價は狂騰し、十六仙の米が一躍四五十仙となつた。

ガローは爪哇米の本場であるが、その時分米の出来る平野は砂糖畑となり、米を作る人は、甘蔗畑の耕作人になつて居たので、三百四十万石も外米を輸入しなければならなかつた。外米の輸

入がないとなれば、少ない島の食糧を平均に頒けなければならぬ。そこで、巡查つきそひで米何石以上あるものは、それを公定相場で買ひ上げるから、差し出せと命令した。

ガローの不屈の百姓は承知しない、「吾々は平生、租税を拂つて正直に穀物を作つて居るものである。今それを、不當の代價を以て徵發すると云ふのは、絶対に不服だ。」と頑張り、知事が再三懇諭してもきかない。では軍隊を差し向けるぞ、といふことになつた。軍隊は來た。鐵砲は撃たれ、遂に四五人は銃殺された。

士民は激昂し憤激した。サアかうなると米の騒ぎよりか、今にも一大騒動が持ち上がりさうな騒ぎの方が大きくなつた。官憲も大に苦心し、知事を國に歸還せしめて、漸く結着になつたと云ふ。

山中猶豪狭の氣存して居る。三百年前に、爪哇全島にこの氣慨勇氣があつたならば、形勢は果してどうなつて居たであらう。しかし、大勢は今既に動かす可からざるものとなつて居る。

土民の民族運動

三百年來、巧妙なる和蘭統治策の下に、盲目的に有耶無耶の間に過ぎ去つて來た土民も、段々教育が普及され、人智が進んで來たので、臆氣ながら世界の趨勢の流れや、各方面の運動が理解されて來た。殊に東洋の端の渺たる日本が露西亞に克つた眼前の事實は、彼等に驚異の眼を睜らしめた。その後大なる刺撃を與へたのは、世界大戰後の民族自決、自由、民主の聲であつた。これが參政權に對する必然の要求となつた。

土人政黨の有力なる代表的なるものに左の三ツがある。

一、サリカット・イスラム黨

これは回教を背景にしたもので、始めはサリカット・ダカン・イスラムと言つた、サリカットは組合、ダカンは商業、イスラムは回教の意であるから、回教商業組合と言つたのであるが、現今では、堂々と運動の政治化したことを明言してゐる。

二、ブデイ・ウトモ黨

ブデイ・ウトモとは美しき努力の意味で、その主張は革命的傾向を避け、議會主義により、漸進的に權利の進暢を圖り、教育機關の充實を期するにある。會員は二百五十万ある。

三、國民印度黨

急激革新派である。主領チプトの主張したのは、和蘭本國と絶縁すること。奴隷的羈絆を脱すること。自由の爲めに戦ふことの高唱であつた。そして主宰する新聞では、ソロ土王の王室や理事官の攻撃をしたので、チプトは放逐され、その後政府の壓迫が甚だしいので解散した。解散したから無くなつた譯ではない、表面には見えぬが、下行く水の更に深く浸潤して居るものがないとは言へぬ。

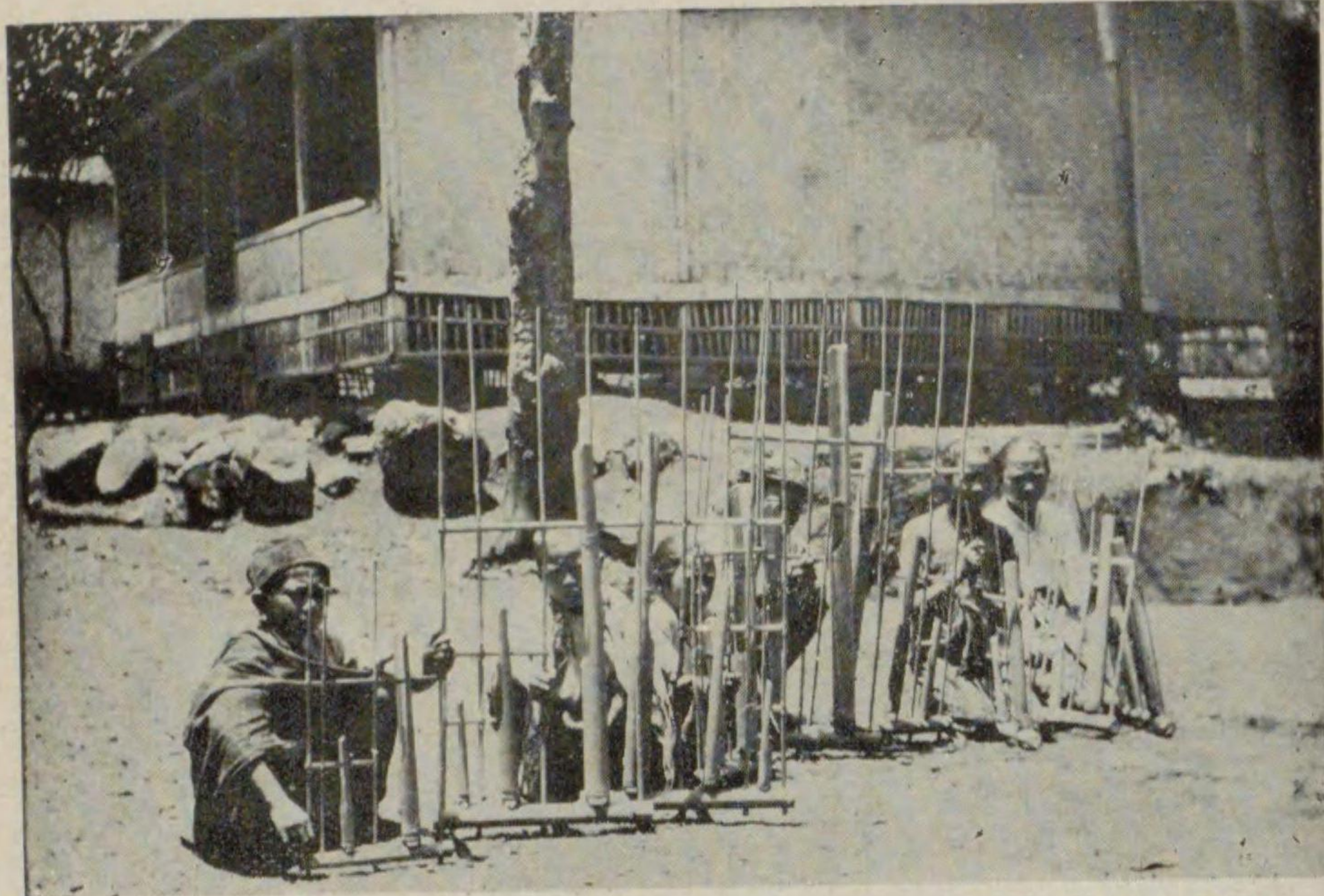
生活上の壓迫と、永年鬱屈した歐人に對する感情と、民族的自覺と、勞働問題とが錯交して色々な形式で現はれた。大正三年には、スマトラにサリカット・アバンが暴動を起し、五年にはヂヤンビーに擾亂があり、七年には爪哇に、八年には爪哇ケデリー州に暴動が起き、同年セレベス島トリトリでは歐人郡長が虐殺され、又爪哇ガローでは戦時中食糧不足の爲め、徵發をしたのに對し、一村擧つて抗争して遂に軍隊の出動を見るに至つたのは前に述べた通り、それから八年、九

年に亘つた糖業罷工で、各工場に盟休や騒擾が起き、十一年には官營質屋従業員ストライクの盟休、二年の鐵道従業員盟休などは、革命的の氣分が漂ふて居たと言はれる。そして、これ等諸運動の裏面には、政黨的團體の陰のうごめいて居ることも争はれない事實である。

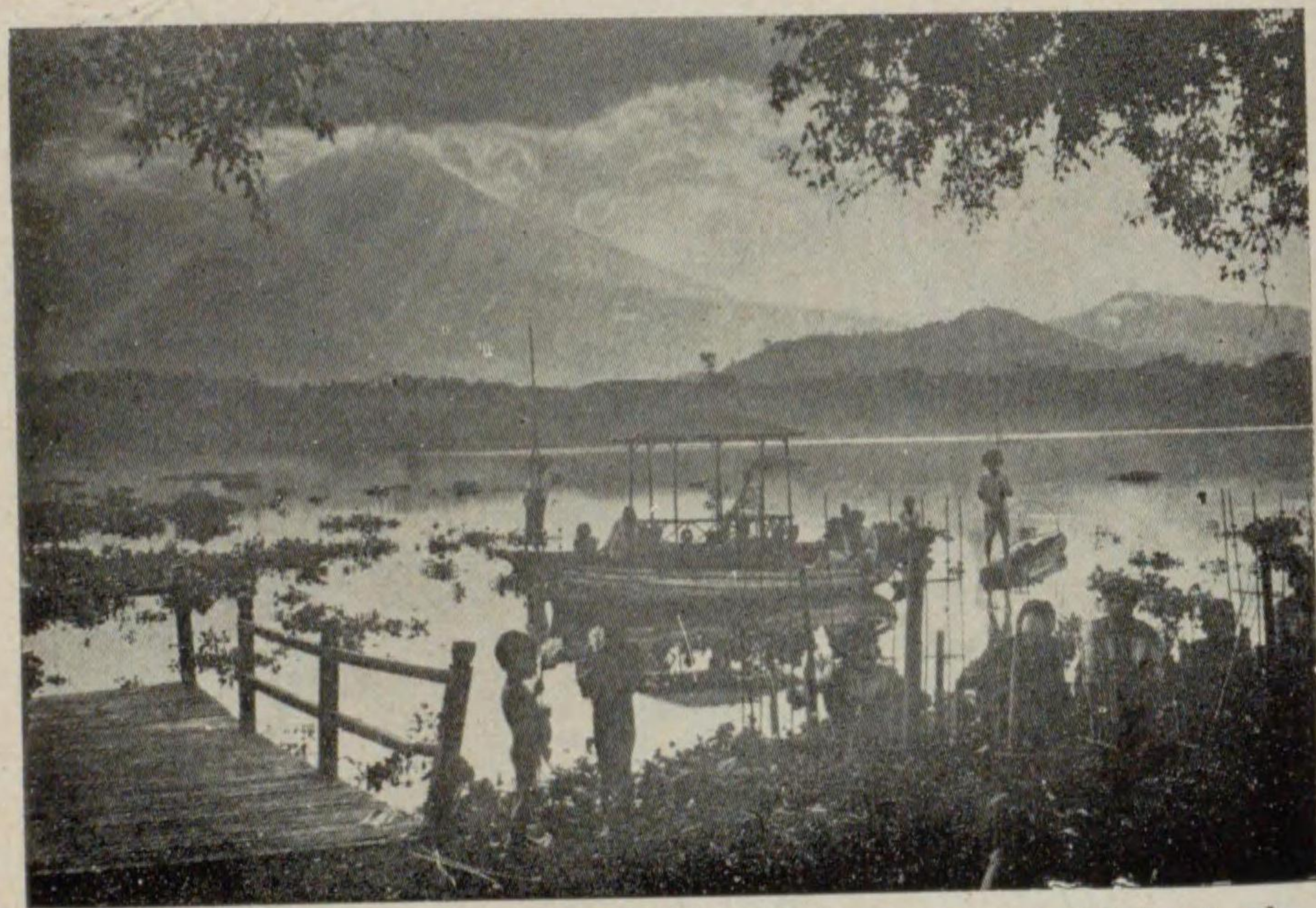
有名なる千九百十八年十一月十八日、バタビヤ政廳が、國民議會(土人、歐人、並に東洋外國人より成れる諮問機關)に臨んで時の政府委員タルマ氏をしてなさしめた、「十一月の約束」、更に十二月二日に具體的に聲言した、

「國民議會の權限を擴大して、純然たる諮問機關より完全なる立法機關とし、行政に對し直接の宣言權と監督權を行使せしめなければならぬ。」

との如きは、たとへ本國植民大臣の認容するところとならなかつたとは言へ、一般土人には深き刺衝を與へ、彼れ等は夫れを信じ、必ず早晚實現さるゝものとして待ち望んで居る。



筒竹のそべ並に縦を筒の竹の小大はソロコンア器樂 ソロコンア
ソロコンアでのもたけつび結に竹親の右左し串を竹細の本三二に
。す出を音な雅古もに何如とる振ち打くか細に後前てつ執を



ふ向が男たつ持を物と供子の勢大、む進にか静は舟 湖チンケブ
き如の扇團、音のソロコンアるゆ聞にかすか、く行でい急を岸河
。るあで境の幻夢く全、女乙の村るて持を舵

爪哇の汽車は、一等は厚い皮張りの椅子で、しかも客は威容嚴然とすまして居るので餘計に熱い感があるが、二等の椅子は籐張りで、椅子と椅子との間に風が吹き通すので、却て氣持がよい。三等は木の椅子で、土人などの乗るものである。汽車はメステル・コルネリスの街の中を進んで郊外を走る。この邊の水田の稻は既に刈り取ら

スラバヤへ

ジャワ廻りに出發すると言ふので、手紙を出す處には出す。荷物の整理をして、宿に預けるものは預ける。必要な品物はカバンにつめ、薬の無くなつたものは買ひ足す。理髮屋にゆく。シャツ、カラー、ズボンなどは出發までに乾くならば、と宿に洗濯を頼む。かれこれする中に午後二時半ともなる。自動車が出来たと云ふ。荷物などは後の臺に積んで出發する。パタビヤ、ウエルテフレーデン驛發三時十五分の汽車に乗る。



度態な嚴謹着沈を作所なうやた似に樂能は優俳の場登 劇の哇爪
り飾首の石寶はに頭き戴を兜け着を裳衣の代古り被を面、るやで
。るけかへさ



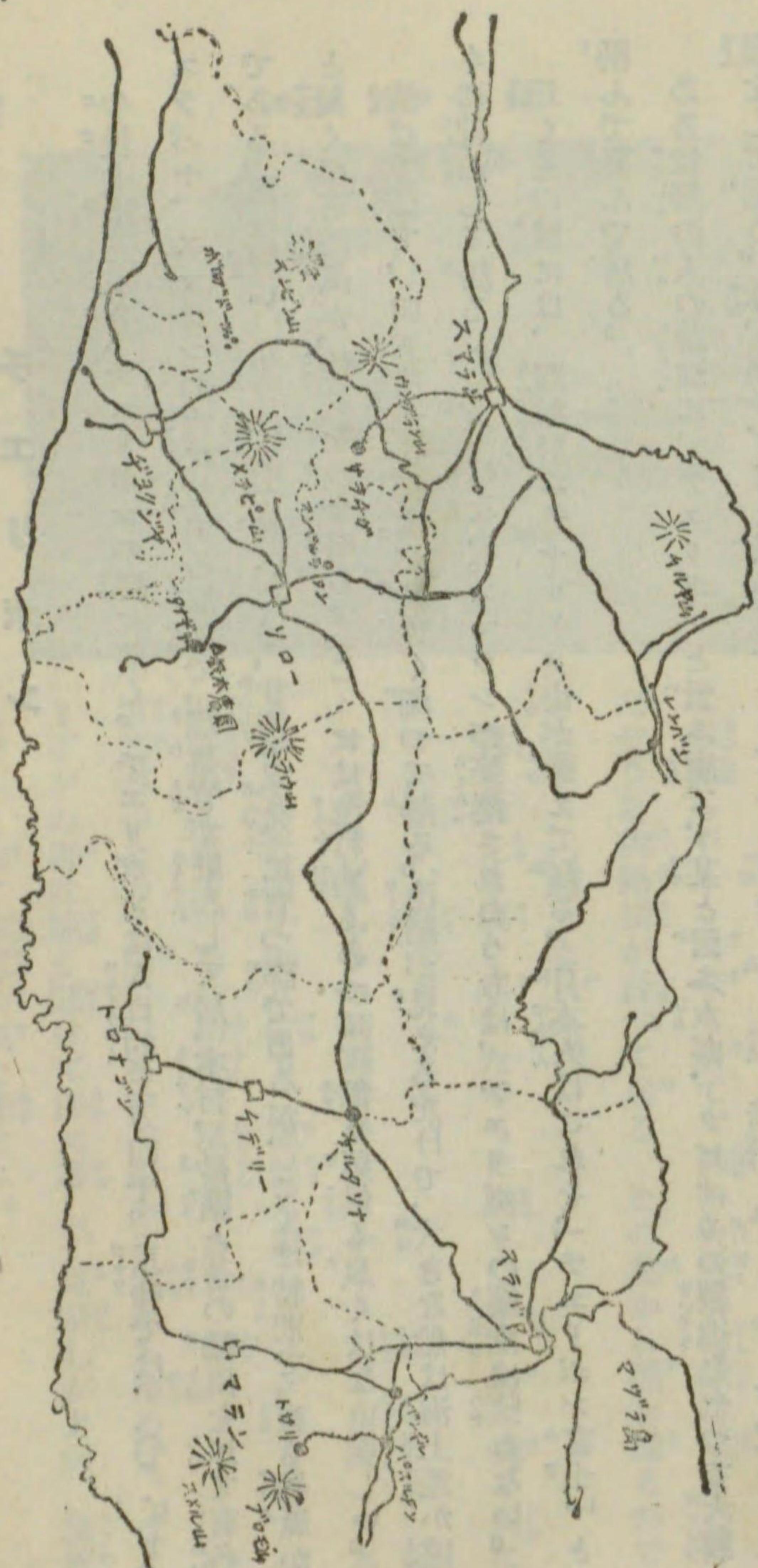
優で器樂の種各は達姫舞たふ纏を裳衣の様模な麗美 踊舞の哇爪
。る踊てせ合に歌ひ唱で調なかどのし奏を樂るた揚

れて、水牛が放牧されて居る。チカンへの驛には午後四時着く。

見ると、貨車に糶を積んで居る。運搬するに依に詰めると云ふのではなく、稻の穂のまゝである。斯様にすれば、害虫もつかぬだらうし、米質も損せず軽便なものである。日本のやうに少し豊作であれば、生産者は困つて政府に買上げの心配をしてもらう、扱政府は買上げても、少し保管が悪ければ變質したり、害虫にやられる。で、一氣呵成に處理してしまはねばならない不便もある。が、このやうに糶のまゝに運搬し保管すれば、少し位精米に面倒があるにしても、餘程融通がきくと云ふもの。

バンドン行はこゝから分岐する。煤烟が飛び込むので、細かな網目の戸をおろす。室内が陰鬱となる。うつら／＼眠りに入る。フト、眼を醒ますと、一寸仕切つた隠の室の腰掛の處に、穴のあいた而も數ヶ所足の指の見える破れ沓下の足が、ニヨキツと見える。衆人の席で靴を脱ぐさへあるに、破れ沓下を出すなど不作法至極の人である、と思つてそつと見ると、三十歳を越えたかと思はるゝ和蘭婦人であつた。否、混血兒かも知れぬ。

(ヌヨンヤ)



チエリボン

午後七時三十分、チエリボンの驛に着く。チエリボンは人口約三万四千。爪哇では、パタピヤ、スラバヤ、スマランの次に位する海港で、理事官が駐在して居、木材、砂糖と茶の輸出を以て有名である。風は強い。爪哇は風が無いので、甘蔗も安全に育つ譯であるが、こゝは特別で、夜も暴風かと驚くほど海風が、樹枝を吹き鳴らす。こゝには流行病もあつて、餘り氣候も良くはないらしい。海は遠浅で、四五町先き迄水が黄色く濁つて居る。漁船が見えるだけで、大きな船は海上遙か遠くに碇泊して居る。良港ではない。スマランが築港されぬうちは、チエリボンの築港は望めない。遠くその後には、圓錐形のチャレーメ山が聳えて居る。日本人はこれを「チエリボン富士」と稱んで喜んで居る。

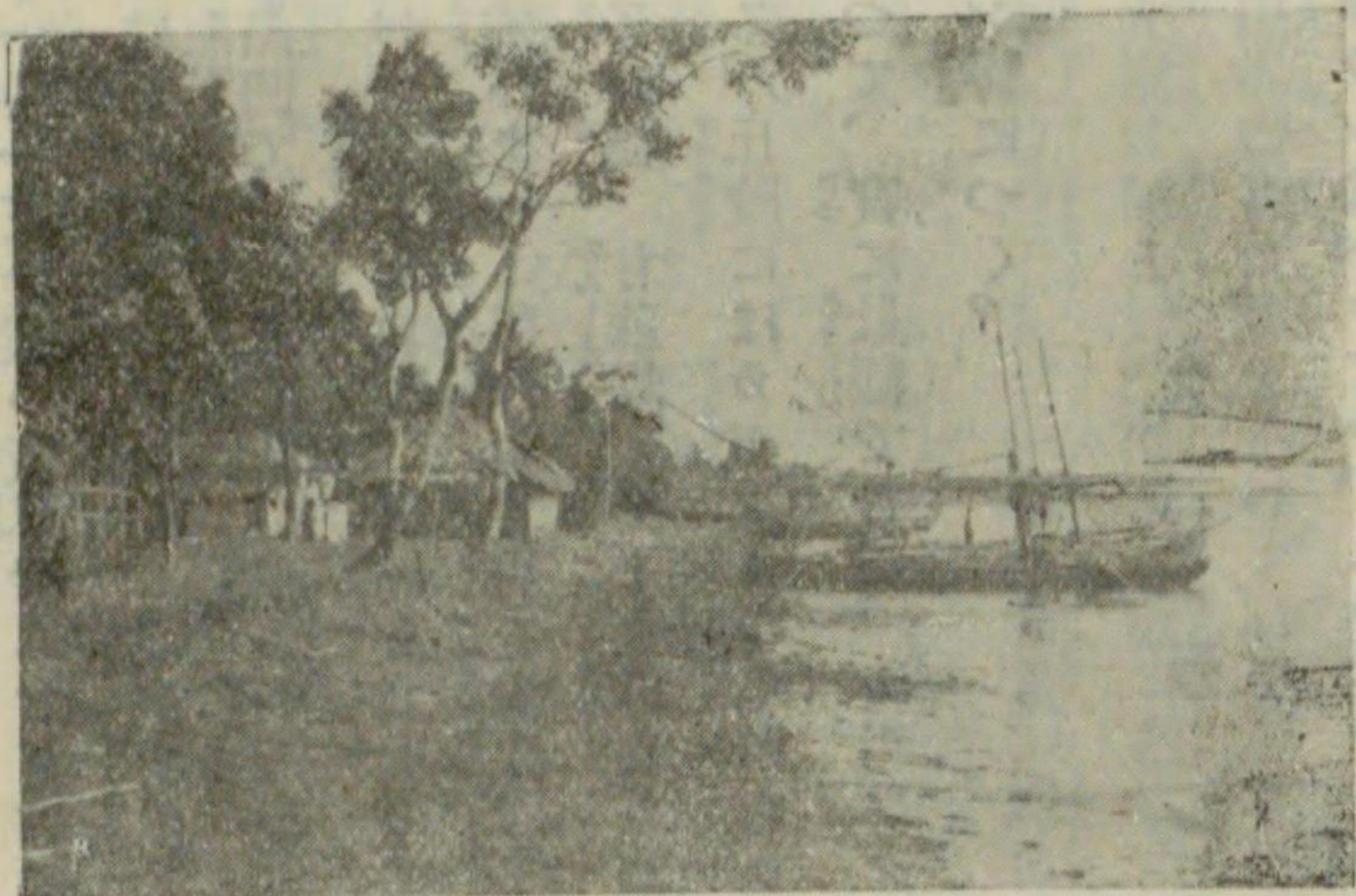
ある役所の人の講演に、チエリボンと云ふ處で、某と云ふ人が、タピオカの製造をやつて大發展をして居る。亦、チンプイと云ふ五十キロばかり距つて居る處に工場を持つて居、土人二百人もこの爲めに生活して居るなど、聞いて來たが、扱こゝに來て見れば、只一片の屋氣樓か、そんな人も居らぬことが判つた。大發展をして何處かに突抜けたのかも知れない。

モンドウ漁村 この町を出て四十キロの處にある。道路は相變らずよく出來て居て、柳の大木に山椒の葉をつけたやうな街路樹が茂つて居る。この葉から醋を採るのでアツサム（醋）と云ふ。

艦も舳先も渦を卷いたやうに回くなつて居、帆を斜にかけた船が、幾つも見える。

マンチランチャンの別荘地 チャーレイメ山の山腹、チエリボンから四十キロ許り、氣候も涼しくホテルもあり、別荘地もある。その附近に温泉もある。幅八メートルの道路がついて居て、ホテルのある處から望めば、チエリボンの野は遠く開けて海に接し、見晴しがよい、旅客

モンドウ漁村



の多くはチエリボンに宿らずに、こゝのホテルに來て清涼の氣を味はふ。

十一時十三分發の汽車でスマランに行く。兩側には稲の刈つたのが見える。青田も見える。青田には日本の苗代の如く、稲が密生して居る。田を耕した後が、塊をよく碎いて平にしてないので凸凹で、一見肥料の多い處があるかと思ふと、營養不良のやうな處も見える。甘蔗の苗を植え付けた畑があれば、既に刈り取つて後、整理をして居る處もある。平坦で廣々した處に、點々と赤裳ひきつゝ、勞作して居る處は、美觀とも言へやう。

椰子の樹、甘蔗畑、チーク林などが續く。スマラン近くなると、一方は海一方は丘陵で地積が狭まる。丘陵にはカボツクの畑があり、一抱へもある大木が列をなして居る。カボツクの本場だけあつて、實に壯觀である。カボツクの木の下にはコーヒを栽えてある。午後三時二十二分スマラン驛につく。

スマラン市

スマランはバタビヤ、スラバヤと共に爪哇三大港の一である。港灣は遠淺で船着き悪く良港で

はない。人口は十六万、歐洲人も一万人程居り、支那人の富豪巨商も多くこゝに集まつて居る。輸出品の重なるものは、砂糖、珈琲、コブラ、タピオカ、木材、皮革、カボツク等であるが、就中大宗は何と云つても砂糖である。

日本人の商店も、一時好景氣の時には、何々洋行、何々商會など云ふ商店が、大分あつたやうであるが、今あるものは、三井物産、東洋綿花、日本綿花、江商、有馬洋行、次いで日盛洋行などである。

銀行としては、正金、臺灣、華南等で、三井物産は、滿洲の大豆の輸入、又土地の砂糖などを取り扱つてゐる。

チャンデー高臺は、もと支那人の墓地であつた丘陵を住宅地としたもので、市の中心から言へば、約十キロを距てた處にある。

邦人の會社の社宅もこゝにある。スマランの商人は、日中都座熱鬧の商業街に奮闘して、業務畢れば自動車を驅つてこの高臺の住宅に歸り、一浴垢塵を洗ひ去り、家族團欒、晩の食卓につくのである。

十餘万の大都市はこの高臺の脚下に見える。右は煙波漂渺たる爪哇海で、ムルア山の聳ゆるムルア半島は模倣として見え、左は稻田緑野遠く開け、背後にはウンガランの青櫓を控へ、中央分水嶺は蜿蜒として連なつて居る。

住宅地として、清涼で眺望のよいこの位の處は、爪哇、スマトラにも他に類があるまい。

パッサムマラン

パッサムマランとは夜市のことである。共進會式のもので、賣店の外、餘興所を設けて、客足をひくやうに出来て居る。本年の夜市は支那人の主催である。小は家具日常装身具より、大は自動車などもある。が、工業器械のやうなものは一つもなく、縁日の夜店を一構への中に入れたやうなものである。今年に砂糖の方が一向振はぬので、不景気で、夜の市も寂しい。

餘興場では、爪哇人の古代劇や舞踊などやつて居た。この外にあるのは布哇の臀振りダンスとか、片輪の藝當、自轉車の曲乗りといふ輩のものである。パタピヤでも公園の廣場にメナカボ1式の建物を新設してパッサムマランの設備をしてあつた。スマトラのチュルツブでもその準備

をやつて居た。各所で開催して景氣をつけて居る。

スマランの日本人のホテルとして、唯一の玉屋ホテルと云ふのがある。こゝの主人は五十年輩、嘗て、臺灣は爆竹の盛んな所であると聞いて、花火で一儲けしようとして臺灣に渡つた。が、思惑がはづれ、有金全部をはたいてしまつた。そこで、香港に渡り爪哇にやつて來たのであると云ふ。

當初はスマランで氷屋をやつた。日本人が一番小資本で出来るのは氷屋であつたから。今度はホテルを始めた。主人は愛嬌もあり、義侠の處もあるので、段々繁昌して、今は手許にいつでも二三万の金はあるといふ。金はあつても、有るやうな風をせず、ハデにもやらず、山氣も出さずにやつて居るのが頼母しい。

スマランの支那人

スマランに於ける支那人の勢力は、實に大したものである。支那人のこゝに來た起原も亦、随分古いもので、開拓者を三寶大人と云つて神に祀り、盛んな祭典を行ふ。

支那人の富豪も多くはこゝに集まつて居る。その資産一億と云はれて居る建元號の如きも居る。嘗て、官憲がこの建元號に對して、違法なことがあつたと云ふので、少し過酷の處置をとつた時、建元號は資産をまとめて國に歸ると言ひ出した。ところが、今建元號に金を全部引き上げられてしまつては、スマランの經濟機關は止まつてしまふので、判決は中有にさまようた、と云ふ話のある位支那人は勢力を持つて居る。

大隈内閣の時、例の支那條約二十一箇條の國辱問題で、ボイコットが起きた。その時、盛んに日支親善を説き廻つたのに、鄭懷懐と云ふのがある。彼は自動車の後、コールドールを容れた卵をうちつけられた。今の態度を改めなければ、これが爆弾に變るときがあるぞ！と云ふのである、けれども、彼はその態度を改めないのみか、益々日支親善を力説し廻つたと云ふ。

豪快なるのには黄奕住がある。彼は一時砂糖糖暴落で失敗し、沈淪のどん底に落ちた。が、ある見込が立つたので、女房の寶石を擔保に臺灣銀行から金を借りた。彼の計畫豫想は的中して、砂糖の價が上り、三百万圓の利益を得た。それからトン／＼拍子に資産を殖やし、支那政府に獻金して勳一等を授けられ、厦門に近きコスントス島を三千万圓で買つて、こゝに王城のやうなもの

を造り、従者を引きつれて威張り歩いて居るといふ。

郭河東といふのは、故兒玉大將の知己の言に感じて、籍も臺灣に有つてゐる。これも一億圓近い資産である。本年、長男春英が死んだので、その爲め香港から來て、采配を振つて居るやうである。新年には在スマランの日本人を招いて、大いに日支の親を觀せてゐた。

今度の日貨排斥もスマランだけは、何等の行動に出ない。(これは扱ふ品が小商人の雜貨でないといふ關係もあるが)

支那人は故郷を出るときは、漸くにして入國税百盾と船賃だけをつくり、上陸したときは徒跣で稼ぎ、段々零碎の金を貯蓄する。そして、それを土人に高利で貸せる(これは段々取締りが嚴重にはなつたが)實に天才的活手腕で、市場に來た土人をつかまへ、金貸しの話をまとめる。貸したが最後、ダニのやうに付け廻して、土人の生血を絞る。それから雜貨商、布類の卸店、貿易商となるのである。兎に角、堅忍精苦、根氣強いのと、金錢についての執着心が強いので、裸一貫で大なれ小なれ、店を持つまでには漕ぎつけて行くのである。

避暑地サラチガ

避暑地サラチガはスマランから四十八キロ、自動車で約一時間の行程にある。

スマランから南の分水嶺の高山地帯の方面に向つて進む。原野を横切り、林をつつきり、上りつゝゆく、ウンガラン山の裾野を走り、メルパウ山を上り行くと、その中腹の處にサラチガの別荘地がある。

町の入口に郭河東の別荘がある。表の方は一町程も一文字の塀をひき廻らし、中に支那風の樓閣が四方に聳え、王侯の邸宅とでも云ふやうな堂々たるものである。しかし主人公は、こゝに来て悠々と涼風をいれて閑日月を楽しむ餘裕もないらしい。

こゝは富豪の別荘地であるが、又一方には商業街もある。こゝからソローにゆく大道が通じて居る。

夜間室内六十六度。毛織のチヨツキを着けても未だ肌寒さを感じる。八時の晚餐には少し時間もあるので、谷を下つて水浴場を観る。谿流を湛えて一寸した水浴の設備が出来て居る。竹や野生

護謨の大きいのや、椰子など茂つて居り、またこゝに溪流も流れて居るので、幽邃なる趣きがある。

丁度、今夜は十五夜で、満月が椰子の葉蔭に仰がれる。流の間の石の上に立つて、月影を仰ぎ清流をきき、肌迫る冷気を味はふ。全くこゝは赤道直下とは思へない。況や、海岸熱鬧の都會から、自動車一時間の場所とはどうしても思へない。

ホテルで食卓についた。三井出張所主任、峰君夫妻、店員、及び吾々二人である。

歓談の間に食事は終り、歸途に就く。武井氏は和蘭風に夕刻からは帽子を被らぬ方が粹だ、と帽子なしに出懸けたところが、頭が冷たい。そこで、ポケットから風呂敷を出して、爪哇式に頭に捲きつける。そのうちに、良い氣持になつて、車中華胥の園に遊ぶ。外の連中は、「こゝは朝鮮北端の……」と、寒風凜烈の歌かなんか歌ひ出す。節廻しが變だ、と峯君の若い奥さんは、ホ、と紅唇を綻ばす。

シザル園

スマランからソロー迄は汽車で一時間五十分である。ソローから少し手前の驛にスンベルラワ

ンと云ふところがある。このスンベルラワン驛の近くに千浦友七郎氏のシザル園がある。シザルは又サイザルとも云ふ。シザルと云ふ方が正しいさうである。原産地はメキシコのユークタン州であるが、この植物から採れる織緯の輸出港がシザルと云ふので、その名をとつたと云ふことである。

一寸見たところ万年青を大きくしたやうな植物である。葉は長さ一メートルから二メートル位のこの葉からとる織緯が細や綱として大分用ゐられる。近來は袋類をつくり、米や砂糖とか珈琲などを容れるに用ゐられ、又精巧な織物が出来る。織緯は純白で、強くて水分を吸収することが少ないのが特長である。これを精製するには、これまでのやり方は葉を水に浸して腐らせたのであるが、これは光澤がわるくて品質も劣るので、近頃は専用の機械を用ゐるやうになつた。

栽培地の條件は排水がよくなくてはいかぬ。瘠せ地ならば織緯の含有量は増すが、栽培には不利である。輕鬆で耕土深く排水が良くて多少石灰分を含んで居る土壌が良いとされて居る。四年目から收穫を始めて、四五年間續けられる。

この千浦氏の農園などは、土壌は大體肥えて居らぬ方なので、マアシザル園ぐらいが適當して

居るだらう。面積は一万バウ(約七千町歩)で、中に利用不可能の土地もある。五十万圓で買収し、百万圓の資金を投じ、今は十万圓位の利益があるさうである。

附近一帯瘠せ地で、一尺か、二尺の蜀黍は僅に生を保つて居るやうなヒヨロ／＼である。護謨、胡麻、芭蕉、椰子園がある。

こゝに政府の經營にかゝるチーク林は長く續いて居る。概して、チークを生ずる地は、土地としては良い處でない。

この汽車に乗つて居る人には、昔の日本の武士のやうに、腰にクリスと云ふ短刀を、固くしめた帯に差して居る。頭は髪を結んで鬘甲の櫛をさし、純白の詰襟の上衣にサロンを纏ふたものが居る。短刀の柄と鞘とは金屬製かと思はるゝ程磨いて光澤を放つて居る。木質は小柿の木のやうな黒い斑文のある美しいものであつた。足には革製のスリッパを穿いて居る。この短刀は明燧々たるものではなくて、一種の毒液を塗つていぶしてあるので、突かれたら最後その疵はなほらない。

古雅典麗の王城ソロー

七時二十六分スラバヤ發の汽車は、九時十六分にソロー驛についた。根本君と商店小川の店員が出迎へて呉れた。昨日電話を小川洋行にかけて、根本氏にまで通信を依頼して置いたのであつたが、丁度根本氏がソローに来て居られたので早速消息が判つたのは何より好都合であつた。

ソロー王は宇宙の柱、宗教の保護者と云ふ大尊稱を有せらるゝススーナンの城下である。人口約二万。

ソロー・ホテルに向かふ。

王朝榮華の夢

爪哇に於ける二ツの王國、古雅典麗の昔ながらの風俗を今も映して居るのが、ソローとデヨクジャである。ソローはススーナンの王城のあるところ、デヨクジャはその分家たるサルタンの城下である。

マタラム王國は一五〇〇年の頃、既に中部爪哇に根據を据え、爪哇一帯に勢力を揮つて居た。その後、回教徒の侵入によつて他の小王國は倒れた。が、マタラム王國は敢然として、これと抗争して、社禮を維持して來た。しかし、和蘭がこゝに地盤を築き段々勢力を得るに及んで、必然、その衝突は免かれなかつた。これ迄敗軍の汚辱を見なかつた刀の威力も、マタラム傳統の武士の魂も、文明の利器には敵すべくもなく、ジャカトラから和蘭兵を驅逐しようとして試みた攻撃戦はあべこべに勢ひ日に蹙まり、中部爪哇の天險に據つて固守するの已むなきに立ち至つた。

折しも、セレベスの豪族は、舳艫相銜んで侵撃して來た。前門の虎、後門の狼である。前門の和蘭の虎は、尾を踏み鬚を引張らなければ喰ひつきはしない。が、後門のセレベスの狼は既に門檻を超えて牙を鳴らし、獲物を探して居る。背に腹はかへられぬ境遇となつて、マタラムは和蘭の虎に援助を乞ふた。虎はわが意を得たりと許に、猛烈なる砲彈をあびせかけてセレベスの狼を撃退してしまつた。和蘭が王國の國政に容喙するの機會は出來た。落日瞳々さしも全盛を誇つたマタラム王朝も影は寂しくなつた。滅亡は只、時日の問題である。

機會は來た。王位繼承の争ひである。王子と先帝の弟との間に起つた御家騒動である。和蘭

つて、二三千弗の金が手に這入つた時、南洋で賣藥をやれば儲かると聞いて急に考へが變つた。これじや、下手な畫書きになつてマゴマゴして居るよりも、南洋で一旗擧げるのが近道と、有金全部を日本に送つて賣藥の注文をした。藥の名前なんか一寸も知らないから、産前産後、腹痛み、頭痛、疝癪、風邪藥等何んでも利く藥ならば宜しい、と言つて取り寄せたのが、今から二十幾年も前の二千圓以上であつたと云ふから、實に豪勢なものであつた。それを爪哇に持ち込んで、そこらにぶらついて居る人を賣子として、盛んに賣り弘めたものであつた。一時何々會社とかを作つて非常に大きくやつた時代もあつたが、しかし今は本店をスマランからソローに移して手固くやつて居る。

コ小川の外に、ソローには南洋商會、富士洋行支店、淺野、理髮の中村、寫眞の大木などがあつた。寫眞の大木君もカメラ一ツと云つても良い位な情態で上陸したのであつたが、今では助手をつかつて立派に店をやつて居る。

中村君の理髮も始めは虎斑が出来たり、だん／＼が出来たりして困つて居たが、今ではもうすつかり熟練したので、商買は大繁昌、日本人會の幹部となり、人の世話をするだけの餘裕を持つやうになつた。淺野君は無一文で南洋商會を出て——今は堤林君の南洋商會は解散となつたが——支那人から資本の融通を受け、雜貨店として相當立つて行けるまでになつた。

根本農園

ソローの町を出て鬱蒼とした街路樹に圍まれた坦々たる道路を自動車は氣持ちよく走る。この邊は多くは水田である。稻田の間に竹林や椰子に圍まれた土人部落が見える。部落は二三十戸一ツの柵のやうなもので圍まれて居、その入口の處には竹の趣向を凝らした門がある。田圃は遠く開けて遠くにラウ山の峰が見える。先方には丘陵がある。根本君の宅はこの丘陵に近く、ソコハルジヨのオンデルネミング・ランカツプと云ふ處でソロからは二十餘キロの地點にある。この丘陵の後にはワナギリの町に近い。

根本農場と云ふよりは、田地は土人が作つて年貢を納めて居るので根本村とか云ふ方がよいかも知れない。兎に角ソロー王領地に於て二千三百パウ(千六百町歩)の田畑を有し、タヒオカ、カ

ボツクなどの物産を取り扱ひ、堅實な田園生活をやつて居るのが根本榮次君である。

根本君は小學卒業後郷里福島縣勿來の在を飛び出して、苦學力行拓殖大學卒業後、臺灣銀行本店に勤務し、それから支那の福州、香港と轉じ臺灣銀行が、スマランに始めて支店を設けた頃に、支店長としてスマランに来て活動したのであつた。

その頃、獨逸人所有の今の農場——當時藍を製造して居た——を五ヶ年賦拂ひの契約で引き受けたのであつた。戦後獨逸の藍の生産地が割讓せられて、藍が出来なかつたので、藍は非常に高價に賣れたが、その間に契約の金を済しつゝゆくのには、大分苦心したらしい。が兎に角、藍の好景氣と努力の賜もので、戦時利得税の追徴までも済してしまひ、今では完全に自己の所有とする事が出来た。

今は約一千バウの水田がある。小作料は上等地一バウ六十盾、下等地四十盾、平均五十盾で、畑に作つたタビオカは、三分の一だけ小作料に收めさせると云ふ。

根本君所有の裏の椰子山に登つて、開けたる田圃を眺める。稻は刈り取られて、牛や山羊などが放牧されて居る。田圃の間には、竹や椰子で囲まれた土人部落が見える。部落や田圃が遠く霞す

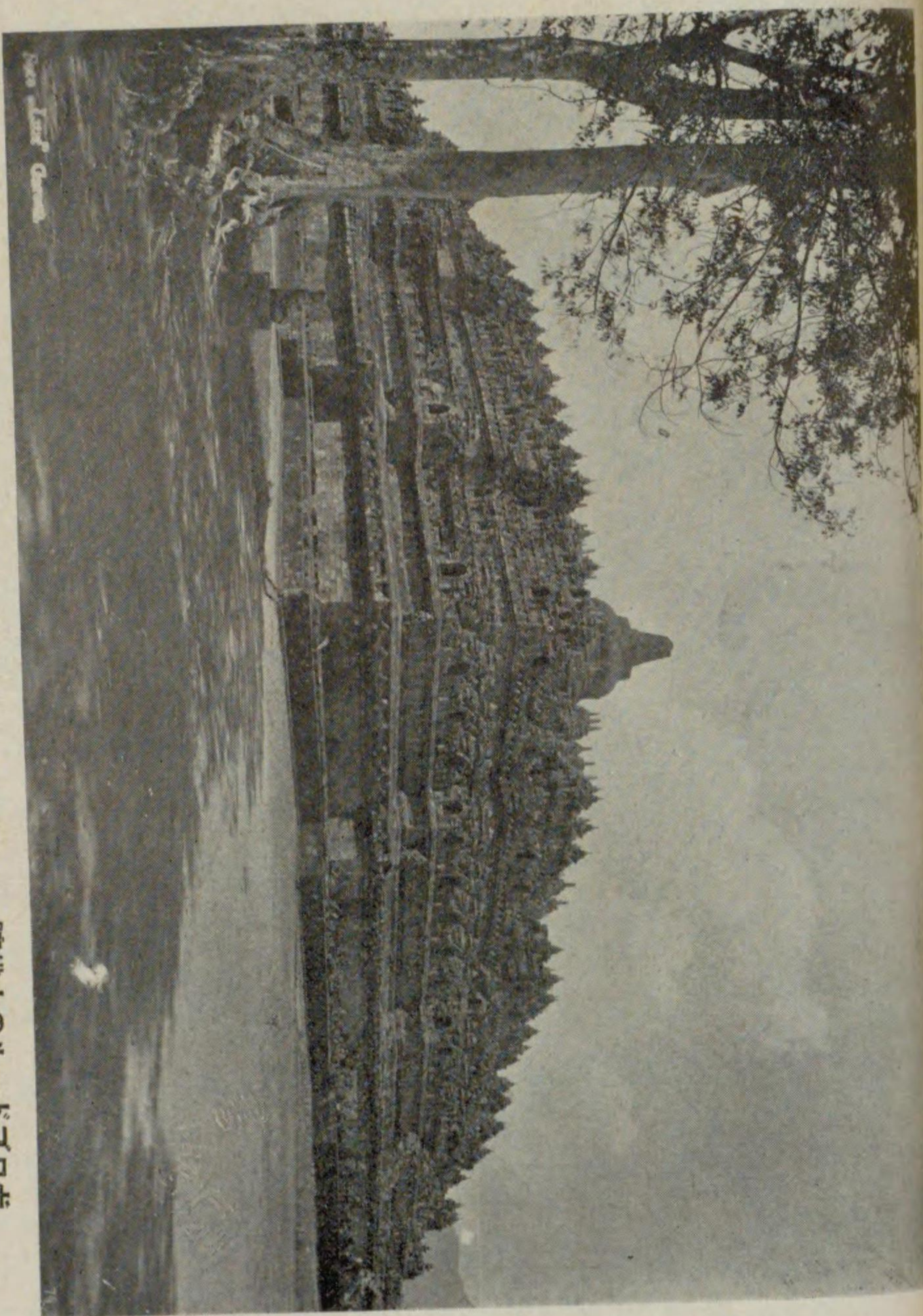
んで居る。この廣漠たる二千三百バウと云ふ沃野も、これが護謨園や原野なら、さう大した廣さにも感じないが、しかし幾村かを抱括した四百八十餘万坪は、随分廣大なものであると思つた。

この土地は、ソローからの近道の方は橋が落成して居らぬから、廻り道をするので四十八キロあるが、眞直にゆけば二十五キロ位であらう。氣温は夜が七十二三度（最低六十六度）、日中は八十五六度迄上る。夕食後にはゾツと涼しくなる。浴衣の下に毛織のチョッキを着た。家の中には、屋守がクワツク／＼と鳴く。外には、遠くひき蛙の鳴く聲が聞える。

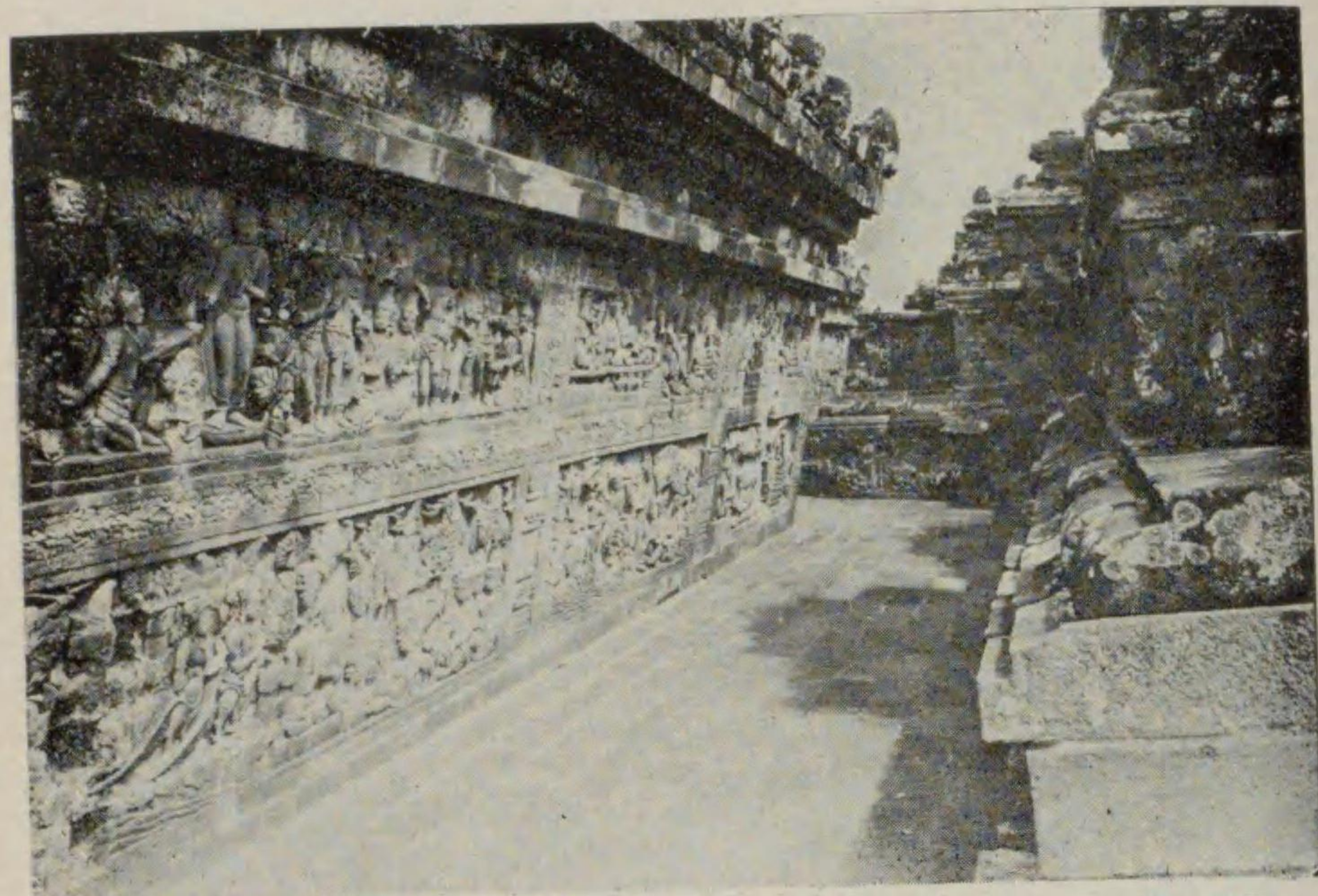
夜警の土人は玄關石段に来て坐る。夜九時になる。玄關口にある鐘をチャン／＼鳴らすと、近い畑の夜警が「コボ」と云ふ警木を叩いて合圖する。畑から畑に相傳へて次の警木を叩く。一時毎にこの音が聞える。彼等は夜警賃月七盾五十仙で、朝になると一日の仕事をする。爪哇人は眠る必要がないかときくと、夜中彼等は用もないのに、ウロウロ道を歩いたり、雑談したり、樂器を叩いたりして、亦一日中普通の勞務に堪える不思議な人種である。女は一朝朝から晩まで働いて十五仙、男は廿五仙であるが、それでも毎日倍數位は、今日は御用はないか、と聞きに来るさうである。

土人の生活は頗る簡単なものである。生活費としては一日八仙か十仙しかからぬ。どうしてこんなことで生きて行けるかと云ふに、彼等は米と乾魚か魚の半ば腐つたやうな臭氣ふんぶんたる鹽からのやうなものとか胡椒があればそれで満足して居る爲めである。朝田圃の處を歩いてみると、四辻の處に農夫が集まつて、鉄をかつぎ乍ら何か喰べて居るが、彼等は朝飯は各自の家でこしらへず、買喰で間に合はせるのである。晝には家に歸るが、タピオカを一本畑から引き抜いて来て、塵埃を集めて火を焚きこれを蒸し焼きにして間に合はせる。實に簡単である。衣服にしても、數枚のサロンにシャツ一枚あれば年中間に合ふ。家は竹の柱に竹の皮を網代に編んだ壁で、床は土間で寝る處はそこを布で半分被へばよい。屋根は瓦葺きである。家全體の中で、一番金のかゝつて居るのが、この瓦である。

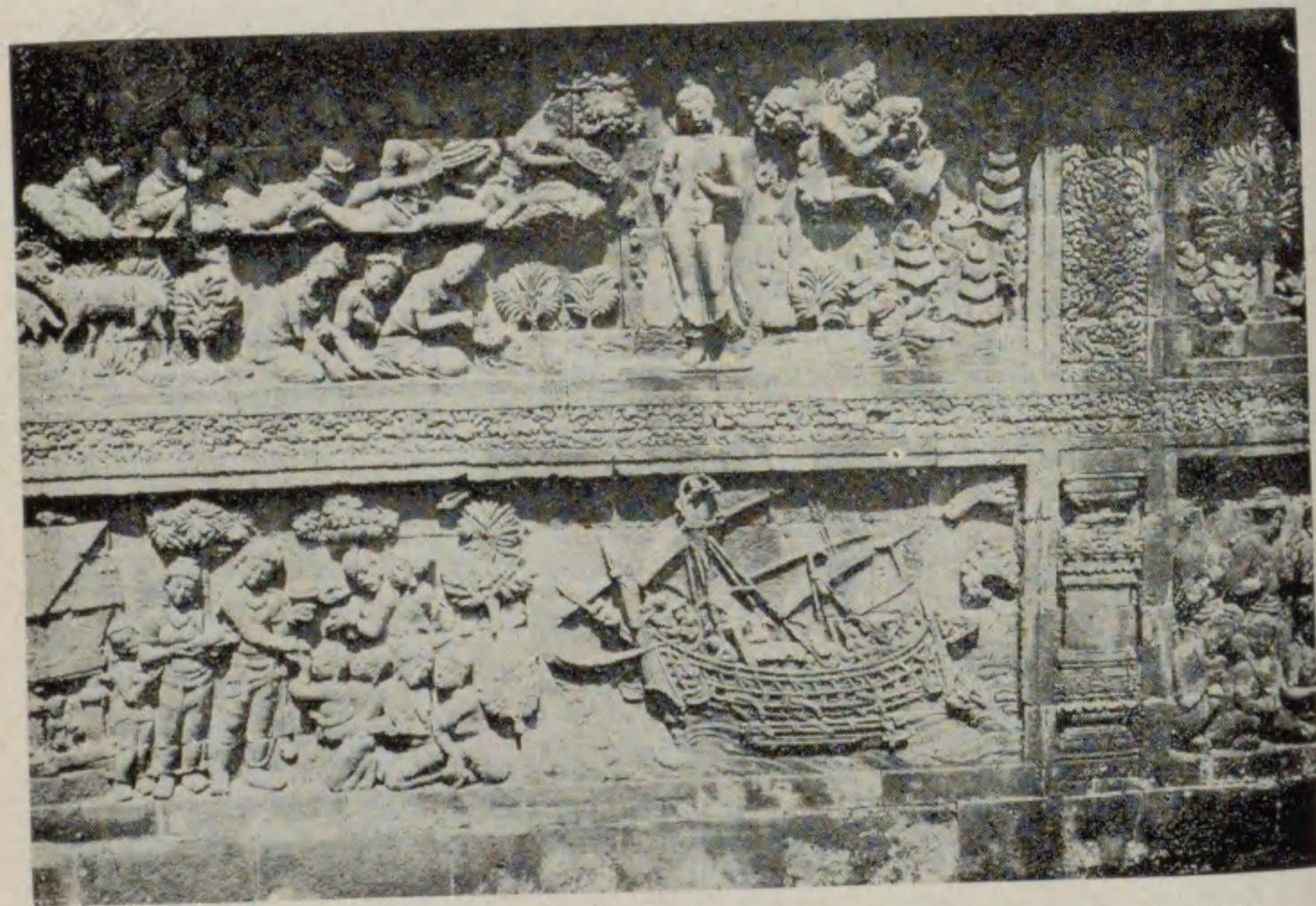
扱タピオカであるが、タピオカは丈け二メートル位に生長する植物で、根本に大きな芋がついて居る。ブラジルではこれをマンジョカと云ふ。原産地は元來南米である。南洋でオピカと云ふが、これから採る澱粉が貿易品としてタピオカで通つて居るのである。澱粉としては色々の料理につかふ。日本ではアルコールの原料にも用ゐる。ブラジルでは香煎のやうにして、フェジョ



とむ望く遠、だ觀偉大最るけ於に土全哇瓜はループロボ 隨佛大のループロボ
メセの揃一てね重み積くなと万十幾を材石の形方長部をがれそでうやの山築の色鼠
蓋仰大のこるす有を面基の坪餘千七、るあてれか築にすれさ用使も鏡の個一もトン
ふいとるあ丈三十でま頂の塔圓たつ祭を像佛の頂絶はさ高ち立り成りよ層十は

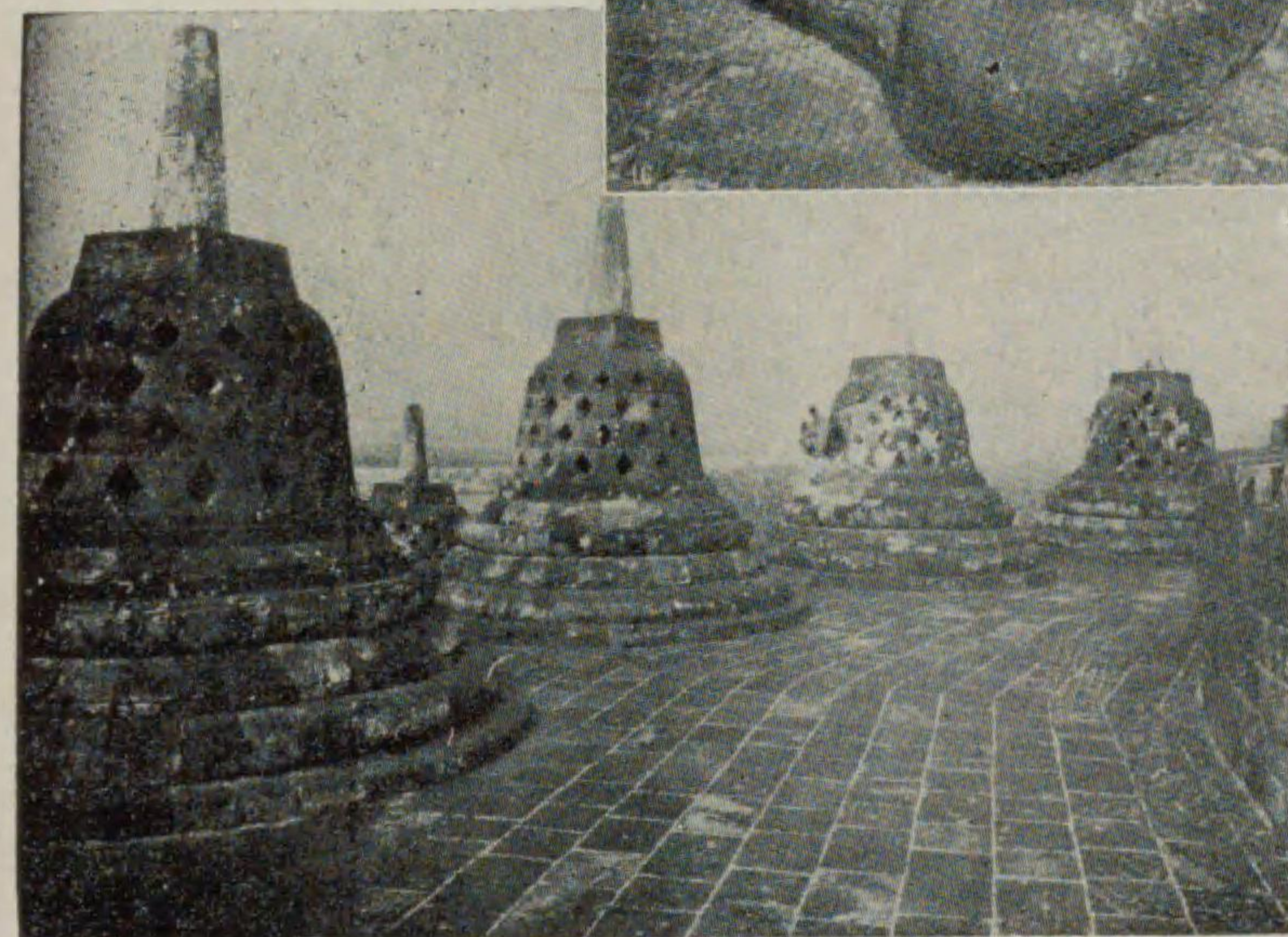


本めじはを記代一迦釋獄地はに廊廻るぐめを座台の層五 廊廻
。るゐてれさ刻彫が畫壁の蹟事の々等經嚴華經喻譬譯生



史の造石」で寫實の俗風相世の時當て記代一迦釋は彫浮 畫刻彫
。ふいとる瓦に哩三長延るあでのもるれは謂と「詩

覆と鉢覆の層各 像 佛
安が像佛もに間中のと鉢
く驚のこ るゐてれさ置
後の紀世八は事工大きべ
ヤシくしらたつま始に半
いと立建の王ラドンレイ
。るれさ定推がとこふ



二第座二十三はに層一第の座臺形圓の層三 鉢 覆
そてつあが鉢覆の座六十はに層三第座四十二はに層
。るゐてれさ置安が像佛れぞれ

蘭領印度で砂糖の生産地は爪哇である。一九二二年の植付反別は二十二万七千バウ、砂糖産額は百七十七万九千六百噸、工場数は百八十二であつた。今もその見當である。

爪哇の糖業は、西曆四一年支那の僧侶法顯が、印度留學の歸途爪哇を訪問した時、既にこの地では甘蔗の栽培をやつて居つたと云ふから、相當古いものである。けれども、製造工業としての砂糖業は東印度會社のバタビヤ附近に工場を起したのがその始めであつた。

その後支那人が小製糖工場を設けるやうになつて、會社はこれを買ひ歐洲に輸出して利益を得て居つた。その後有名なる強制栽培制度を實施し、土人に命じ地方農地の五分ノ一を割き甘蔗の

爪哇の砂糖

ン(豆)にふりかける。これは毎日の食膳に必要なものとなつて居る。爪哇ではこれを餅のやうなものにして芭蕉の葉に包んだものを驛々で賣つて居る。

この邊一體は甘蔗の栽培地である。根本君の案内でコロニヤルバンクの製糖工場を觀に行つたのである。



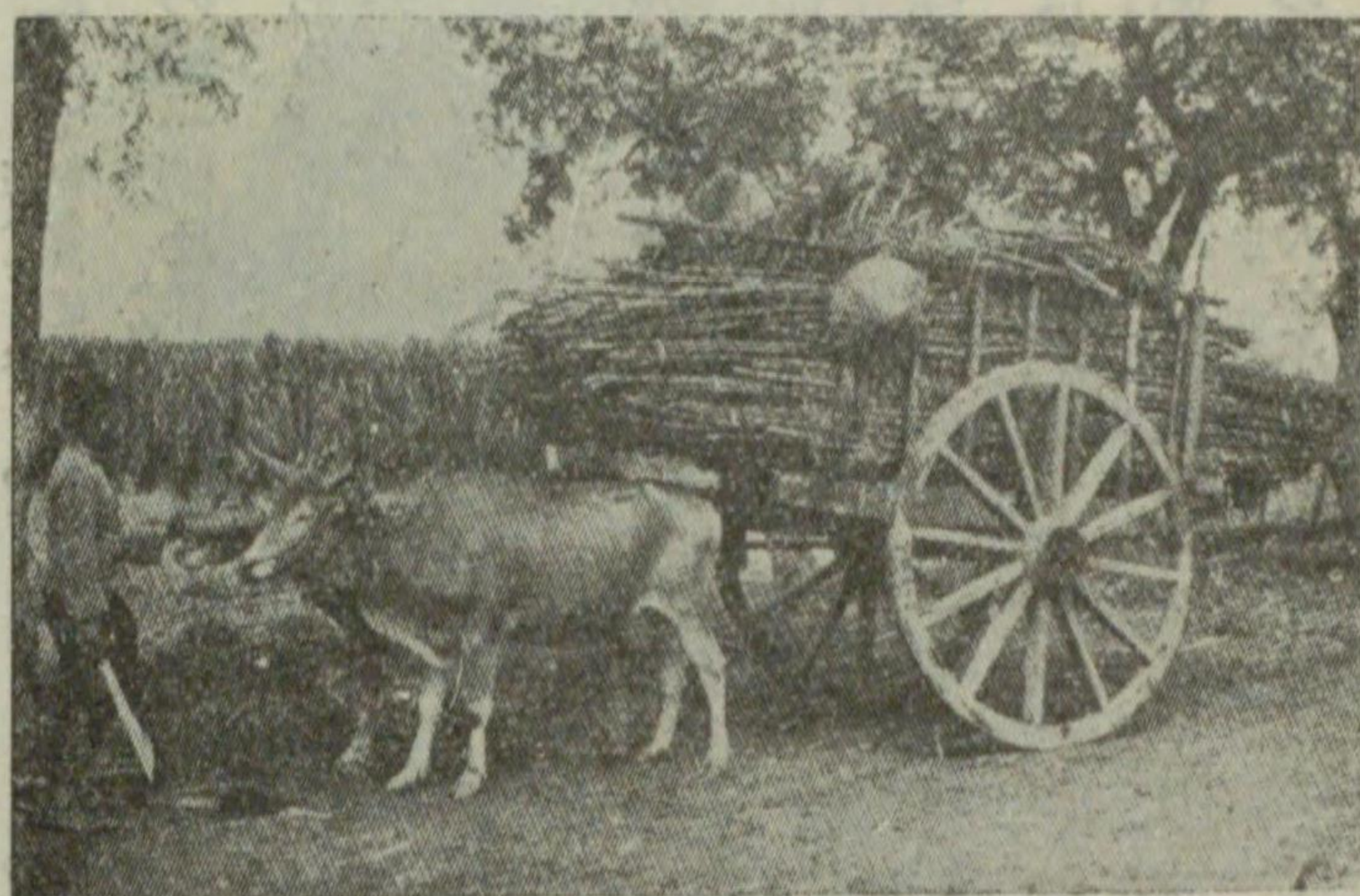
ロキ二十郊西のヤヅクヨヅは蹟佛のシナパンラブ **シナパンラブ**
るあでのもるる謂と「玉賣小」てべ比にルードプロボるあに處の



みてれは謂もと所難避の王は(ーリサンマタ)城水 **城水るせ廢荒**
る居てち充が氣の慘凄し廢荒は今うらあで宮別のめたの暑避がる

栽培を強制し、これを特許された工場に公定価格で引渡し、工場は一定の価格で政府に収めることとした。が、これは餘り國庫を富ます譯にゆかなかつた。政府直營工場も非常の損失を招いた。その後爪哇糖業界に一大危機が到来した。それは一八八二年初めて

甘蔗を牛車で工場に運ぶ



チェリボン州に發生したセレ病が東部地方にまで傳播し數年に亘つて猖獗を極め、爪哇糖業も全く絶望に陥らんとする情態となつたことである。次に、甜菜糖は獨、佛その他の諸國で盛んに奨勵したから急激の發展を遂げ、一八八三年には世界的生産過剰を來たし、暴落また暴落破綻百出、財界は全く混亂の情態に陥つたことである。これが第二の問題であつた。

この難局に處して爪哇の糖業者は、學者の奮起となり遂に死中活を求むるの奮闘は爪哇糖業界に一新生面を開くこととなつた。資金の薄弱なものは農業銀行に買收せられ糖業統一の機運を促進した。次に當業者は製糖工程の改良を圖り、他の企及すべからざるまでに生産費の節減を圖つた。各地に試験所が出来、糖業聯合會が起り、優良なる新苗種も發見された。そして爪哇糖業を安全ならしめる基礎を築く迄に至つた。この驚嘆に價する成功は科學と資本と努力の賜だと謂はれて居る。米西戰爭の結果米國が玖瑪糖の保護を始めたので、爪哇糖は英領印度に向つてその販路を見出した。今のところは玖瑪との競争である。日本も爪哇の砂糖には御得意中の御得意であつて、産額の四割以上が邦商の買付で、年々八千万程あつたものであるが、臺灣製糖の發達の爲めに殆ど爪哇より輸入の必要がなくなつた。その爲め、山下汽船などは閉鎖した位である。爪哇としてもその影響は大きい。

邦人砂糖農園

邦人砂糖農園としては蘭領東印度農工株式會社の千六百英反、大日本製糖の五千英反、南國産業の二千四百英反などあつたが、今は賣られて大きいものは大日本製糖だけである。この外に豊田君の三十五英反、辻君の三百七十英反などがあるのみである。

苗から砂糖にまで

優良種を作る法

苗は同一地點に栽培して居るうちにだん／＼退化してしまふ。そこで優良種と優良種との花粉交配を人工的に行ひ、こゝに更に優良なる雑種を得ることである。そこで苗木は特に高地に設けてある。セレ病の感染を防ぐのと経済的に品種によりて成熟時期が異なるので、苗木を有つて居て專業にやつて居るものから、必要だけ購入する方が便利である。

苗木

甘蔗には苗木を挿して繁殖させるのと實生との二つある。實生は試験所で新たな品種を作るときにつかはれるのみである。一般は挿木である。苗木を用ふるに二つある。一は新植法で、一は株出し法である。新植法は毎年新に苗木を挿し、その關節の處から發芽せしむる法で、株出し法は刈取るとき前年の古株を残し置き、その切株から發芽せしむる方法である。

植付

一パウにつき一万本位を植ゑる。連年同一の地に同一の作物を植ゑることをしない。大抵は三年輪作を行ふ。三年輪作とは一年甘蔗を植ゑたる地所には、二年目には大豆、玉蜀黍、落花生の類、三年目に米、四年目に亦甘蔗を植ゑるのである。植付の時期は五月から八月迄の乾燥季である。植付の後軽く灌水を通じ入れ、次に肥料を施す。肥料は窒素肥料を主とするが、地方によつては磷酸肥料を併せ用ゐる。肥料の目的は生長を迅速ならしめるがむしろ主眼である。速効肥料の硫酸が用ゐられる。補充として智利硝石や、油粕肥料が用ゐられる。

收穫

成熟には十一ヶ月から十四ヶ月かゝる。莖の糖分が最高に達した頃を見計らひ、收穫に着手する。收穫は翌年の四月から九月迄の乾燥季に行はれる。一時にやるのではなくて、一區劃毎に標本を分析し、最も適當な時期に行ふのである。

製糖工程

刈取られたる莖は、貨車か牛車で工場に運ばる。起重機で高い處に引き上げられ、輸送帶で壓搾機に送られる。こゝで莖はメチャ／＼に碎かれ、汁は悉く搾られて莖の駭骨だけが残る。こ

れは燃料となるのである。搾り出された汁は不透明の灰色又は暗緑色の混り物があるもので、これに石灰汁を加へ、熱を加へ、浮遊物質を沈澱させる。沈澱した滓は濾して糖汁と別けられる。清澄された液汁は真空罐に送られ、蒸發を行へば糖水の濃いものが出来る。真空罐で蒸發させる必要のあるのは、高熱で蒸發させると質を損する心配があるが、真空罐だと低温でも沸騰させ得るからである。次の機械の處に行つて観ると、もう眞白な砂糖になつて居る。

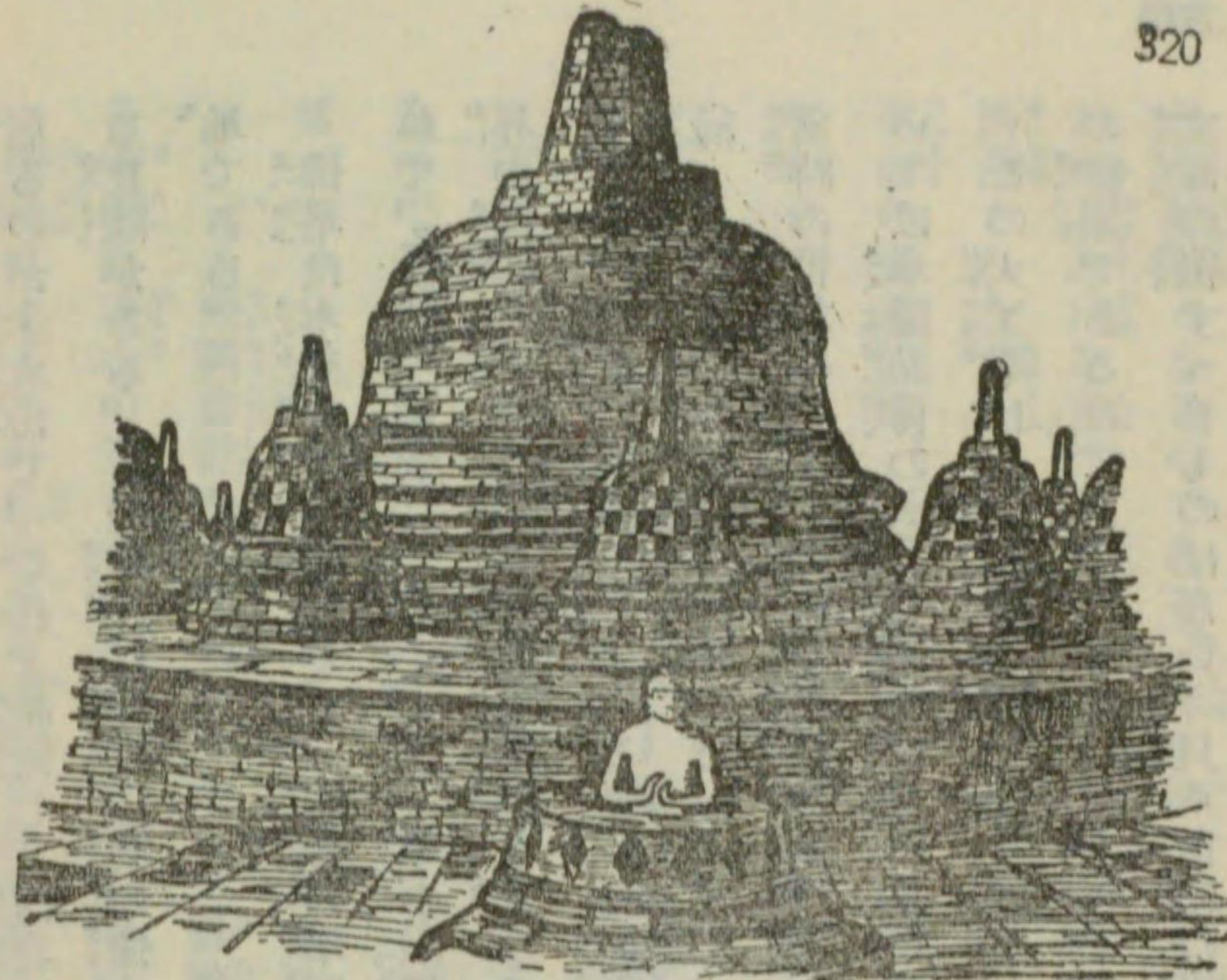
ポロブドールの大佛蹟

何と云ふても、南洋の大工藝で、ポロブドールに及ぶものはない。實に、佛敎の大權威を示すものであり、また上古の爪哇の文明が、如何に進んで居たかを物語るものである。ポロブドールはデヨクジャの北方約六十キロの處にある。デヨクジャの街を抜けると、バドカン・パロンカと云ふ製糖會社の大工場が見える。砂糖畑が多く、竹林、椰子、稲田もある。自動車は坦々たる奇麗な並木の立ち並んだ道路を進んでゆく。一時間半で達する。

佛蹟はクドウの丘の上に建てられてある。東北には富士山の如く屹立して白雲をたなびかせて居るのが赤火山で、これと相對して西北に聳えて居るのがスピン山である。近くに起伏して居る丘陵がある。この丘陵は釋迦涅槃の像に似て居るとか。こゝは沃野遠く開けて如何にも形勝の地である。

佛塔は本來寺院ではなくて、佛骨の奉安所であると云ふ。長方形の石材を幾十万となく積み重ねて、それが一擲のセメントも、一本の鐵柱も、一個のかすがひも用ゐずに層々積み重ねて、世界の驚異とされて居る大建築が成り立つて居る。七千餘坪の基面を有する大伽藍は十層より成つてたち、各層の周圍は廻廊となり、その壁には幾千幾百の精巧なる浮彫がある。四百三十六の壁龕、七十二個の覆鉢、絶頂までが十三丈、浮彫の延長は三哩に亘ると云ふ。浮彫は釋迦一代記で當時の世相の状態、社會の風俗の實寫で「石造の史詩」と謂はるゝものである。一々の佛畫に於いては卓識該博の大谷光瑞師でさへよくはわからなかつたと云ふ程のものである。

この大工事は八世紀の後半に始まつたらしく、完成までには數十年三四代の王様の繼續的努力の結果であると言ふまでもないが、さて何人の寄進で、何人の建立であるかは正確なことは何の文献の徵すべきものはない。只八世紀の後半と云ふことは、サンスクリット(梵字)その他で記



ボロブドール絶頂ノ大覆鉢
七十ニ箇ノ小覆鉢ノ中ニハ仏像アリ

された工事指令の彫刻がある。その字體によつて、この靈場が八世紀の後半(日本の奈良朝時代)、勢力並びなきシャイレンドラ王の建立と云ふことを推定するのみである。

これ程の信仰を集め得た佛教も、マホメツト教が燎原の勢ひで爪哇に侵入して來てからは、佛教は地を拂つて、顧る者もなかつた。ところに、附近のメラピー火山が大噴火をして、十三丈の覆鉢の頂點さへも、現はれぬ迄に埋めてしまつた。その上には、草が生茂り、樹が生え、全く山林と化してしまつたので、健忘性の土人には、すつかり忘れられてしまつた譯である。

一八一一年、爪哇が一時英國の統治の下に屬し、ラツフルス卿が總督であつた頃、學者にその地點を探索せしめ、これを發掘したと云ふことである。庭前にはホテルがあり、店にはビールやサイダーなどを並べ、説明書や寫真などをうつて居る。

クドーの丘に近い茂林のうちにチャンデー・メンヅーと云ふ佛績がある。石造建築で高さ七十尺、中には端嚴微妙なる三體の像、即ち佛と二菩薩の像があつて有名である。

この外チヨクジャの西北郊外十二キロの處にブランパンと云ふ佛績がある。これらは皆ボルブドウルに比べて「小寶玉」と云はるゝものである。

王 城、水 城

チヨクジャは綠樹に被はれた市街で、人口約八万である。アスハルトで舗装された大道には、王城の武士が髪を結び、スレンジン(肩掛)を右肩から左側に綬のやうに下げ、傳家の寶刀クリスを腰にいつかりぶち込んで悠々として濶歩して居る。この地の全市を壓するものはサルタンの王宮と、水城とである。

理事官の承諾を得て王城を観ることが出来た。ソローの王城よりもヂョクジャの方が印度式に緬甸暹羅式を交へた爪哇の美術を應用したものと云はれる。第一門に這入れば廣場があり、その一方に回々教の寺院がある。中央には恰も左近の櫻、右近の橋と云ふが如く、四民が王室擁護の表徴として、ワーリンゲン樹二株を植えてある。この樹が本幹轟立して支根長く延びて周邊を取り圍んで居る。第二、第三門には、洋式やサロンをまいたのや色々の衛兵が衛つて居る。寫眞を撮ることは許されない。第四門をくぐれば王族の邸宅があり中央に大廣間の殿堂がある。天井から四壁は極彩色の上に金泥を施してある。王邸の周圍には百官の事務所、邸宅百工の住宅などがある。今日は殿中に於て王族が舞踊の練習をして居られる。歌手がのどかな調子で、和讃に似たやうな歌を歌ふと、それに合せて、鉦、木琴、鐵琴、胡弓、太鼓の洋々且つ融々たる音楽が始まる。二人の男子は相對して、日本の能樂に似たやうな所作を沈着嚴峻な態度でやる。帶刀の武士が舞樂殿の四方を固め、王族は息をこらし眼をみはつて拜觀して居る。遙か殿前を通るものも腰を屈め、合掌禮拜して過ぎる。殿廂にも又優雅なものである。奈良の都の大宮人の櫻かさして歌ひたる、その古へもしのばれる。舞樂を拜觀し、武器庫、裝飾庫、車庫などさつと觀

て壁外に出る、壁の長さは五キロ以上あると云ふ。障壁の四隅には大砲を装置してある。門の處で貴人の行列に會ふ。従者數名がこれに従ひ長柄の傘をさしかけて行く。ヂョクジャもソローも日本の旅客には一層興趣が深い處である。

ヂョクジャには邦商として、富士洋行、南洋商會、河合洋行の三つの雜貨店がある。皆この町の堂々たるトコである。

○
水城は周回五キロ（一里餘）の城壁を以て圍まれた城で、王城迄地下道があつて王の避難所とも云はれてゐるが、避暑の爲めの別宮であらう。去る年の地震で壞れたまゝに使用もせず修理もせずにある。土人を案内にして、中に這入る。芭蕉や椰子のある土人士族の家があり、濕潤の氣、紛紛として鼻を撲つ。

一番高い處が、天主臺のやうで、王の寢室、王妃、宮嬪の寢室、朝夕の修道場、王子達の食堂、池とか云ふものが各處にある。煉瓦の上にセメントを塗つた城壁は高く聳ゆるも、破壁殘壘、只葛籬が纏ひ荒草離々として夕刻暮色迫る頃であつたから、一層陰慘の氣にうたれた。

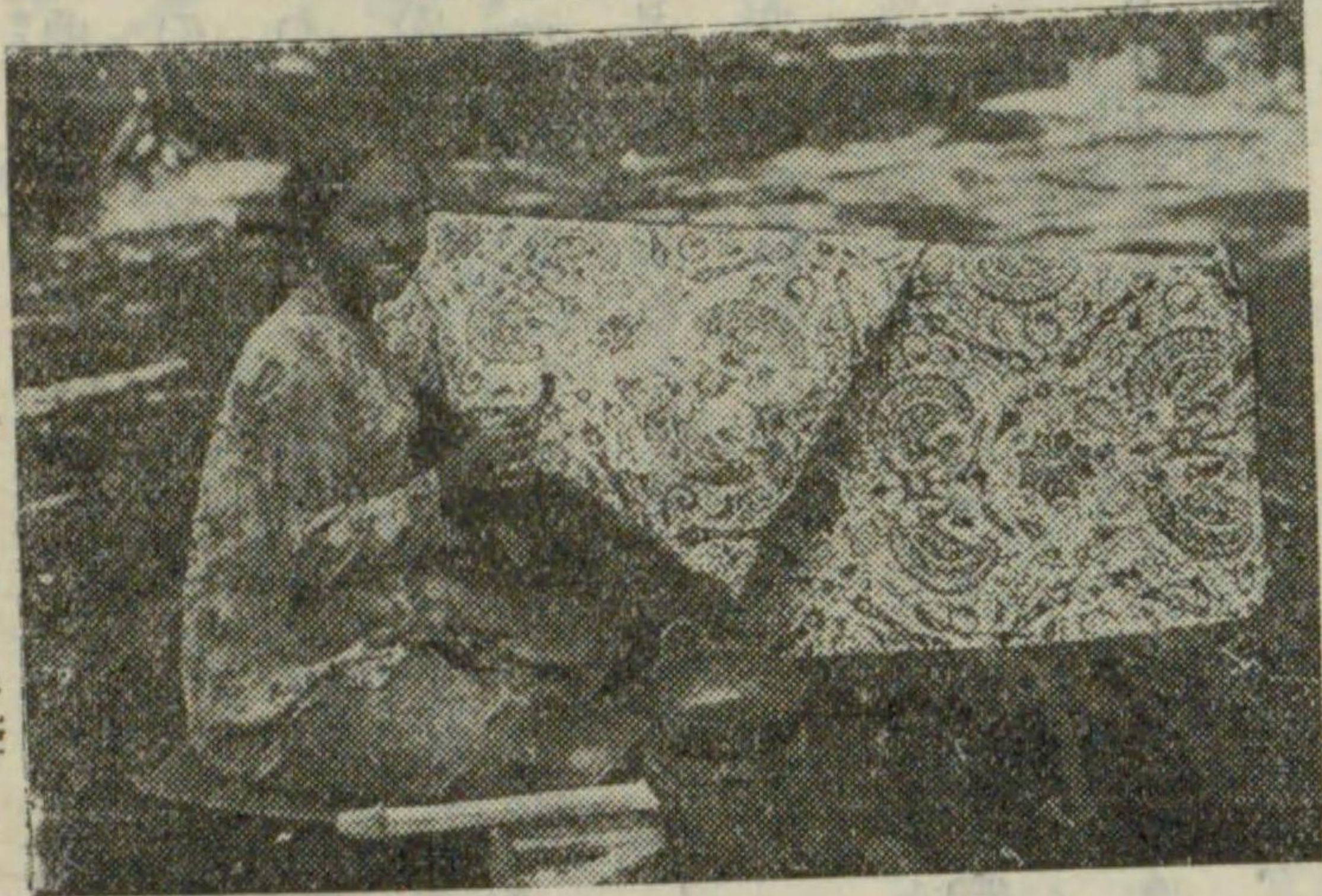
池には泥水があり、名も知らない草が生えて居るが、一々説明を聞くと、池塘には清水満々と
湛え、官女は玉の如き肌を現はして池中に浴し、遊び戯れる。その側の石の廊下を傳ひ行けば、
一つの石室があり、池に面して窓が開かれて居る。國王は餘念もなく、無邪氣な遊びに見とれ給
ひ、その中、花顔玉膚を早速召された、と云ふのである。

王の寢室と云つても石造の部屋で、砂で練り固めたやうなものである。こゝも寢臺迄、水が湛
え得られるやうになつて居る。恐ろしく暗くて陰氣である。大江山の酒吞童子ではあるまいし、
石室に美人を召されたとて、翠帳紅闌の意氣なところがあるではなし、息もつまりさうである。
況や、その側にトンネルを穿つて、何處かに通ずるやうになつて居り、何時でも蒙塵遊ばさる御
用心があるとは。昔の王様と云ふものは氣骨の折れたものである。

城の側に流れがある。こゝに水門があつて堰いて城内に注げば、寢室、池塘、修道場等は漫々
たる水を以て浸さるのである。日ぐれ近くなり廢墟は益々陰慘の氣を加へる。

名物サロンの話

瓜哇更紗の製作



デヨクシヤ、ソローの二つの都は、共にサロンの本場で、模様もこゝのものは地味で滋味があ
る。サロンは馬來人一般に纏ふて居るもので、貴賤貧富を

問はず、男でも女でも、是非なくてはならぬものである。

サロンと云へば布の總稱のやうになつて居る。が、實

はサロンは袴で、カインと云ふのが布である。男の頭に

戴く帽子を作る布が、カイン・トビで、女が外出の時、頭

から上半身にかけて被るのが、カイン・パンデヤン、袴

はカイン・サロンであるさうである。

サロンを作るには、始めに鉛筆で下圖を描いて、その

上を、矢立位の大きさに先が管になつて尖つて居るもの

に、熔した蠟を容れてあるものがあるが、それを以て上

を塗つてゆく。その布を藍に浸す。さうすると、蠟を塗

つたところだけが白くなる。今度は、また丹念に模様を描いて、復た他の染料に浸す。中々手數

のかゝつたものである。これをやつて居るのは女であるが、實に熟練したもので、蠟の管を以て直線曲線自由に描いてゆく。爪哇の女は決して、無器用ではないのだ。近頃は萬事拙速主義で、一枚のサロンに、さう幾日もかゝつて居ては間にあはぬと云ふので、型で押す。染料も爪哇の藍を用ゐたのでは引きあはないから、獨逸製の安い染料を用ゐるやうになつて來た。ホントウの確なもの、描いたものでなくてはいかぬ。値段もズツト違ふ。が、素人眼には判別しにくい。一枚一盾五十仙のものもあれば、數十盾するものもある。

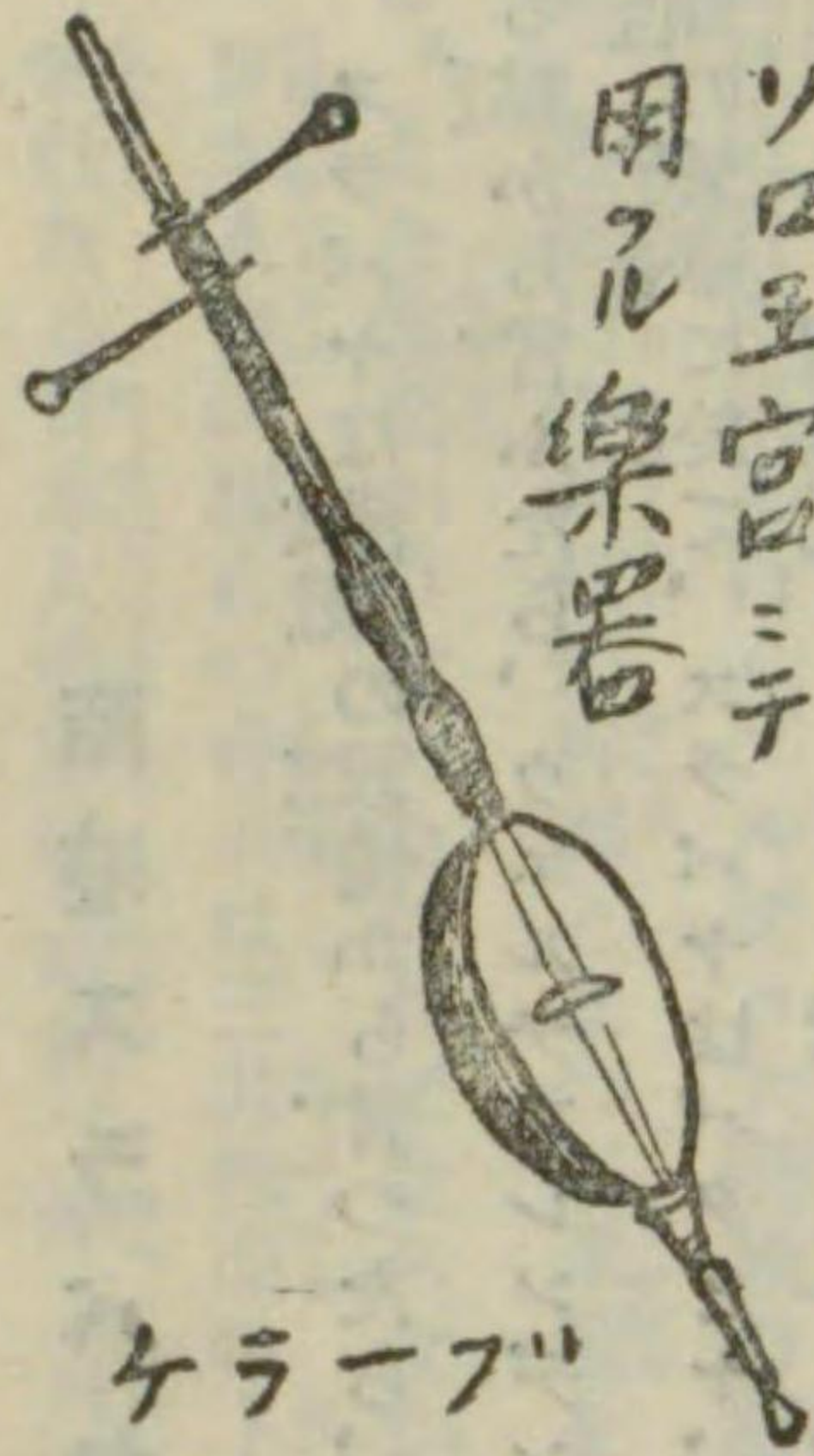
サロンを用ふるときは、最初水に浸して置いて、影干しにすると良い。と云ふのは、いつまでも色がさめないからである。

ソローの王宮

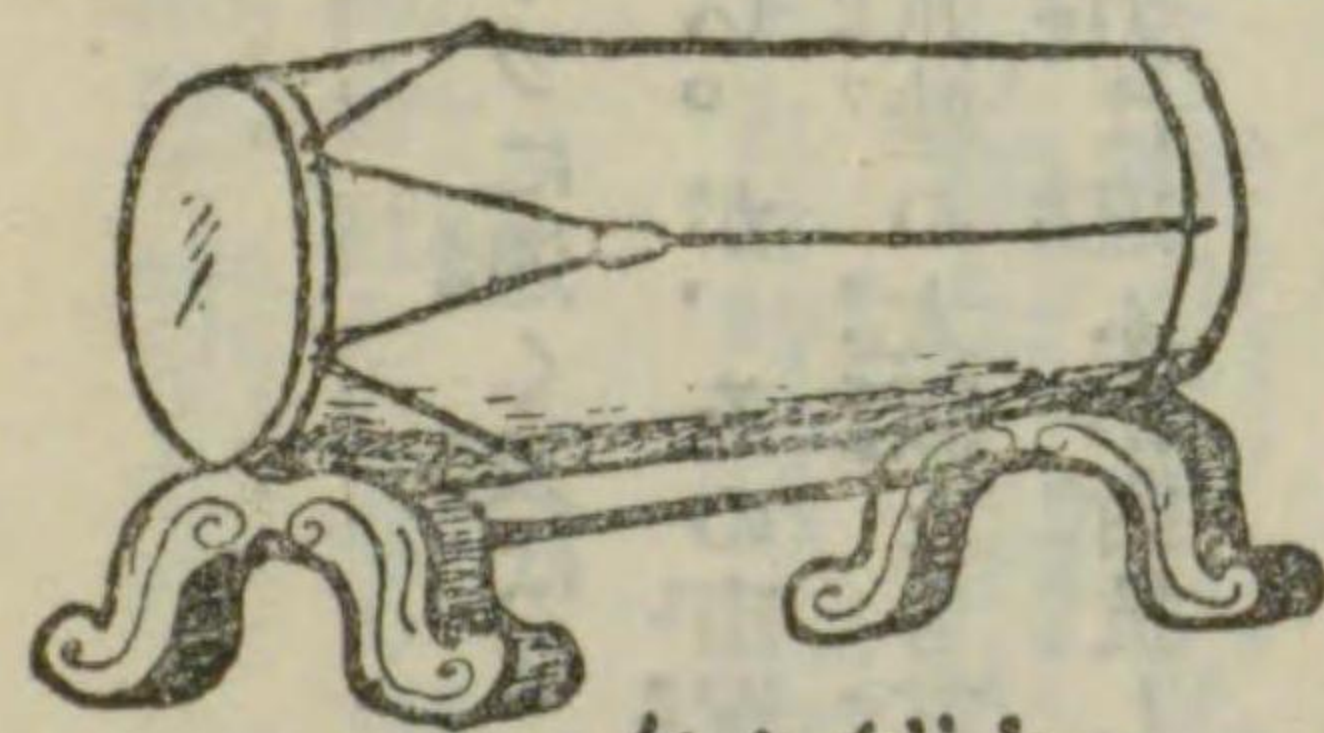
ソロー王宮の宮門、宮城は大體デョクジャのものと同じである。

この日、宮女達の舞踊の稽古があり、伶人二十人が各種の樂器で、優揚たる樂を奏し、のどかな調で歌ひ、唱に合せて美麗な模様の衣裳を纏ひてしとやかに踊る。二十人程が適當の距たり

ソロー王宮ロニテ
用ル樂器



ケラーフ



ケンガン

を置いて整列し舞ふのは優雅なものである。一人に一人の師匠役の女がついて居て腰のひねり具合、手の動かし方など直してゐる。王宮には十歳から二十歳位までの舞姫が二百人も居ると云ふ。これらは皆身分あるものから選び出されたのであつて、容色も藝も優秀なものは女官となり、また後宮にも入るが、さして優秀でないものは家に歸つて更紗を作る。

用事があつて侍女のその邊を通るのが、膝を折つたまゝ、巧に膝行ゆくなど古き繪巻物でも觀るやうである。

商港 スラバヤ

スラバヤは港灣の設備から言つたら、タンジョン・プリオークに遠く及ばない。又、街衢の整へる點から言ふたら、ウエルテフレンデンの瀟洒たる美觀はない。が、その市況の活潑に於て、街頭の繁華に於て、スラバヤはバタビヤ、スマランを凌駕し、爪哇の大阪とも言ふべき街で總人口三十万、歐洲人一万九千と註せられて居る。英領の新嘉坡と力は違ふが對抗して見ようと云ふ、輸出入額約四億盾を算する東印度第一の貿易港である。

スラバヤの所在地が既に爪哇第一の豊沃の寶土である。亦沃野連るスラバヤを中心として、西には豊饒なるレンバン、マジヨンの二州があり、南には風土佳良のケデリ、バスマランの二州がある。東にはマヅラ、バリ、ロンボックの寶島もある。陸上の鐵道は悉くこゝに集まる。海路に至つては、セレベス、ボルネオ、ニューギニア、新嘉坡、濠洲、日本への聯絡は自由に出るのである。砂糖の輸出が盛んである。

昔、元の忽必烈の軍艦が押し寄せたのも、こゝの港であつた。和蘭が十七世紀の初根據を置い

たのは、ハントム（バタビヤの西）と、このスラバヤとであつた。

市街はマス川を中に挟んで長く延びて居る。本市街は、南北五キロと云ふが埠頭と郊外を加へると南北十キロに亘つて居る。バタビヤでは晝寢をするが、こゝでは蘭人でも晝寢をせずに奮闘して居る。スラバヤは活氣満々の都會である。

スラバヤの日本人

スラバヤには約六百人の邦人が居る。矢張りこゝも新嘉坡と同じやうに、或る時期に革新を叫ばれたこともあつた。舊腕力組と新に出來たブルヂョア階級との勢力争覇の時代もあつたが、結局日に日に榮え行くブルヂョア階級の勝利となつて、スラバヤの邦人團の面目が一新した。各會社、各銀行の重役が幹部となつて采配をふるふやうになつた。これは時勢の進歩であり、發達である。また當然からならなければならなかつた。

日本人會の現在の會長は三井物産の卜部氏で、三菱とか汽船會社その他の會社から出て居る。宏壯なる日本人會館は、昭和二年二月に起工して、同八月に至つて竣工した。經費は十二万盾

を投じた堂々たる建物で、會議室、圖書室、食堂、事務室なども備はつて居り、庭前にはテニスコートなどがある。

日本人小學校は構内に連接して建て、ある。學齡兒童が二十七名、幼稚園兒が二〇名である。晝間正科の外、夜學があつて、和蘭語、馬來語を教授して居る。その規模に於て蘭領東印度中に比肩するものは無いのみならず、他に於ても餘り類を見ないのである。

これらを以て見ても、如何にスラバヤの日本人が活動して居るかどうかはれる。
日本領事館がある。

今商社商會の重なるものを舉げて見ると、銀行には横濱正金、臺銀があり。一般輸出入貿易商としては三井物産、三菱商事、大同貿易、亞細亞貿易、下里、太平洋商工、竹腰がある。糖業専門には、大日本製糖、日本砂糖貿易がある。綿布その他兼業に三ツ引が控え、鈴木、有馬、爪哇貿易、千田、南國産業がある。綿絲には日本綿花、東洋綿花、中村、江商、松永、遠藤がある。雜貨商としては南洋、大信、綿屋、八藤和、東明、南印がある。賣藥に翠松堂がある。美術品に大和商會がある。

海運に大阪商船、南洋郵船があり、倉庫業に南洋倉庫がある。
新聞社に爪哇日報の支社がある。南洋協會の商品陳列場がある。理髮店も十軒位はあらう。ホテルに東京ホテル、堀野ホテルがある。料理店にも純日本式の松本樓があり、純日本食の「奴」と云ふがある。

トサリ行

二時迄に荷物を片づけて宿に預け、自動車を出懸ける。鐵道に沿ふて南の方にゆく。今は乾季で道が乾き切つて居る爲め、塵埃濛々と立つ。

バスターム迄はマヅラ海岸の鐵道線路に沿ふて來たが、バスタームで御別れして、愈々山に登ることになる。

プロモ火山は、標高二千二百九十五メートル、海岸の平地から三十餘キロの處に、急に聳え立つて居る山で、幾十幾百の山の巒が、大谿谷、小谿谷をなして居る。この脊梁を迂餘曲折し、百折千折して登つてゆくのであるから、その急峻なることは推して識る可しである。頭足相接すと

云ふのでは、自動車は登れない。が、狹隘な所を曲りくねるので、僅かに車が上り得る程度になつて居る。

谿谷を見れば幾百千仞の深さで、一旦滑り落ちようものなら、何處迄落ちてゆくだらうか、それさへ判らぬ。奈落の底と云ふが、全く、身の毛もよだつやうな深い深い谷が底知れずに下に續いて居る。で、山道の谿谷に向ふ所には、三尺若しくは一間置きに、亭々たる檉柳松を植ゑて、脱線——でない脱道を防いで居る。

何んといふ權木か、さながら鐵砲百合と寸分違はないやうな白い花が、山の残雪かと疑はれる許りに、咲き誇つて居る。斯様な山道を曲りくねり、登り登り、スラバヤを出て二時間と四十分でテンガー峻峯中の別天地トサリに着く。

トサリは海拔一千八百メートルで、爪哇第一等の健康地である。こゝに佐竹君と云ふ人が、寫眞屋を開いて居る。佐竹君は先年、南米で一仕事をやらうとブラジル、アルヘンチナ、パラグアイ等を旅行したのであつたが、資本が無くては農業の經營も出来ないのだと考へてたので、爪哇の幽仙郷トサリに陣取つて、寫眞屋を始めたのである。技術も相當しつかりして居る。又、爪哇

の名勝地を控へて、遊覽客、避暑客を相手にやつて居るので、商賣は大繁昌。老紳士も若い娘も逗留客も、記念撮影を頼み、風景寫眞を買ふ。

佐竹君から山の説明をきく。

プロモの火山に行くのも良いがピナンヂヤンに登れば、火口、砂海、四圍の群峰、雲海、滄海等、一眼に觀られる事。午前二時に起きれば、ホテルで辨當や馬の心配などして呉れる事。興もあれども、馬の方が却て樂な事。途中の危険は更にはない。寒さの用意は、時に寒いこともあり、又左程でもない事もある。これは時と場合で、一概には言はれぬ事。

格別案内者も要らぬやうである。兎に角、グランドホテルに落ちつく事にした。ホテルは坂を下つて、四五町の所にある。ホテル・プロモ、ホテル・カリアなどよりも新しく、遙に大きいらしい。谷と谷との脊梁のやうな狭い地積に在るから、住居と幾つかの建物は、二段に造られて居る。吾々は下の方の客室に案内された。庭園には蕨? の大木の椰子の木やうに見えるのが、四方舎を圍んで植ゑられて居る。

ホテルの庭から見れば、一方は深い谷で、谷底からは白雲が湧き出で、それは折しも夕暮れ時

のことゝて、淡紫、淡紅で彩られた。日本の眞夏に見るやうな雲の峰が、カウキ、ノルゲヨナの峰峯の頂き近く迫つて、或るものは大入道の如く、或は、妙義山の危岩奇峯の如く、實に莊觀、奇觀である。雲の峰の下邊より下界一面は、只漫々たる雲の海。

暮色トサリの街を包んでゆく頃には、電燈煌々として輝き出す。空には一點の雲もない。

ボーイを呼んで、食事は何時かと聞くと、八時だと云ふ。明日は二時起床であるから、早く食事をすませて寝ようと思つて居るのに、斯様な規則なら仕方がない。何んだか非常に寒くなつて来た。シャツを着外套を被る。腹が空いてどうにも仕様がなない。ソーダ水を取り寄せウキスキーを交へて、胃の腑を慰撫し、幾分の暖をとる。

ボーイに、二時に起す事、馬二頭、苦力(馬子)二人用意の事を命ず。ボーイはクダ(馬)ドア(二)ヤイヤ、オラン(人)ドア、マカン(食事)スス(牛乳)ロテ(パン)ダギン(肉)ヤイヤ、と一々判つて居るといふ風だ。

先に、寢臺に毛布二枚あるのを検めて置いたが、不安心だ。尙二枚毛布を持つて来いと命ず。毛布はカイン(布)パナス(暖)と教はつたが、暖かい布丈けでは不安心であるから、今一ツ毛

布(セリモーツ)と念を押す。これもボーイはヤイヤと領いた。

ピナンゲヤンの著者と馬子



この膝掛はブラジル以来、身邊に種々の用務を勤めて居る、ブラジルで、板張の腰掛の下等車

部屋に這入ると、後からボーイが、毛布二枚を抱へて来た。武井氏は西洋舶來、無類飛切の毛布を始終抱へて御座るから、この點毛頭心配がない。毛布四枚は大袈裟で、これなら日本の酷暑でも、心配はない筈ではある。が、暑さになれると、寒いのが苦になるものと見える。

眞夜中、ボーイがコツ、コツ、戸を叩く。時計を見れば、二時だ。起きて支度をする。ボーイはコツピーと、ビスケットを持つて来る。

箱根主人の登山しての話には、手が冷たくて、手綱持つ手に感じがなくなつて来た、と云ふのであつたから、用心專一とタオルを首に捲き、膝掛を赤毛布式に被る。